

教科等別ワーキンググループ等の議論の進捗状況等

○言語能力の向上に関する特別チーム・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

【第一回：10月22日、第二回：12月18日、第三回：1月13日、第四回：3月3日
第五回：5月12日】

○国語ワーキンググループ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18

【第一回：11月19日、第二回：12月14日、第三回：1月19日、第四回：2月19日、
第五回：3月14日、第六回：4月20日、第七回：5月17日、第八回：5月31日】

○外国語ワーキンググループ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44

【第一回：10月26日、第二回：11月30日、第三回：12月11日、第四回：12月21日、
第五回：1月12日、第六回：2月23日、第七回：3月22日、第八回：4月26日、
第九回：5月30日】

○社会・地理歴史・公民ワーキンググループ・・・・・・・・・・・・・・・・ 89

【第一回：12月7日、第二回：1月18日、第三回：1月25日、第四回：1月28日、
第五回：2月8日、第六回：2月29日、第七回：3月4日、第八回：4月6日、
第九回：4月11日、第十回：4月22日、第十一回：4月27日、第十二：5月13日、
第十三回：5月26日】

○理科ワーキンググループ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 133

【第一回：11月10日、第二回：12月14日、第三回：1月14日、第四回：2月5日、
第五回：3月9日、第六回：3月29日、第七回：4月26日、第八回：5月25日】

言語能力の向上に関する特別チームにおける検討事項

1. 「国語科」及び「外国語科・外国語活動」を通じて育成すべき言語能力について
 - ・ 育成すべき資質・能力の可視化について
 - i) 何を知っているか、何ができるか（個別の知識・技能）
 - ii) 知っていること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力等）
 - iii) どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びに向かう力、人間性等）
 - ・ 他教科における言語能力の育成との関係について
2. 言語能力を向上させるための、「国語科」及び「外国語科・外国語活動」における指導内容の系統性について
 - ・ 目標・指導内容（当該教科において育成すべき資質・能力）等全体に関して
 - ・ 言語の仕組み（音声、文字、語句、文構造、表記の仕方等）に関して
3. 言語能力を向上させるための、「国語科」及び「外国語科・外国語活動」相互の連携について
 - ・ 目標・指導内容（当該教科において育成すべき資質・能力）等全体に関して
 - ・ 言語の仕組み（音声、文字、語句、文構造、表記の仕方等）に関して
 - ・ ローマ字学習の取扱いについて
4. 効果的な指導の在り方について
 - ・ 教科担任制の中・高等学校における連携の在り方
 - ・ 短時間学習の活用
 - ・ ICT等の活用

言語能力の向上に関する特別チームにおける これまでの議論の取りまとめ（案）

1. 言語能力の重要性について

(1) 「言語」と「言語能力」について

言語は、文化審議会答申（平成16年2月3日）¹が国語力について指摘するように、知的活動、感性・情緒、コミュニケーション能力の基盤として、生涯を通じて個人の自己形成に関わるとともに、文化の継承や創造に寄与する役割を果たすものである。

中央教育審議会答申（平成20年1月17日）²では、児童生徒の思考力・判断力・表現力等を育むために、記録、要約、説明、論述といった言語活動の充実が提唱された。これを踏まえ、平成20年3月に告示された小学校・中学校学習指導要領及び平成21年3月に告示された高等学校学習指導要領では、各教科等において、言葉による記録、要約、説明、論述、討論のほか、歌、絵、身体による表現など、言語及び非言語による学習活動を「言語活動」として重視し、その充実を図っている。

このように、広義の「言語」には、日本語や英語などの個別言語における話し言葉や書き言葉（文字）のほかに、数字や音符なども含まれ、また、「言語能力」は、話し言葉や書き言葉以外の言語や非言語をも含めた広範な能力として捉えられる場合もあるが、本取りまとめにおいては、「言語」は、日本語及び英語などの個別言語における話し言葉や書き言葉のことを指すこととし、それ以外の数字や音符などを指し示すときは、その都度、それらを明記することとする。³

(2) 教育課程全体を通じて育成すべき資質・能力と言語能力について

育成すべき資質・能力の中でも、言語能力を構成する資質・能力は、子供たちの学習や生涯にわたる生活の中で極めて重要な役割を果たすものである。

¹ 文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」（平成16年2月3日）

² 中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」（平成20年1月17日）

³ 「言語」と「言葉」は、同じ意味で用いられる場合が多いが、本取りまとめにおいては、日本語や英語等個別の言語体系に関して表現する際や、「言語能力」「言語活動」のように熟語として用いる場合、「言語と言語能力」のように熟語と並べて用いる場合には「言語」と記載し、個別の言語体系に依らず、共通のものとして表現する際や、言葉遣いや語気なども含めた表現の総体として用いる場合には「言葉」と記載する。

子供は、乳幼児期から身近な人との関わりや生活の中で言葉を獲得していき、発達段階に応じた適切な環境の中で、言葉を通じて新たな情報を得たり、思考・判断・表現したり、他者と関わったりする力を獲得していく。教科書や教員の説明等から新たな知識を得たり、事象を観察して必要な情報を取り出したり、自分の考えをまとめたり、友達の思いを受け止めながら自分の思いを伝えたり、クラスで目的を共有して協働したりすることができるのも、言葉の役割に負うところが大きい。

このように、言語能力は、国語科や外国語活動・外国語科のみならず、全ての教科等における学習の基盤となるものである。例えば、「論点整理」が提示した資質・能力の三つの柱に照らせば、以下のように考えることができる。

) 知識・技能

学習内容は、その多くが言葉によって表現されており、新たな知識の習得は基本的に言葉を通じてなされている。また、言葉を使って、知識と知識の間のつながりを捉えて構造化することが、生涯にわたって活用できる概念の理解につながる。

具体的な体験が必要となる技能についても、その習熟・熟達のために必要な要点等は、言葉を通じて伝えられ理解されることも多い。

) 思考力・判断力・表現力等

教科等の特質に応じ育まれる見方・考え方を働かせながら、思考・判断・表現するプロセスにおいては、情報を読み取って吟味したり、既存の知識と関連付けながら自分の考えを構築したり、目的に応じて表現したりすることになるが、いずれにおいても言葉が重要な役割を果たしている。

) 学びに向かう力、人間性等

子供自身が、自分の心理や感情を意識し統制していく力や、自らの思考のプロセスを客観的に捉える力(いわゆる「メタ認知」)の獲得は、他者からの言語による働き掛けや思考のプロセスの言語化を通じて行われる。また、言葉を通じて他者とコミュニケーションを取り、互いの存在について理解を深めていくことにより、思いやりや協調性などを育むことができる。

このように、言葉は、学校という場において子供が行う学習活動を支える重要な役割を果たすものであり、全ての教科等における資質・能力の育成や学習の基盤となるものである。したがって、言語能力を構成する資質・能力の向上は、学校における学びの質や、教育課程全体における資質・能力の育成の在り方に関わる重要な課題として受け止める必要がある。

(3) 言語能力に関する課題について

本特別チームにおいては、子供たちを取り巻く言葉に関する課題について、以下のような指摘がなされたところである。

- ・言語能力は、それぞれの発達段階に応じた差異はあるものの、論理的に組み立てて物事を考える論理的思考の前提となるものであり、全ての子供たちに身に付けさせる必要がある能力である。
- ・情操、情感が発達していく中での中心的要素が言葉であり、言葉によって自分の思いや感情を意識化することで、自分の感情をコントロールすることができる。このため、言語能力を支える心をいかに育むかが重要である。
- ・子供たちの人間関係の問題に、言葉によるコミュニケーションが深く関わっている。例えば、言葉をネガティブに使って人を傷つけたり、自分が話したり書いたりしたことが誤解なく相手に伝わるといった思い込みによって人間関係の摩擦が生じたりすることがある。また、インターネット上で一方的に情報等を大量に発信するという現代社会においては、子供たちには、他者の存在を意識しながら発信する力や他者に共感する力も身に付けさせる必要がある。
- ・言語の背景にある文化的規範を理解していないと、その言語を適切に使うことは難しい。言語を学ぶことは、その言語を創造し継承してきた文化や、その言語を母語とする人々のものの見方や考え方を学ぶことでもある。
- ・日本人の母語である日本語はほぼ無意識に習得できているため、外国語も日本語と同じように習得できるという思い込みが生じている一方、日本語と外国語の文の構造や語彙、表現などの表面的な違いから、日本語と外国語は全く異なっているもの、学習者が理解しづらいものであるという思い込みも生じており、この両面が外国語の習得の妨げになっている。

2. 言語能力を構成する資質・能力について

(1) 言葉の働きと仕組みについて

日本語も外国語も、言語として同じ働き（機能）を持っている。例えば、事物の内容や自分の考え・意図を伝える機能や、相手に行動を促す機能などのほか、言語そのものを語るメタ言語的機能などがある。また、音声や文字を伴い他者に伝達する道具としての機能と、内面化された思考のための道具としての機能⁴の二つに分けることもある。

このような言葉の働きにより、私たちは、時間や空間の制約を超えたコミュニケーションや思考を行うことができる。

また、日本語をはじめとする様々な言語は、言語としての共通の基盤と、それぞれの固有の特徴（仕組み）を持っている。

⁴ 内面化された思考のための道具としての機能を「内言語機能」と言い、音声や文字を伴わず、心の中で言葉を使って現れる場合もあれば、言語以前の思考や概念として現れる場合もある。

特に、言葉には、世界を切り分ける力（分節する力⁵）があり、私たちは、言葉の習得とともに、言葉が持つ概念によって分節化しながら世界を認識している。このため、使用する言語が異なれば、世界の認識の仕方も異なることが知られている。このことは、言語の習得に当該言語を生み出した言語文化の理解が欠かせないことを示している。

（2）言語能力を構成する資質・能力の三つの柱について

本特別チームにおいては、言語能力を構成する資質・能力の三つの柱について、別紙1のとおり整理したところであり、その骨子については以下のとおりである。

）知識・技能

言葉の働きや役割に関する理解、言葉の特徴やきまりに関する理解と使い分け、言葉の使い方に関する理解と使い分け、言語文化に関する理解、既有知識（教科に関する知識、一般常識、社会的規範等）に関する理解が挙げられる。

特に、「言葉の働き、役割に関する理解」は、言葉そのものに対するメタ認知のことであり、言語能力を向上する上で重要な要素である。

）思考力・判断力・表現力等

テキスト（情報）⁶を理解したり、文章や発話により表現したりするための力として、情報を多角的・多面的に精査し構造化する力、言葉によって感じたり想像したりする力、感情や想像を言葉にする力、言葉を通じて伝え合う力、構成・表現形式を評価する力、考えを形成、深化する力が挙げられる。

）学びに向かう力、人間性等

言葉を通じて、社会や文化を創造しようとする態度、自分のものの見方や考え方を深めようとする態度、集団の考えを発展させようとする態度、心を豊かにしようとする態度、自己や他者を尊重しようとする態度、自分の感情をコントロールして学びに向かう態度、言語文化の担い手としての自覚が挙げられる。

⁵ 言葉は、モノやコトを同じ種類の集まりであるカテゴリーに分けている。例えば、日本語では「水」と「湯」を区別して用いるが、英語では温度に関係なく“water”を用いる。つまり、日本語話者は、「水」と「湯」を区別して世界を見ているが、英語話者はどちらも“water”として見ている。このことは、動作を表す動詞などにおいても同様である。このような言語の違いと、それぞれの言語を使う話者たちの世界観や文化の違いについては、多くの研究者によって考察されてきたところである。

⁶ 本取りまとめにおいては、文章になっていない断片的な言葉、言葉が含まれる図表などの文章以外の情報も含めて「テキスト（情報）」と記載する。

特に、「思考力・判断力・表現力等」や「学びに向かう力、人間性等」を整理するに当たっては、これまでの各種会議等の議論の成果を踏まえ、以下の三つの側面から言語能力を構成する資質・能力を捉えている。

創造的思考とそれを支える論理的思考の側面

情報を多角的・多面的に精査し、構造化する力が重要であり、主にこの側面を高めることにより、言葉を通じて、自分のものの見方や考え方を深めようとする態度につながると考えられる。

感性・情緒の側面

言葉によって感じたり想像したりする力、感情や想像を言葉にする力が重要であり、主にこの側面を高めることにより、様々な事象に触れたり体験したりして感じたことを言葉にして自覚することを通じて、心を豊かにしようとする態度につながると考えられる。

他者とのコミュニケーションの側面

言葉を通じて伝え合う力が重要であり、主にこの側面を高めることにより、言葉を通じて積極的に人や社会と関わり、自己を表現し、他者の心と共感するなど互いの存在についての理解を深め、尊重しようとする態度につながると考えられる。

これらの ~ の側面は、言葉を使う場面において、個別に働くものではなく、それぞれが互いに関係しながら働くものである。このため、言語能力の向上のためには、 ~ の三つの側面をバランス良く育成することが重要である。

以上のような言語能力を構成する資質・能力を踏まえれば、言語能力については、言葉に関わる知識・技能や態度等を基盤に、「創造的思考とそれを支える論理的思考」、「感性・情緒」、「他者とのコミュニケーション」の三つの側面の力を働かせて、テキスト（情報）を理解したり文章や発話により表現したりする能力として整理できるものと考ええる。

なお、コミュニケーション能力⁷については、上記の三つの側面のうち、他者とのコミュニケーションの側面を軸としつつ、他の側面（ 創造的思考

⁷ コミュニケーション能力については様々な考え方があるが、文部科学省の有識者会議においては「いろいろな価値観や背景をもつ人々による集団において、相互関係を深め、共感しながら、人間関係やチームワークを形成し、正解のない課題や経験したことのない問題について、対話をして情報を共有し、自ら深く考え、相互に考えを伝え、深め合いつつ、合意形成・課題解決する能力」と定義しており、教育課程企画特別部会における議論においても当該定義が援用されていたところである。

とそれを支える論理的思考の側面、感性・情緒の側面)にも支えられた能力として育成されるものである。

また、人間のコミュニケーションや創造的思考などの諸活動は、言葉によってのみ支えられているものではなく、言葉以外にも、形や色、イメージや、身体の動き、音色やリズムなどの多様な手段が関係している。こうした非言語的な手段に関する資質・能力を、言語能力と相互に関連させながら高めていくことは、感性や情緒等を豊かなものにしていくことにもつながるため、学校教育を通じて、音楽や図画工作、美術、体育等の教育の充実を図ることも必要不可欠である。

(3) 言語能力を構成する資質・能力が働く過程について

別紙1で整理された言語能力を構成する資質・能力は、別紙2のように、テキスト(情報)を理解するための力が、「認識から思考へ」という過程の中で働き、文章や発話により表現するための力が、「思考から表現へ」という過程の中で働いている。

テキスト(情報)を理解するための力

- ・テキスト(情報)の構造と内容を把握し、精査・解釈し、自分なりの整合性のとれた考えを形成する力である。
- ・「構造と内容の把握」、「精査・解釈」、「自分なりの整合のとれた考えの形成」のそれぞれの段階において、別紙1のような、「知識・技能」や「思考力・判断力・表現力等」の資質・能力が働いている。
特に、既有知識・経験によってテキストにない内容を補足・精緻化するなどして推論することや、共通 - 相違、原因 - 結果、具体 - 抽象等の情報と情報の関係性(論理)を吟味・構築すること、妥当性、信頼性等を吟味することなど、情報を多角的・多面的に精査し構造化する力は、テキストの意味を、字句通りというだけでなく理解するために重要な能力である。
- ・なお、「認識から思考へ」という流れではあるが、この流れは常に一方向のものではない。考えを形成しながら、精査・解釈し直したり、構造と内容を把握し直したりするなど行きつ戻りつするものである。
- ・また、テキストの深い理解という点においては、発達段階にもよるが、単に、テキストに表現されている意味を理解するだけでなく、テキストによって得た新しい情報を編集・操作して、自分が既に持っている知識や経験・感情と統合し構造化することや、それをよりどころに、新しい問いや仮説を立てるなど、自分が既に持っている考えの構造を転換することなど、自分なりの整合の取れた考えを形成することが重要である。

文章や発話により表現するための力

- ・表現するテーマ・内容、構成・表現形式を検討しながら、考えを形成・深化させ、文章や発話によって表現する力である。

- ・「テーマ・内容の検討」、「構成・表現形式の検討」、「考えの形成・深化」、「表現」のそれぞれの段階において、別紙1のような、「知識・技能」や「思考力・判断力・表現力等」の資質・能力が働いている。
- ・なお、「思考から表現へ」という流れであるが、「テーマ・内容」、「構成・表現形式」、「自分の考え」は、表現する上で密接に関わり合っている。例えば、「考え」が深化すれば、表現する「テーマ・内容」が変わり、「テーマ・内容」が変われば、より良く表現するために「構成・表現形式」が変わることとなる。

このため、表現した後、または、表現しながら、考えを形成したり深化させたりして、より良い表現にするために、文章を推敲したり、発話を調整したりする力が重要である。

この「認識から思考へ」、「思考から表現へ」の過程を学習の中で行う上で、別紙1の資質・能力の三つの柱のうち、「学びに向かう力、人間性等」が大きな原動力となる。「学びに向かう力、人間性等」で挙げられている態度等が基盤となって、自ら「認識から思考へ」、「思考から表現へ」の過程を繰り返し行うようになり、テキスト（情報）を理解したり、文章や発話により表現したりするための力が育成されることとなる。また、これらの過程を意識的に行うことを通じて、より一層「学びに向かう力、人間性等」が育まれ、さらに「認識から思考へ」、「思考から表現へ」の過程に向かうなどの正の循環が見込まれる。

(4) 言語能力の育成について

言語能力は、別紙1の資質・能力を、別紙2の過程の中で働かせることによって育成されるものである。その際、資質・能力の三つの柱は、それぞれが独立して育まれるものではなく、それらが働く「認識から思考へ」、「思考から表現へ」という過程の中で、相互に関係し合いながら育成されるものである。

例えば、別紙1の「知識や技能」に挙げられている語句や文の成分などの知識や、読み方、書き方などの技能は、言語能力を構成する重要な要素であり、基礎的・基本的な学力として確実に習得させる必要があるが、その習得に当たり、これらの知識や技能を辞書的に蓄積するだけでは、テキストを的確に理解したり、文章や発話により効果的に表現したりすることはできない。

語句や文の成分などの知識は、「認識から思考へ」、「思考から表現へ」という過程の中で、思考・判断・表現しながら、既存の知識や経験と結び付けたりすることなどによって、様々な場面で活用できる構造化された概念的知識として習得されるようにすることが重要である。

また、読み方、書き方などの技能も、「認識から思考へ」、「思考から表現へ」という過程の中で、思考・判断・表現しながら、変化する状況に応じて主体

的に活用できる技能の習熟・熟達に向かうことが重要である。

なお、これは、言語の体系（システム）が、固定的なものではないためでもある。例えば、語と意味は、一対一で対応するものではなく、幅をもった面のようなものとして対応しているものである。また、あらゆる表現は、表現する目的、場面、文脈、状況等によって変化するものである。さらに、言語の体系そのものが、地域や時代によって変化するものでもある。

このため、それぞれの要素を学習しながら、同時に、その要素全体が有機的に結び付いているシステムの仕組みを学習し、その両者が連動しながら常に更新され続けることが重要である。

したがって、別紙2のような、「認識から思考へ」、「思考から表現へ」、そしてまた表現されたものに対する「認識から思考へ」という、資質・能力が働く過程をスパイラルに繰り返すことが、言語能力の向上を図る手立てである。

こうした過程の繰り返しは、話したり聞いたり書いたり読んだりする言語活動を通じて行われる。したがって、言葉の学びは、実際に言葉が生きて働く言語活動を通して行われることになる。その時、同時に、言葉そのものについての学びも行われている。

言葉そのものについて学ぶことは、言葉がどのように成り立っているか、自分がどのように言葉を使っているかという足場を意識させることである。このメタ言語的な感覚や気づきを促したり教えたりすることは、子供たちの言語能力を向上させる上で極めて重要である。

3．言語能力の向上のための言語活動の充実、及び、「国語科」「外国語活動・外国語科」の改善・充実について

(1) 全ての教科等における言語活動の充実について

言語能力は、別紙1の言語能力を構成する資質・能力を、別紙2の「認識から思考へ」、「思考から表現へ」という過程の中で働かせることによって育成される。この過程の繰り返しは言語活動を通じて行われるため、言語能力の向上を図るためには、発達段階に応じて、言語能力を構成する資質・能力を適切な言語活動を通して育成することが必要である。

言語活動には、音声・文字の軸と、表現・理解の軸で4種の活動形態 - 話す、聞く、書く、読む - がある。また、これらの活動が行われている時には、自己の内部だけで展開される「考える」という活動が必ず伴って行われている。

言語活動については、現行の学習指導要領において、全ての教科等において重視し、その充実を図ってきたところであるが、今後、以下の「アクティブ・ラーニング」の三つ視点からの指導改善を実現していくためには、より一層、言語活動の充実を図り、全ての学習の基盤である言語能力を向上させることが必要不可欠である。なお、体験活動についても、同様のことが言える。

【「アクティブ・ラーニング」の三つの視点からの学習過程の質的改善】

- ）習得・活用・探究の見通しの中で、教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせて思考・判断・表現し、学習内容の深い理解につなげる「深い学び」を実現できているか。
- ）子供同士の協働、教師や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自らの考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。
- ）学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。

また、音や色、イメージ、身体表現などの非言語により対象や事象を捉えることを主とする教科（音楽や図画工作、美術、体育等）においては、非言語をどのように言語化するかというところに言語活動の特徴がある。非言語で捉えたことを言葉にするという言語活動を行うことにより、当該教科における自分の学びをメタ認知し、思考・判断・表現してより深い理解につなげる「深い学び」としたり、学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」としたり、自分の感じたことを言葉にすることで他者に伝え、自らの考えを広げ深める「対話的な学び」としたりして、学習過程の質的改善を図ることができる。

また、非言語で捉えたことを、例えたり、見立てたり、置き換えたりしながら言葉にする力を育むことは、自己表現の観点や語彙力向上の観点などから、言語能力の向上に大きく寄与するものである。

このため、次期学習指導要領においては、言語能力の向上のため、全ての教科等において、より一層、言語活動の充実を図る必要がある。

(2)「国語科」、「外国語活動・外国語科」における改善・充実について

国語科においては、小・中・高等学校教育を通じて育成すべき資質・能力を、言語能力を構成する資質・能力の整理を踏まえ、三つの柱に沿って明確化するとともに、言語能力を構成する資質・能力とそれらが働く過程との関係を踏まえ、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」のそれぞれの領域における学習過程と指導事項を整理することを通じて、国語教育を更に

改善・充実することが必要である。

「知識や技能」においては、言葉の働きや役割に関する理解を、「思考力・判断力・表現力等」においては、創造的思考とそれを支える論理的思考の側面、感性・情緒の側面、他者とのコミュニケーションの側面から、バランス良く、テキスト（情報）を理解したり文章や発話により表現したりするための力を身に付けること、単に表現された内容を理解したり表現したいことを表現したりするだけにとどまらず、考えを形成・深化する力を身に付けることを重視する必要がある。

特に、小学校低学年の学力差の大きな背景に語彙⁸の量と質の違いがあるとの指摘がなされている。また、考えを形成・深化する力を身に付ける上で、思考を深めたり活性化させたりしていくための語彙を豊かにすることが必要である。小学校低学年で表れた学力差が、その後の学力差の拡大に大きく影響していることを踏まえると、語彙量を増やしたり語彙力を伸ばしたりする指導の改善・充実が重要である。

また、たくさんの語彙や多様な表現に触れたり、知らないことを知ったり、経験のないことを体験したり、新しい考えに出合ったりして、言語能力を向上させる重要な活動の一つが読書である。このため、小・中・高等学校を通じて、読書活動の充実を図っていく必要がある。

外国語活動・外国語科においては、言語能力の向上の観点から、小・中・高等学校教育を通じて育成すべき資質・能力を整理することを通じて、外国語教育を更に改善・充実することが必要である。その際、言語能力を構成する資質・能力の整理を踏まえ、他者とのコミュニケーション（対話や議論等）の基盤を形成する側面を資質・能力全体を貫く軸として重視しつつ、他の側面（創造的思考、感性・情緒等）からも育成すべき資質・能力が明確となるよう整理することを通じて、外国語教育を更に改善・充実することが必要である。

このため、外国語教育においては、小・中・高等学校を通じて、外国語で他者とコミュニケーションを図る基盤を形成するため、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」、「書くこと」の4技能のバランスの取れた育成を踏まえつつ、外国語を通じて、言語や文化の多様性を尊重するとともに、聞き手・読み手・話し手・書き手に配慮しながら、自律的・主体的に外国語でコミュニ

⁸ 「語彙」の「彙」は集まりの意味。「語彙」とは、言語の基本となる単位の一つである語を、一つ一つの語としてではなく、個々の語が有機的な関係を持って集合する一つの体系として捉えたもの。

ケーションを図ろうとする態度を育成する。あわせて、様々な話題について、外国語で聞いたり読んだりして情報や考えなどを的確に理解したり、それらを活用して外国語を話したり書いたりして情報や考えなどを適切に伝え合ったりすることができるコミュニケーション能力を養うため、小・中・高等学校を通じて一貫した目標、指導内容、学習・指導方法、学習過程、学習評価等の在り方について一体的に検討する必要がある。

小学校中学年においては、これまでの高学年における外国語活動の成果を踏まえ、「聞くこと」「話すこと」を中心とした活動を通じて、発達段階に適した形で言語や文化について体験的に理解したり、外国語の音声等への慣れ親しみ、コミュニケーションへの積極性を育んだりすることを中心とした外国語活動を導入することが示されている。また、小学校高学年においては、これまでの成果・課題⁹を踏まえ、「聞くこと」「話すこと」に加え、「読むこと」「書くこと」の4技能を扱うことを通じて、より系統性を持たせた教科指導を行う外国語科を導入することが示されている。

(3) 言語能力の向上のための、「国語科」と「外国語活動・外国語科」の連携について

本特別チームにおいては、「国語科」と「外国語活動・外国語科」の連携の効果について、以下のような指摘がなされたところである。

- ・日本語と外国語を相対的に捉えることによって、その構造や語彙などの仕組み、それらが有機的に結び付いているシステム、その背景となる文化など、日本語と外国語の違いに気付き、それぞれの理解を深めることができる。
- ・日本語と外国語を相対的に捉えることによって、言語、文化、習慣、時代が違っていても、表面的な違いを超えた深いところでの共通性や普遍性 - 言葉の働き、人間の心や思考の基本は同じだということが理解できる。
- ・論理的思考力や批判的思考力などの汎用的な能力や、発表（スピーチ、プレゼンテーション等）、討論（ディベート、ディスカッション等）、論述などに必要なスキルなど、日本語や外国語の運用に共通して必要な資質・能力を、母語である日本語の学習を中心に育成することで、これらの能力を生かして外国語の学習を行うことができる。
- ・母語である日本語を使って生活している中では、意識的に育成する機会が少ない資質・能力や、外国語における特徴のある資質・能力の育成を、外国語の学習を通して行うことにより、日本語の能力の向上に資する。

⁹ 平成23年度から実施された外国語活動の成果・課題として、児童の高い学習意欲、活動を体験した中学生の成果や変容、指導に当たる教員の肯定的な捉え方、中学校との連携などの成果とともに、「聞く」「話す」だけでなく「読む」「書く」も含めた更なる言語活動への知的欲求の高まり、音声中心で学んだことが中学校での段階で音声から文字の学習に円滑に接続されていないこと、国語と外国語の音声の違いや発音と綴りの関係、文構造の学習において課題があることなどが指摘されている。

- ・単一の言語からは、単一の言語体系の知識、単一の言語体系に依った思考方法、単一の言語で担保されたコミュニケーションの仕方や相手への理解しか学べないが、複数言語を学習することにより、知識や思考、表現に幅ができ、様々な状況に適した思考や表現ができるようになる。
- ・個別言語によらない、上位処理能力に関する側面(推論能力、談話的能力、一般的な世界に関する知識、メタ認知能力など)については、母語の能力と外国語の能力の間で相関が見られる。
- ・それぞれの言語の特徴を相対的に捉えることによって、言葉とは何か、言葉が人々の生活の中でどのように働いているかなど、言葉そのものへの意識(メタ言語意識)が呼び起こされる機会が増える。
- ・メタ言語意識の高まりは、無意識に運用できている日本語への意識の高まりにつながり、言語の学習に対する意欲が育まれ、外国語や言語一般への関心が高まることも期待できる。

また、言語能力の向上の観点から、国語教育と外国語教育をそれぞれ改善・充実しつつ、相互の連携を図ることで、国語で学んだことが外国語の表現活動に生かされたり、国語と外国語の特徴や違いに気付き、国語を学ぶことに対する関心が高まったりするなど、子供の学習に相乗的な効果が見られるとの例が報告¹⁰されているところである。

中央教育審議会の教育課程企画特別部会「論点整理」及びこれを踏まえた小学校部会等の議論においては、小学校中学年における外国語活動や小学校高学年における外国語科の導入に当たっては、言語能力向上の観点から、語順の違いなど文構造などの言葉の規則性に関する気付きを意図的に促す指導や、文字の認識、単語への慣れ親しみ、国語と外国語の音声の違いやそれぞれの特徴への気付き等を促す指導を新たに行う必要があると指摘されている。

また、国語科をはじめ他教科等と関連付けた学習内容や言語活動を設定することにより、思考力・判断力・表現力や、主体的に学習する態度を育成することを重視するとともに、外国語を読んだり書いたりすることを通じて、言葉の働きや仕組みの面白さに気付きながら外国語を活用しようとする態度を適切に評価することが重要であると指摘されている。

このような指摘や取組を踏まえ、言語能力の向上につながる効果的な連携を進めていくためには、小・中・高等学校を通じて、発達段階に応じ、国語科と外国語活動・外国語科の指導内容のつながりを可視化することが重要である。

¹⁰ 小学校を対象とした英語教育強化地域拠点事業の中では、(1) アルファベットの文字や単語などの認識、(2) 国語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴への気付き、(3) 語順の違いなど文構造への気付きなどの取組が行われているところである。また、教育課程特例校における実践についても報告されているところである。

その際、各学校において、言語能力の向上に向けたカリキュラム・マネジメントが実施されやすくなるよう、例えば、指導の連携や順序性、言語活動で扱う題材や種類の連携など、具体的な連携の在り方についてわかりやすく整理していくことが求められる。

具体的には、

- ・指導の連携に関しては、例えば、小学校第3学年の国語科において、ローマ字による表記を指導するとともに、小学校第3・4学年の外国語活動において、ローマ字とアルファベットの比較を通して、アルファベットの認識や文字と読み方の対応について指導することにより、日本語のローマ字表記と英語のアルファベット表記の違いへの気付きを促すことなど
- ・指導の順序性に関しては、例えば、小学校第1・2学年の国語科において主語と述語との関係について、小学校第3・4学年の国語科において修飾と被修飾との関係や初歩的な文の構成について指導した後、小学校第5・6学年の外国語科において、外国語における主語と述語との関係や語順について指導することにより、日本語と英語の文の構成の違いへの気付きを促すことなど
- ・言語活動で扱う題材の連携に関しては、例えば、国語科と外国語活動・外国語科において、「自己紹介」や「道案内」などの同じテーマの言語活動を設定し、相手の求める情報や言語の特徴が異なることを意識した指導を行うことや、国語科・外国語科において、同じ環境問題をテーマにした文章を教材とし、環境問題に関する知識を、教材を読み進めるに当たって必要な既有知識として共通に活用することなど
- ・言語活動の種類連携に関しては、例えば、文章表現（短文作り、小論文等）発表（スピーチ、プレゼンテーション等）話し合い・討論（ディベート、ディスカッション等）などについて、国語科において行い、その方法を学んでから、外国語活動・外国語科において行うことや、パラグラフ・ライティングなどについて、外国語科において行い、その方法を学んでから、国語科において行うことなど

である。

中学校、高等学校においては、教科担任制であることを踏まえると、教員同士の連携が必要不可欠である。特に、言葉を学習する教科である国語科や外国語科においては、言葉で表された内容を学習する教科との連携や、言語活動を行う全ての教科等との連携が求められている。

全ての教科等における言語活動を充実するためには、生徒が話したり書いたりできるという状態が前提として必要であり、生徒が話したり書いたりすることのうち、表現された内容の質は当該教科の指導によるが、表現すること自体の質は、言葉を学習する教科における指導と関わるものであるため、特に、国語教育の充実が求められるところである。

(4) 言語能力の向上に向けて、「国語科」と「外国語活動・外国語科」の連携を強化するための方策について

言語能力は、「国語科」及び「外国語活動・外国語科」が中核となり、学校の教育活動全体を通じて、その向上を図っていくことが必要不可欠である。このため、以下のような事項について必要な方策を講じていくことが重要である。

学校全体としての指導體制

- ・育成すべき資質・能力についての共通理解
- ・学校の教育活動全体を通じたカリキュラム・マネジメント
例えば、言語能力の向上に関する協議の計画的実施や、言語能力の向上を意識した年間指導計画の作成等
- ・「国語科」及び「外国語活動・外国語科」担当教員を中心とする連携体制
など

教員の指導力の向上（教員養成、教員研修等）

- ・言語能力の向上のための教科等を横断した研修の実施
- ・教員養成カリキュラムにおける教科指導法に関する科目において、言語能力のメカニズムの理解やその向上のための指導法についての学習の推進
など

指導内容の連携、教材の在り方、ICT（情報通信技術）等の活用

- ・「国語科」と「外国語活動・外国語科」における学習の連携を意識した言語活動で扱う題材や種類等における連携
例えば、国語科の言語活動で扱われている題材や種類等(日常生活における話題について討論すること、行事等の案内をする文書を書くことなど)を参考に、外国語科においても、同様の言語活動を実施することなど
- ・「国語科」と「外国語活動・外国語科」における学習と、他の教科における学習との連携を意識した指導
例えば、社会科や理科等で習得した知識や考え方をを用いて課題を捉え、議論したりまとめたりする等の教科横断的な発想からの授業展開など
- ・「国語科」と「外国語活動・外国語科」における学習の連携を意識した教材の工夫
例えば、外国語に翻訳された日本の古典、短歌・俳句、現代文等や日本語に翻訳された海外の作品を教材として扱うことなど
- ・「国語科」と「外国語活動・外国語科」における指導の連携や順序性、言語活動で扱う題材や種類の連携など、具体的かつ効果的な連携の在り方が示されている事例の収集・紹介
- ・協働的な学習や、補習指導等における一人一人の進度に応じた学習のためのICT等の活用

など

知識・技能

思考力・判断力・表現力等

学びに向かう力、人間性等

テキスト(情報)を理解したり、文章や発話により表現したりするための力

- 言葉の働きや役割に関する理解
- 言葉の特徴やさまじりに関する理解と使い分け
- 言葉の位相、書き言葉(文字)、話し言葉
- 語、語句、語彙
- 文の成分、文の構成
- 文章の構造(文と文の関係、段落、段落と文章の関係) など

- 【創造的思考とそれを支える論理的思考の側面】
- 情報を多角的・多面的に精査し、構造化する力
- ・ 推論及び既有知識・経験による内容の補足、精緻化
- ・ 論理(情報と情報の関係性: 共通 - 相違、原因 - 結果、具体 - 抽象等)の吟味・構築
- ・ 妥当性、信頼性等の吟味
- 構成・表現形式を評価する力

【感性・情緒の側面】

- 言葉によって感じたり想像したりする力、感情や想像を言葉にする力
- 構成・表現形式を評価する力

【他者とのコミュニケーションの側面】

- 言葉を通じて伝え合う力
- ・ 相手との関係や目的、場面、文脈、状況等の理解
- ・ 自分の意思や主張の伝達
- ・ 相手の心の想像、意図や感情の読み取り
- 構成・表現形式を評価する力

考えの形成・深化

- 考えを形成、深化する力
- ・ 情報を編集・操作する力
- ・ 新しい情報を、既に持っている知識や経験・感情に統合し構造化する力
- ・ 新しい問いや仮説を立てるなど、既に持っている考えの構造を転換する力

- ・ 言葉が持つ曖昧性や、表現による受け取り方の違いを認識した上で、言葉が持つ力を信頼し、言葉によって困難を克服し、言葉を通して社会や文化を創造しようとする態度

- ・ 言葉を通じて、自分のものの見方や考え方を深めようとするとともに、考えを伝え合うことで、集団の考えを発展させようとするとする態度

- ・ 様々な事象に触れたり体験したりして感じたことを言葉にすることで自覚するとともに、それらの言葉を互いに交流させることを通じて、心を豊かにしようとする態度

- ・ 言葉を通じて積極的に人や社会と関わり、自己を表現し、他者を理解するなど互いの存在についての理解を深め、尊重しようとする態度

- ・ 自分の感情をコントロールして学びに向かう態度

- ・ 歴史の中で創造され、継承されてきた言語文化の担い手としての自覚

言語文化に関する理解

既有知識(教科に関する知識、一般常識、社会的規範等)に関する理解

- 言葉の使い方に関する理解と使い分け
- ・ 話し方、書き方、表現の工夫
- ・ 聞き方、読み方 など

言語能力を構成する資質・能力が働く過程(イメージ案)
 ~「国語科」及び「外国語活動・外国語科」を通じて育成すべき言語能力~

認識から思考へ

テキスト(情報)の理解

構造と内容の把握

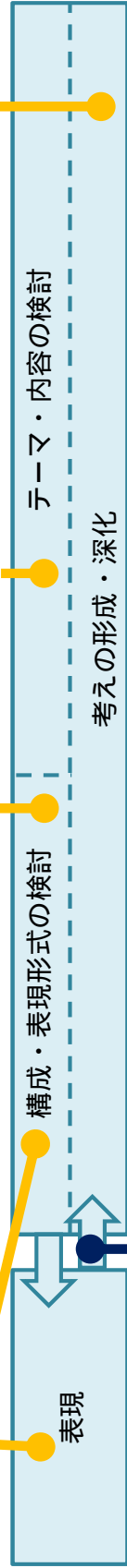
- 言葉の働きや役割に関する理解
 日本語や外国語の特徴やきまりに
 関する理解と使い分け
- ・言語の位相、書き言葉(文字)、話し言葉、語彙
 - ・語、語句、文の構成
 - ・文の成分、文の関係
 - ・文章の構造(文と文の関係、段落、段落と文章の関係)
 - 言葉の使い方に関する理解と使い分け
 - ・話し方、聞き方、表現の工夫
 - ・聞き方、読み方
 - 言語文化に関する理解
 - 既有知識(教科に関する知識、一般常識、社会的規範等)に関する理解

精査・解釈

- 【創造的思考とそれを支える論理的思考の側面】
- ・情報を多角的・多面的に精査し、構造化する力
 - ・推論及び既有知識による内容の補足、精緻化
 - ・論理(情報と情報の関係性：共通・相違・原因・結果・具体・抽象等)の吟味・構築
 - ・妥当性、信頼性等の吟味
 - ・構成・表現形式を評価する力
- 【感性・情緒の側面】
- ・言葉によって感じたり想像したりする力、感情や想像を言葉にする力
 - ・構成・表現形式を評価する力
- 【他者とのコミュニケーションの側面】
- ・言葉を通して伝え合う力
 - ・相手との関係や目的、場面、文脈、状況等の理解
 - ・自分の意思や主張の伝達
 - ・相手の心の想像、意図や感情の読み取り
 - ・構成・表現形式を評価する力

自分なりの整合のとれた
 考えの形成

- ・考えを形成・深化する力
- ・情報を編集・操作する力
- ・新しい情報を、既に持っている知識や経験・感情に統合し構造化する力
- ・新しい問いや仮説を立てるなど、既に持っている考えの構造を転換する力



推敲

- ・文章の推敲
- ・構成・表現形式の修正
- ・内容の再検討、考えの再整理
- ・発話の調整
- ・自分の思いや考えを伝えるための展開
- ・相手の立場や視点を考慮した展開

文章や発話による表現

思考から表現へ

国語ワーキンググループにおける検討事項

1. 国語科を通じて育成すべき資質・能力について
 - ・国語科を学ぶ本質的な意義や他教科等との関連性について（言語能力の向上に関する特別チームにおける議論を踏まえて）
 - ・三つの柱に沿った育成すべき資質・能力の明確化について
 - i) 何を知っているか、何ができるか（個別の知識・技能）
 - ii) 知っていること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力等）
 - iii) どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びに向かう力、人間性など）
 - ・幼稚園・小学校・中学校・高等学校を通じた国語科において育成すべき資質・能力の系統性について
 - ・国語科において育成すべき資質・能力と指導内容との関係について
 - ・特に高等学校における科目構成について
 - ・漢字指導の在り方について

 2. アクティブ・ラーニングの三つの視点（※）を踏まえた、資質・能力の育成のために重視すべき国語科の指導等の改善充実の在り方について

 3. 資質・能力の育成のために重視すべき国語科の評価の在り方について

 4. 必要な支援（特別支援教育の観点から必要な支援等を含む）、条件整備等について
- ※アクティブ・ラーニングの三つの視点（企画特別部会「論点整理」18ページ参照）
- i) 習得・活用・探究という学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程が実現できているかどうか。
 - ii) 他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程が実現できているかどうか。
 - iii) 子供たちが見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる、主体的な学びの過程が実現できているかどうか。

国語ワーキンググループにおける取りまとめ（案）

1. 現行学習指導要領の成果と課題

- 国語科においては、実生活で生きて働き、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を身に付けることや、我が国の言語文化を享受し継承・発展させる態度を育てること等に重点を置いて、その改善・充実を図ってきたところである。また、国語科で培った能力を基本として各教科等における言語活動の充実を推進してきたところである。
- これらの改善・充実を受けて、OECD 生徒の学習到達度調査（PISA）（2012年）において、「読解力」の平均得点が比較可能な調査回以降、最も高くなっているなどの成果が見られる。また、全国学力・学習状況調査において、各教科等の指導のねらいを明確にした上で言語活動を適切に位置付けた学校の割合は、小学校、中学校ともに90%程度となっており、言語活動の充実を踏まえた授業改善が図られている。
- 一方、全国学力・学習状況調査等の結果からは、小学校では、文の中における主語を捉えることや文の構成を理解したり表現の工夫を捉えたりすること、目的に応じて文章を要約したり複数の情報を関連付けて理解を深めたりすることなどに課題があることが明らかになっている。
- 中学校では、伝えたい内容や自分の考えについて根拠を明確にして書いたり話したりすることや、複数の資料から適切な情報を得てそれらを比較したり関連付けたりすること、文章を読んで根拠の明確さや論理の展開、表現の仕方等について評価することなどに課題があることが明らかになっている。
- 高等学校では、教材への依存度が高く、主体的な言語活動が軽視され、依然として講義調の伝達型授業に偏っている傾向があり、授業改善に取り組む必要がある。また、文章の内容や表現の仕方を評価し目的に応じて適切に活用すること、多様なメディアから読み取ったことを踏まえて自分の考えを根拠に基づいて的確に表現すること、国語の語彙の構造や特徴を理解すること、古典に対する学習意欲などが課題となっている。
- 児童生徒の読書状況については、小学生の平均読書冊数は10年前に比べて大きく増加したが、中学生、高校生に大きな変化はない。また、1か月間に読んだ本が0冊の児童生徒の割合は、小学生、中学生は10年間で減少傾向にあるが、高校生に大きな変化はなく、小学生、中学生に比べて高校生の読書活動に改善が見られない状況にある。
- 今回の学習指導要領の改訂においては、これまでの成果を踏まえるとともに、これらの課題に適切に対応できるよう改善を図ることが必要である。その際、思考力・判断力・表現力等の育成を効果的に図るため、引き続き、記録、要約、説明、論述、討論等の言語活動の充実を図ることが必要である。

2. 育成すべき資質・能力を踏まえた教科等目標と評価の在り方について

(1) 教科等の特質に応じ育まれる見方・考え方

- 各教科等を学ぶ意義を明確化するため、今回の改訂では、各教科等において身に付ける資質・能力の三つの柱を整理することとしている。これらの資質・能力の育成のために中核的な役割を果たすのが、各教科等の本質に根ざした見方・考え方である。総則・評価特別部会において、「見方・考え方」とは「様々な事象を捉える教科等ならではの視点」と「教科等ならではの思考の枠組み」であると議論されている。
- 国語科は、様々な事象や対象の内容を自然科学や社会科学等の視点から理解することを直接の学習目的とするのではなく、様々な事象をどのように言葉で捉えて理解し、どのように言葉で表現するか、という言葉を通じた理解や表現及びそこで用いられる言葉そのものを学習対象とするという特質を有している。したがって、言葉に着目して言葉の働きを捉えるという国語科固有の視点を踏まえ、理解したり表現したりしながら自分の思いや考えを深めることが、「国語科ならではの思考の枠組み」であると考えられる。
- 本ワーキンググループでは、①創造的思考とそれを支える論理的思考の側面、②感性・情緒の側面、③他者とのコミュニケーションの側面¹から言葉の働きを捉え、理解したり表現したりしながら自分の思いや考えを深めることが、国語科において育むべき「言葉に対する見方・考え方」であると整理した。
- この「言葉に対する見方・考え方」を働かせることによって、言葉で表現された対象に対する理解や表現、自分の思いや考えなどを広げ深めることが国語科の学びであり、そこでは、言葉と言葉、言葉と対象をつなぐことと、そのつないだ関係性を言葉を通して問い直し、吟味して意味付けることが行われていると考えられる。
- なお、国語科においては、現行の学習指導要領において、「古典について解説した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知ること。」(小学校第5学年及び第6学年)、「文章に表れているものの見方や考え方をとらえ、自分のものの見方や考え方を広くすること。」(中学校第1学年)、「幅広く本や文章を読み、情報を得て用いたり、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにしたりすること。」(高等学校「国語総合」)などのように「ものの見方や考え方」等の表現を用いてきた。
この「ものの見方や考え方」等の表現は、個人または集団の事象を捉える視点と思考の枠組みであり、国語科の本質に根ざした「見方・考え方」とは異なるものと整理する。ただし、個人または集団の事象を捉える視点と思考の枠組みには、言葉が介在している

¹ 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会言語能力の向上に関する特別チームにおいて、これまでの各種会議等(文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」(平成16年2月3日)等)の議論の成果を踏まえ、言語能力を構成する資質・能力について、①創造的思考とそれを支える論理的思考の側面、②感性・情緒の側面、③他者とのコミュニケーションの側面の三つの側面から整理されたことを受け、本ワーキンググループにおいても、同様の整理をしている。

ため、当該個人や集団がどのように言葉の働きを捉えるかということと関わりがあり、個人または集団の「ものの見方や考え方」等を通じて、国語科の本質に根ざした「見方・考え方」を成長させることも考えられる。

(2) 小学校、中学校、高等学校を通じて育成すべき資質・能力の整理と、教科等目標の在り方

- 本ワーキンググループにおいては、学校段階ごとに育成すべき資質・能力について以下のとおり整理した（別紙1）。学校段階ごとの国語科の教科目標についても、このような資質・能力の整理に基づき検討していくことが求められる。

(小学校)

◎国語で**理解し表現する**ことを通じて、創造的・論理的思考の側面や感性・情緒の側面、**日常生活における**人との関わりの側面から言葉の働きを捉える言葉に対する見方・考え方を働かせ、言語感覚を養い、自分の思いや考えを形成し深める資質・能力を育成する。

- ①日常生活に必要な国語の特質について理解し使うことができるようにする。
- ②創造的・論理的思考や感性・情緒を働かせて思考力や想像力を養い、日常生活における人との関わりの中で、国語で**正確に理解したり適切に表現したり**するとともに、新たな考えを創造する力を高めるようにする。
- ③言葉を通じて伝え合うよさを味わうとともに、言葉の大切さを自覚し、国語を尊重するようにする。

(中学校)

◎国語で**理解し表現する**ことを通じて、創造的・論理的思考の側面や感性・情緒の側面、**社会生活における**人との関わりの側面から言葉の働きを捉える言葉に対する見方・考え方を働かせ、言語感覚を豊かにし、自分の思いや考えを形成し深める資質・能力を育成する。

- ①社会生活に必要な国語の特質について理解し適切に使うことができるようにする。
- ②創造的・論理的思考や感性・情緒を働かせて思考力や想像力を養い、**社会生活における**人との関わりの中で、国語で**正確に理解したり適切に表現したり**するとともに、新たな考えを創造する力を高めるようにする。
- ③言葉を通じて伝え合う価値を認識するとともに、言語文化に関わり、国語を尊重するようにする。

(高等学校)

- ◎国語で理解し表現することを通じて、創造的・論理的思考の側面や感性・情緒の側面、他者や社会との関わりの側面から言葉の働きを捉える言葉に対する見方・考え方を働かせ、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、自分の思いや考えを形成し深める資質・能力を育成する。
 - ①生涯にわたる社会生活や専門的な学習に必要な国語の特質について理解し適切に使うことができるようにする。
 - ②創造的・論理的思考や感性・情緒を働かせて思考力や想像力を伸ばし、他者や社会との関わりの中で、国語で的確に理解したり効果的に表現したりするとともに、実社会の視点から、新たな考えを創造する力を高めるようにする。
 - ③言葉を通じて伝え合う意義を認識するとともに、言語文化の担い手としての自覚を持ち、生涯にわたり国語を尊重してその向上を図るようにする。
- なお、小・中学校においては、文字の由来や文字文化に対する理解を深めること²について、高等学校においては、実社会・実生活に生かすことや多様な文字文化に対する理解を深めることについて、高等学校芸術科（書道）との円滑な接続を意識してその位置付けを検討する必要がある。
- また、幼児教育で育まれる「生活や遊びの中で、数量などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、必要感に応じてこれらを活用するようになる。」「言葉を通して先生や友達と心を通わせ、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付けるとともに、言葉による表現を楽しむようになる。」などといった資質・能力との関連について十分に意識するとともに、これらの基礎の上に立って、小学校、中学校、高等学校それぞれの学校段階において、国語科でどのように資質・能力を身に付けさせるのかを明確にしていくことが必要である。
- 国語科において育成すべき資質・能力については、言語能力の向上に関する特別チームにおける言語能力を構成する資質・能力の整理を踏まえ、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力や人間性等」の三つの柱に沿った整理を行い、別紙2のとおり本ワーキンググループとして取りまとめたところである。

² 高等学校芸術科（書道）との円滑な接続を意識する際、高等学校芸術科（書道）において育まれる書の特質に即した見方・考え方（感性を働かせて、書を構成する要素やその関連から生み出される働きの視点で芸術としての書を深く捉え、文字と書の伝統と文化、歴史的背景、生活や社会、諸文化などとの多様な関わりの中で、書の特質に即して考えること※）への接続も含め、小・中学校において、文字の由来や文字文化に対する理解を深めることが重要である。（※「芸術ワーキンググループにおける取りまとめ（案）」参照）

- 「知識・技能」には、「言葉の働きや役割に関する理解」、「言葉の特徴やきまりに関する理解と使い分け」、「言葉の使い方に関する理解と使い分け」、「書写に関する知識・技能」、「伝統的な言語文化に関する理解」、「文章の種類に関する理解」、「情報活用に関する知識・技能」などの項目が挙げられる。

特に、「言葉の働き、役割に関する理解」は、言葉そのものに対するメタ認知のことであり、言語能力を向上させる上で重要な要素である。このことは、これまでの学習指導要領においても扱われてきたが、実際の指導の場面において十分なされてこなかったことが指摘されている。また、「言葉の使い方に関する理解と使い分け」には、これまで「知識・技能」としては明確に位置付けられてこなかった、話したり聞いたり書いたり読んだりする技能を含むものとしている。

- 「思考力・判断力・表現力等」には、言語の働きを捉える三つの側面（①創造的思考とそれを支える論理的思考の側面、②感性・情緒の側面、③他者とのコミュニケーションの側面）に着目しながら、**国語で**理解したり表現したりするための力として、「情報を多角的・多面的に精査し、構造化する力」、「言葉によって感じたり想像したりする力、感情や想像を言葉にする力」、「言葉を通じて伝え合う力」、「構成・表現形式を評価する力」、「考えを形成し深める力」が挙げられる。

- 特に、これからの子供たちには、創造的・論理的思考を高めるために「情報を多角的・多面的に精査し構造化する力」がこれまで以上に必要とされるとともに、自分の感情をコントロールすることにつながる「感情や想像を言葉にする力」や、他者との協働につながる「言葉を通じて伝え合う力」など、三つの側面の力がバランスよく育成されることが必要である。

また、より深く、理解したり表現したりするためには、「情報を編集・操作する力」、「新しい情報を、既に持っている知識や経験、感情に統合し構造化する力」、「新しい問いや仮説を立てるなど、既に持っている考えの構造を転換する力」などの「考えを形成し深める力」を育成することが重要である。

- これらの力はそれぞれ別々に働くこともあるが、理解したり表現したりする上では、通常、複数の力が結び付いて働いている。例えば、中学校段階では、「情報を多角的・多面的に精査し、構造化する力」のうち「論理（情報と情報の関係性：共通－相違、原因－結果、具体－抽象等）の吟味・構築」や「情報を編集・操作する力」を働かせて、文章に表現されている内容や展開を根拠に基づいて解釈し、情報を整理・構成して自分の思いや考えを表現すること、あるいは、「情報を多角的・多面的に精査し、構造化する力」のうち「推論及び既有知識・経験による内容の補足、精緻化」や「新しい情報を、既に持っている知識や経験、感情に統合し構造化する力」を働かせて、社会生活における様々な情報を、既有の知識・経験に基づいて解釈、整理・構成し、新しい発想や主張を形成することなどが考えられる。

- 「学びに向かう力、人間性等」には、言葉を通して社会や文化を創造しようとする態度を育成するために、自分のものの見方や考え方を深めようとする態度、集団の考えを発展させようとする態度、心を豊かにしようとする態度、自己や他者を尊重しようとする

る態度、我が国の言語文化を享受し、継承・発展させようとする態度、自ら進んで読書
をすることで人生を豊かにしようとする態度が求められる。

- なお、別紙2に整理された資質・能力の三つの柱は相互に関連し合ったものであるため、その育成に当たっては、必ずしも、それぞれを別々に育成したり、知識・技能を習得してから思考力・判断力・表現力等を身に付けるといった順序性を持って育成したりするものではないことに留意する必要がある。「知識・技能」の資質・能力を育成するためには、同時に「思考力・判断力・表現力等」と「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力の育成が必要であり、「思考力・判断力・表現力等」と「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力が高まることによって「知識・技能」の資質・能力が高まることにもつながる。「思考力・判断力・表現力等」や「学びに向かう力、人間性等」の育成においても、その他の二つの柱との関係は同様である。

(3) 資質・能力を育む学習過程の在り方

- 上記(2)に掲げた資質・能力を育成していくためには、学習過程の果たす役割が極めて重要である。国語科においては、ただ活動するだけの学習にならないよう、活動を通じてどのような資質・能力を育成するのかを示すため、別紙3のとおり、現行の学習指導要領に示されている学習過程を改めて整理し、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3領域における学習活動の中で、三つの柱で整理した資質・能力がどのように働いているかを含めて図示した。

その際、言語能力の向上に関する特別チームにおいて整理された、「認識から思考へ」という過程の中で働く理解するための力や、「思考から表現へ」という過程の中で働く表現するための力が、各領域の中でどのように働いているのかを踏まえて検討した。

- 例えば、「読むこと」の領域においては、「学習目的の理解(見通し)」、「選書(本以外も含む)」、「構造と内容の把握」、「精査・解釈」、「考えの形成」、「他者の読むことへの評価、他者からの評価」、「自分の学習に対する考察(振り返り)」、「次の学習活動への活用」といった学習活動を明示している。

あわせて、「構造と内容の把握」においては「知識・技能」の各項目を、「精査・解釈」においては「思考力・判断力・表現力等」のうち「情報を多角的・多面的に精査し、構造化する力」、「言葉によって感じたり想像したりする力、感情や想像を言葉にする力」、「言葉を通じて伝え合う力」を、「考えの形成」においては「思考力・判断力・表現力等」のうち「考えを形成し深める力」といった資質・能力を働かせることも明示している。

- 「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」のいずれの学習過程においても、「情報を編集・操作する力」、「新しい情報を、既に持っている知識や経験、感情に統合し構造化する力」、「新しい問いや仮説を立てるなど、既に持っている考えの構造を転換する力」を働かせ、考えを形成し深めることが特に重要である。

- また、これらの一連の学習過程を実施する上では、別紙2に整理された資質・能力の三つの柱のうち「学びに向かう力、人間性等」が大きな原動力となる。「学びに向かう力、人間性等」で挙げられている態度等が基盤となって、子供が自ら次の学習活動に向かおうとする意識が生まれ、「知識・技能」や「思考力・判断力・表現力等」の育成が図られる。また、これらの過程を意識的に行うことを通じて、より一層「学びに向かう力、人間性等」が育まれ、更に次の学習活動に向かうなどの正の循環が見込まれる。
- 国語科においては、こうした学習活動は、必ず言葉による記録、要約、説明、論述、討論等の言語活動を通じて行われる必要がある。したがって、国語科で育成すべき資質・能力の向上を図るためには、資質・能力が働く一連の学習過程をスパイラルに繰り返すとともに、一つ一つの学習活動において資質・能力の育成に応じた言語活動を充実することが重要である。
- なお、一連の学習過程は、必ずしも一方向の流れではなく、指導のねらいに応じて、戻ったり繰り返したりする場合があること、単元全体を通して「身に付けさせたい力」を育成するのであって、一単位時間の中で必ずしも単元で育成すべき全ての学習内容を実施する必要はなく、その一部のみを取り扱う場合があること、単元によってそれぞれの学習活動に軽重を付けて扱うものであることなどに留意する必要がある。
- 特に、「学習目的の理解（見通し）」、「自分の学習に対する考察（振り返り）」などについては、一連の学習過程が始まる前と終わった後にそれぞれ行うことに限定されるものではなく、終始一貫して意識しておくべき要素であることに留意する必要がある。
- また、小学校及び中学校においては、それぞれの発達段階に応じて学習過程の一部を統合的に取り扱うことはあり得るものの、基本的には別紙3と同様の流れで学習過程を捉えることが必要である。

(4) 「目標に準拠した評価」に向けた評価の観点の在り方

- 「目標に準拠した評価」の実質化を図るとともに、教科・校種を越えた共通理解に基づく組織的な取組を促す観点から、観点別評価の観点については資質・能力の三つの柱を踏まえたものとすることが求められている。
- 現行の国語科においては、「（国語への）関心・意欲・態度」、「話す・聞く能力」、「書く能力」、「読む能力」、「（言語についての）知識・理解（・技能）」の観点で評価しているが、本ワーキンググループにおいては、上記（2）に掲げた資質・能力を踏まえつつ、別紙4のとおり観点及び趣旨についての考え方を整理したところである。
- 「知識・技能」については、事実的な知識のみならず、構造化された概念的な知識の習得に向かうものであることや、一定の手順に沿った技能のみならず、変化する状況に応じて主体的に活用できる技能の習熟・熟達に向かうものであることまでも含めた広範な意味で用いられていることに留意することが必要である。

- また、資質・能力のうち「学びに向かう力、人間性等」の部分については、「主体的に学習に取り組む態度」として観点別評価を通じて見取ることができる部分と、観点別評価や評定にはなじまず、個人内評価を通じて見取る部分があり、ここでは観点別評価として見取るべきものを掲げていることに留意する必要がある。
- 特に、「主体的に学習に取り組む態度」の評価については、子供自身が自分の学びや変容を見取ることができ、説明することができるということが、主体的に学習に取り組む態度が育まれている状態であるとの指摘がなされた。
- 資質・能力の三つの柱を踏まえて整理した今回の観点別評価の観点については、現行の「言語についての知識・理解・技能」がそのまま「知識・技能」に関する観点に、現行の「話す・聞く能力」、「書く能力」、「読む能力」がそのまま「思考力・判断力・表現力等」に関する観点に移行するものではないため、具体的な学習評価の方法や学習評価を子供たちの学びや指導の改善につなげる方策等について、引き続き検討が求められる。

3. 資質・能力の育成に向けた教育内容の改善・充実

(1) 科目構成の見直し

- 高等学校の国語教育においては、教材の読み取りが指導の中心になることが多く、国語による主体的な表現等が重視された授業が十分行われていないこと、話合いや論述などの「話すこと・聞くこと」、「書くこと」の領域の学習が十分に行われていないこと、古典の学習について、日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く、学習意欲が高まらないことなどが課題として指摘されているところである。こうした長年にわたり指摘されている課題の解決を図るため、科目構成の見直しを含めた検討が求められており、本ワーキンググループにおいては、別紙2に示された資質・能力の整理を踏まえ、以下のような科目構成（別紙5）にすることが**適当としたところである**。

なお、以下の科目構成の説明において、「学びに向かう力、人間性等」については特に言及していないが、全ての科目において育成されるものである。

《高等学校国語科の科目構成》

- 国語は、我が国の歴史の中で創造され、上代から近現代まで継承されてきたものであり、そして現代において実社会・実生活の中で使われているものである。これを踏まえ、後者の実社会・実生活における言語による諸活動に必要な能力を育成する科目「現代の国語（仮称）」と、前者の我が国の伝統や文化が育んできた言語文化を理解し、これを継承していく一員として、自身の言語による諸活動に生かす能力を育成する科目「言語

文化（仮称）」の二つの科目を、全ての高校生が履修する必修科目として設定することが考えられる。

- 必修科目「現代の国語（仮称）」は、実社会・実生活に生きて働く国語の能力を育成する科目として、別紙2に整理された資質・能力のうち、「知識・技能」では「伝統的な言語文化に関する理解」以外の各事項を、「思考力・判断力・表現力等」では全ての力を総合的に育成することが考えられる。

具体的には、実社会・実生活における言語による諸活動に必要な国語の能力を育成するために、例えば、目的に応じて多様な資料を収集・解釈し根拠に基づいて論述する活動や、文学作品（小説、随想、詩歌等）等を読んで、構成や展開、優れた表現などの効果について、言葉の意味や働きに着目して批評する活動、根拠をもって議論し互いの立場や意見を認めながら集団としての結論をまとめる活動等を重視することが考えられる。

- 必修科目「言語文化（仮称）」は、上代（万葉集の歌が詠まれた時代）から近現代につながる我が国の言語文化への理解を深める科目として、別紙2に整理された資質・能力のうち、「知識・技能」では「伝統的な言語文化に関する理解」を中心としながら、それ以外の各事項も含み、「思考力・判断力・表現力等」では全ての力を総合的に育成することが考えられる。

特に、古典（古文や漢文）だけでなく、古典に関わる近現代の文章を通じて、言語文化を言葉の働きや役割に着目しながら社会や自分との関わりの中で生かすことのできる能力を育成する指導がなされるよう、示し方に留意する必要がある。更に、古典や近現代の文章において、言葉を対象化することを通じて我が国の文化と外国の文化との関わりを理解することなどについても、言語文化の一つの側面として扱うことが考えられる。また、指導においては、文語文法の指導を中心とするのではないことに留意する必要がある。

- 選択科目においては、必修科目「現代の国語（仮称）」及び「言語文化（仮称）」において育成された能力を基盤として、別紙2に整理された資質・能力のうち「思考力・判断力・表現力等」の言葉の働きを捉える三つの側面のそれぞれを主として育成する科目として、「論理国語（仮称）」、「文学国語（仮称）」、「国語表現（仮称）」を設定することが考えられる。

また、「言語文化（仮称）」で育成された資質・能力のうち「伝統的な言語文化に関する理解」をより深めるため、ジャンルとしての古典を学習対象とする「古典探究（仮称）」を設定することが考えられる。

- なお、必修科目である「現代の国語（仮称）」及び「言語文化（仮称）」において育成された能力は、特定の選択科目ではなく全ての選択科目につながる能力として育成されることに留意する必要がある。

- 選択科目「論理国語（仮称）」は、多様な文章等を多角的・多面的な視点から理解し、創造的に思考して自分の考えを形成し、論理的に表現する能力を育成する科目として、

別紙2に整理された資質・能力のうち「思考力・判断力・表現力等」の創造的思考とそれを支える論理的思考の側面の力を主として育成することが考えられる。

- 選択科目「文学国語（仮称）」は、小説、随筆、詩歌、脚本等に描かれた人物の心情や情景、表現の仕方等を読み味わい評価するとともに、それらの創作に関わる能力を育成する科目として、別紙2に整理された資質・能力のうち「思考力・判断力・表現力等」の感性・情緒の側面の力を主として育成することが考えられる。
- 選択科目「国語表現（仮称）」は、表現の特徴や効果を理解した上で、自分の思いや考えをまとめ、適切かつ効果的に表現して他者と伝え合う能力を育成する科目として、別紙2に整理された資質・能力のうち「思考力・判断力・表現力等」の他者とのコミュニケーションの側面の力を主として育成することが考えられる。
- 選択科目「古典探究（仮称）」は、古文・漢文を主体的に読み深めることを通して、自分と自分を取り巻く社会にとっての古典の意義や価値について探究する科目として、主に古典を教材に、別紙2に整理された資質・能力のうち「伝統的な言語文化に関する理解」を深めるとともに、「思考力・判断力・表現力等」を育成することが考えられる。
- また、「古典探究（仮称）」以外の選択科目においても、高等学校で学ぶ国語の科目として、探究的な学びの要素を含むものとなることが考えられる。
- なお、高校生の読書活動が低調であることなどから、各科目において、高校生がそれぞれの読書の意義や価値について実感を持って認識することにつながるような指導の充実、読書活動の展開が必要である。
- 科目の名称については、当該科目で育成される資質・能力が明確になるよう、今後、更に検討することが求められる。

(2) 資質・能力の整理と学習過程の在り方を踏まえた教育内容の構造化

- 上記2. (2)に掲げた学校段階ごとに育成すべき資質・能力、これらを「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱に沿って整理したもの、及び、上記2. (3)に掲げた学習過程の例を、学習指導要領の構造に適切に反映させることが求められる。
- 学校段階ごとに育成すべき「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」について教科の「目標」に反映させるとともに、子供たちを社会に送り出すまでに国語科においてどのような力を身に付けさせるのかという出口のイメージを明確にした上で、小・中・高等学校の教科内容の系統性を検討することが求められる。
- 「内容」に関しては、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の3領域において育成される資質・能力としての「知識・技能」及び「思考力・判断力・表現

力等」を明示するとともに、どのような学習過程を通じてどのような「思考力・判断力・表現力等」を身に付けさせるのかを示すため、現行の学習指導要領において指導事項の項目として明確化されている学習過程を本ワーキンググループにおける整理（別紙3）を踏まえて見直すことが求められる。

（3）現代的な諸課題を踏まえた教育内容の見直し

（読書活動の充実）

- 多くの語彙や多様な表現に触れたり、知らないことを知ったり、経験のないことを体験したり、新しい考えに出合ったりして、国語科で育成すべき資質・能力をより高める重要な活動の一つが読書である。自ら進んで読書をし、読書を通して人生を豊かにしようとする態度を養うために、国語科の学習が読書活動に結びつくよう小・中・高等学校を通じて読書指導を充実するとともに、教育課程外の時間においても、**全校一斉の読書活動**など子供たちに読書をする習慣が身に付くような取組を推進する必要がある。
- 特に、小学校低学年の学力差の大きな背景に語彙の量と質の違いがあるとの指摘がなされている。また、考えを形成し深める力を身に付ける上で、思考を深めたり活性化させたりしていくための語彙を豊かにすることが必要である。小学校低学年で表れた学力差が、その後の学力差の拡大に大きく影響していることを踏まえると、語彙量を増やしたり語彙力を伸ばしたりする指導の改善・充実が重要であるが、そのためにも読書活動の充実を図る必要がある。

（学年別漢字配当表の見直し）

- 漢字指導の改善・充実の観点から、児童の学習負担を考慮するとともに、常用漢字表の改定（平成22年）、児童の日常生活及び将来の社会生活、国語科以外の各教科等の学習における必要性を踏まえ、都道府県名に用いる漢字を「学年別漢字配当表」に加えることが適当である。なお、追加する字種の学年配当に当たっては、当該学年における児童の学習負担を考慮することが必要である。
- 漢字指導に当たっては、漢字を何度も機械的に書かせたり、家庭学習に偏ったりするのではなく、漢字が身に付き生活や学習の中で楽しく使えるようになるよう、その在り方を改善・充実する必要がある。
特に、都道府県名に用いる漢字など他教科等において必要な学習用語を表記する漢字については、児童が当該教科等の学習と関連のあるものとして漢字を学び、その定着が図られるよう、当該教科等と連携して指導することが求められる。
加えて、例えば、常用漢字表の前書きや「常用漢字表の字体・字形に関する指針（報告）」（平成28年2月29日文化審議会国語分科会）等を踏まえた指導と評価の充実、

象形だけでなく、形声等も含めた漢字の成り立ちの指導の充実、漢字として意味が分かるようにするための、和語としての訓読みの指導の充実などが求められる。

(伝統文化に関する学習の改善)

- 現行の学習指導要領では、国語科においても我が国や郷土が育んできた伝統文化に関する教育を充実したところであるが、引き続き、我が国の言語文化に親しみ、愛情を持って享受し、その担い手として言語文化を継承・発展させる態度を小学校、中学校、高等学校を通じて育成するため、伝統文化に関する学習を重視することが必要である。
- このため、伝統文化に関する学習については、小学校、中学校、高等学校を通じて、古典に親しんだり、楽しんだり、古典の表現を味わったりする観点、古典についての理解を深める観点、古典を自分の生活や生き方に生かす観点、文字文化（書写を含む）についての理解を深める観点から整理を行い、改善を図ることが求められる。
- 発達段階によっては、文法的な理解を図る前に、古典の表現に対する言語感覚を育てていくことが古典学習のみならず実社会・実生活において生きて働く国語の能力の基盤となる。そのためには、小学校低学年から音読や暗唱を中心に、古典に親しんだり、楽しんだり、表現を味わったりする学習が重要である。
- また、例えば、小中学校において、古典の現代語訳や古典について解説した文章などを読み、現代にもつながる日本人のものの見方や考え方に触れ、高等学校の言語文化（仮称）において、更に深く考察するなど古典についての理解を発達段階に応じて深めていくことが考えられる。
- 高等学校の課題としては、古典の学習について、日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く、学習意欲が高まらないことが挙げられている。このため、小中学校の段階から、古典に親しんだり楽しんだりするだけでなく、ことわざや故事成語の成り立ちや意味を知って使ったり、代表的な古典作品の一節を引用して文章を書いたりするなど、昔話や神話、伝承、古典を自分の生活や生き方に生かす学習を充実することが重要である。また、高等学校の段階においても、古典に現れた思想や感情などが現代の生活や文化とどのような関係性を持っているかについて考察したり、自分と自分を取り巻く社会にとっての古典の意義や価値を探究したりするなど、古典を自分の生活や生き方に生かす観点から、学習を充実することが求められる。
- なお、書写については、手本を模倣するだけの学習のみではなく、小学校段階であれば、平仮名、片仮名、漢字の由来や特質を理解して書くこと、中学校段階であれば、文字文化の多様性や表現の豊かさを理解して効果的に書くことなど、高等学校段階の国語科及び芸術科（書道）の学習につながる、文字文化についての理解を深める指導を充実することが求められる。

(言葉を取り巻く環境の変化を踏まえた学習の充実)

- 情報化の進展に伴い、パソコンや携帯電話・スマートフォンなどの情報機器の広範な普及は子供たちの言語生活に大きな影響を与えている。一方で、平成 26 年度の「国語に関する世論調査」においては、「文字を手書きする習慣をこれからの時代も大切にすべきであると思うか」との質問に対して 91.5%の人が「大切にすべきであると思う」と回答するなど、文字を手書きすることの重要性が認識されている。また、「改定常用漢字表」(平成 22 年 6 月 7 日文化審議会答申)においても、「漢字を手書きすることは極めて重要であり、漢字を習得し、その運用能力を形成していく上で不可欠なものと位置付けられる」、「手で書くということは日本の文化としても極めて大切なものである」と言及されている。

このことを踏まえ、国語科書写においては、将来の社会生活に向けて文字を正しく整えて速く書く力を身に付けるとともに、文字を手書きして、視覚、触覚、運動感覚など様々な感覚が複合する形で言葉を学習することで、その言葉の表す意味や概念も含めて習得することや、読み手に分かりやすくどのように書くかという他者意識を持つことなどを学ぶことが求められる。

- また、人は書くことにより自分の思いや考えを明確にすることができ、書きながらその思いや考えを掘り下げたり改めたりして深めることができる。現代社会においては、情報機器を用いて、思ったり考えたりしたことを即座に書き表すことができる利便性も必要であるが、学校教育においては、推敲するなど時間を掛けて深く考えて書くことの重要性を学ぶことが求められる。
- また、インターネットの普及により、誰もが不特定多数の他者へ大量に情報を発信できる時代を迎えている。このような環境の中で、相手を想像しながらその媒体の特徴などを考慮して書くことが重要になっている。特に、インターネット等により発信する場合には、これまで出会ったことのない文化的・社会的背景を持つ他者の目に触れる可能性があることや自分の書いたものが後々まで残る可能性があることなどを考えて書くことに留意する必要がある。
- インターネット上の情報に限らないが、情報を収集する際にも、情報の妥当性、信頼性を吟味するなど情報の扱いに注意する必要がある。また、日々大量の情報に接している影響から、情報収集のために情報だけをピックアップするような読み方をする傾向についての懸念が指摘されている。国語科の学習の中で、「読む」ことは、単に情報だけを読み取るのではなく、書き手の表現の仕方や考え方などを学ぶことでもあることを教えていくことが求められている。

(他教科等との連携)

- 現行の学習指導要領においては、全ての教科等において言語活動を重視し充実を図ってきたところであるが、今後、「アクティブ・ラーニング」の三つの視点からの指導の改善・充実を実現していくためには、より一層、言語活動の充実を図り、全ての学習の基盤である言語能力を向上させることが必要不可欠である。
- このため、国語科が言語能力を育成する中心的役割を担いながら他教科等と連携し、子供たちの言語能力の向上とともに、各教科等において育成する資質・能力の育成にも資することがカリキュラム・マネジメントの観点からも重要である。
- なお、日本語と外国語に共通する言葉の普遍性という点で、言葉がどのように働くのか、どのような役割を果たしているのかということ、特に小学校で重点的に学ぶことが言語能力の向上に資するが、これについては、日本人の母語である国語の能力を育成する国語科において育成することが求められる。

(その他)

- 一般社会では、国語科において育成する必要があるとされる能力として、物事を多角的・多面的に吟味し見定めていく力（いわゆる「クリティカル・シンキング」）や、情報活用能力、質問する力、メモを取る力、要約する力などが言及されることがある。これらの能力と別紙2に整理された資質・能力の関係については、例えば、「クリティカル・シンキング」や情報活用能力の育成は、特に「思考力・判断力・表現力等」の「情報を多角的・多面的に精査し、構造化する力（論理の吟味・構築、妥当性、信頼性等の吟味）」や「考えを形成し深める力」などの育成と、また、質問する力の育成は、特に「知識・技能」の「聞き方」や「思考力・判断力・表現力等」の「言葉を通じて伝え合う力（相手との関係や目的、場面、文脈、状況等の把握）」などの育成と、それぞれ深く関わっていると言える。このため、これらの能力は別紙2に整理された資質・能力を育成する中で総合的に育まれることになると考えられる。

4. 学習・指導の改善・充実や教材の充実

(1) 特別支援教育の充実、個に応じた学習の充実

- 資質・能力の育成と国語科の目標の実現を目指し児童生徒の十分な学びが実現できるよう、国語科の学習過程や言語に対する見方・考え方を踏まえ、具体的な学習の場面で考えられる「困難さの状態」に対する「配慮の意図」と「手立て」の例について、以下のような形で明示していくことが適当である。

(小学校国語科における配慮の例)

- ・ 文章を目で追いながら音読することが難しい場合には、自分がどこを読むのかが分かるよう、教科書の文を指等で押さえながら読むよう促したり、教科書の必要な箇所を括

大コピーして行間を空けたり、語のまとまりや区切りが分かるように分かち書きをしたり、読む部分だけが見える自助具（スリット等）を活用したりするなどの配慮をする。

・考えをまとめたり、文章の内容と自分の経験とを結び付けたりすることが難しい場合には、児童がどのように考えればよいのか分かるように、考える項目や手順を示した学習計画表やプリントを準備したり、一度音声で表現し、実際にその場面を演じる活動を行った上で書かせたりするなどの配慮をする。

・自分の立場以外の視点で考えたり他者の感情を理解したりするのが難しい場合には、児童が身近に考えられる教材（例えば、同年代の主人公の物語など）を活用し、行動の描写や会話文に含まれている気持ちがよく伝わってくる語句等に気付かせたり、気持ちの移り変わりが分かる文章のキーワードを示したり、気持ちの変化を図や矢印などで視覚的に分かるようにしてから言葉で表現させたりするなどの配慮をする。

・自分が書いたものを読むことが難しい場合には、紙やホワイトボードに書いたものを提示したりICT機器を活用したりして発表するなど、児童の表現を支援するための多様な手立てを工夫し、自分の考えを持つことや表すことに対する自信を持つことができるような配慮をする。

- また、小・中学校においては、全国学力・学習状況調査により個々の児童生徒の学力の状況を把握し指導の改善につなげている。例えば、小学校においては、調べて分かった事実に対する自分の考え方を理由や根拠を明確にして書くことに課題が見られた児童に対して、指導のねらいに応じ、考え方と理由や根拠を明確に表現するワークシートを用いるなどの工夫が行われている。中学校においては、ことわざや慣用句等の語彙が不足しているという調査結果を受けて、身の回りで使用される語句を集めて言葉ノートや語彙カードを作成して定期的に生徒間で交流させたり教師が確認したりすることで、個に応じた語彙の拡充のための支援を継続的に行っている実践などがある。

このような工夫を参考に、他学年や高等学校においても個に応じた指導を一層充実させていくことが重要である。

(2) 「深い学び」、「対話的な学び」、「主体的な学び」に向けた学習・指導の改善・充実

- 言語能力を育成する国語科においては、言語活動を通して資質・能力を育成する。つまり、資質・能力の育成を図るための活動の全てが言語活動と言える。質の高い言語活動を行い国語教育の改善・充実を図るためには、「アクティブ・ラーニング」の三つの視点から以下のような学びが実現できているか、その学習過程の質的改善を不断に見直し続けることが重要である。
- i) 習得・活用・探究の見通しの中で、教科等の特質に応じた見方や考え方を働かせて思考・判断・表現し、学習内容の深い理解につなげる「深い学び」を実現できているか。

国語科においては、この学びの実現に向けて、例えば「言葉に対する見方・考え方」を働かせ、対象に対する理解や表現、自分の思いや考えなどを広げ深める学習活動を設けることなどが考えられる。その際、子供自身が自分の思考の過程をたどり、自分が話したり聞いたり書いたり読んだりした言葉を①創造的思考とそれを支える論理的思考の側面、②感性・情緒の側面、③他者とのコミュニケーションの側面からどのように捉えたのか問い直し、理解したり表現したりしながら思いや考えを深めることが重要であり、特に、思考を深めたり活性化させたりしていくための語彙を豊かにすることなどが重要である。

- ii) 子供同士の協働、教師や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自らの考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。

国語科においては、この学びの実現に向けて、例えば子供同士の対話に加え、子供と教師、子供と地域の人、本を通して本の作者や多様な資料などとの対話を図り、考えを伝え合うことで自分や集団の考えを発展させたり、思いを伝え合うことで互いの心を豊かにしたり、自己を表現し他者を理解することで互いの存在について尊重したりすることなどにつながる言語活動を行う学習場面を計画的に設けることなどが考えられる。

- iii) 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。

国語科においては、この学びの実現に向けて、子供自身が目的や必要性を意識して取り組める学習となるよう、学習の見通しを立てたり振り返ったりする学習場面を計画的に設けること、子供たちの学ぶ意欲が高まるよう、実社会や実生活との関わりを重視した学習課題として、子供たちに身近な話題や現代の社会問題を取り上げたり自己の在り方生き方に関わる話題を設定したりすることなどが考えられる。特に、学習を振り返る際、子供自身が自分の学びや変容を見取り自分の学びを自覚することができ、説明したり評価したりすることができるようになることが重要である。

○ 具体的には、これら一連の学習過程の中で、

- 例えば、互いの立場や考えの違いを踏まえて話し合う力を身に付けるために、話し合う際に“話題に沿って、筋道立てて発言し合っているか”、“自分の思いを適切に表す言葉や表現になっているか”、“相手の立場や気持ちを捉えて聞いたり、それらを踏まえて話したりしているか”などの観点を教師が適宜提示し、話し合った後、話し合いを進める上で効果的だったこと、更に改善すべきだったことを書かせることで自分たちの学びを振り返り、次に生かす学習が考えられる。
- 例えば、課題に対して複数の資料から情報を得て、自分の意見を具体的に書く力を身に付けるために、“必要な情報が正確に書かれているか”、“根拠や事例、論理の展開などは適切か”、“自分の意図や主張が明確に表現できているか”、“読み手が納

得するような表現や展開で書かれているか”などについて、これまでの学習を振り返って確認させ、十分に推敲して文章を完成させる学習が考えられる。

- ・例えば、文学的な文章を読んで自分の考えを形成する力を身に付けるために、“そこからどのような思いやメッセージが伝わったか”を自分の経験と結び付けて考えさせ、文章の構成や表現に着目した話合いを通して、それぞれの考えを広げ深めながら、“文章が自分の生き方にどのように影響するのか”、“それはどのような構成や表現の効果によるものなのか”などについて考察させる学習が考えられる。

- なお、「アクティブ・ラーニング」は、本来、資質・能力を育成するための視点であり授業の「型」ではないにもかかわらず、その趣旨が学校等に十分伝わっていないように感じられること、活動に注目が行き過ぎているが、活動そのものではなく、活動が学びにどのようにつながるかが重要であることなどの懸念が指摘されたところである。
- また、「深い学び」、「対話的な学び」、「主体的な学び」に向けた学習・指導の改善・充実のために、ICTを活用することも効果的であると考えられる。例えば、話す様子を撮影して自身の様子を振り返らせる活動、インターネット等を用いて情報を収集する活動、調べたり考えたりしたことを大型ディスプレイ等を用いて発表したり互いの情報を交流したりする活動などが考えられる。

(3) 教材の在り方

- 3. に記載された資質・能力の育成に向けた教育内容の改善・充実のためには、教材の在り方を見直すことが必要である。
- 学習指導要領には、「読むこと」以外にも「話すこと・聞くこと」、「書くこと」の領域があるにもかかわらず、依然として授業が「読むこと」の指導に偏っている傾向がある。国語科の授業が言語活動を通じて資質・能力を育成する授業となるよう、教材の改善・充実を図ることが求められる。
- 次期学習指導要領の趣旨を実現するため、主たる教材である教科書において、授業の中で言語活動が一層充実するような教材提示の在り方や、同じ題材においても、育成すべき資質・能力や様々な言語活動を、教師が指導に応じて選べるような教材の在り様などが求められる。
- 子供たちが実際の社会生活で経験する言葉は、文字、音声、映像と情報量の異なる多様なもので成り立っている。子供たちを取り巻く環境の現状を踏まえると、国語科の学習においても、発達段階に応じて、適宜、多様なメディア表現を扱い、情報を正確に読み取ったり豊かに想像したりする力を育成することが重要である。
- 高等学校の科目構成の見直しに応じて、それぞれの科目の趣旨が実現されるよう、教材の在り方を検討することが求められる。本ワーキンググループにおいては、特に「言語文化（仮称）」は、古典と近現代の文章の両方を教材として活用しながら我が国の言

語文化への理解を図る科目とすることや、絵巻物のような絵画的資料が「言語文化（仮称）」や「古典探究（仮称）」において読む対象となり得ることについて指摘がなされている。

- 国語科の教材として取り上げるジャンルに関しては、小・中・高等学校の各学校段階において、様々な文章（文学的文章や説明的文章など）を資質・能力の育成を踏まえて位置付けることが求められる。

5. 必要な条件整備等について

- 国語科において、2. に整理された資質・能力の育成を図るためには、教員養成、教員研修による教員の資質・能力の向上、学校図書館やICT環境の整備・充実などの条件整備が求められる。
- 本ワーキンググループにおいて整理された次期学習指導要領の方向性を実現するためには、小・中・高等学校の各段階で、国、教育委員会、教育センター等において、国語科の目標や三つの柱で整理された育成すべき資質・能力、資質・能力を育む学習過程、「目標に準拠した評価」に向けた評価の観点等を周知するとともに、それを実現するための授業の在り方等についての研修を充実することが求められる。また、教員養成課程においても同様に、趣旨を十分踏まえたカリキュラムが図られることが求められる。
- 高等学校の科目構成の見直しに関しても、その趣旨が実行されるよう、国、教育委員会、教育センター等において、国語科の必修科目及び選択科目で育成すべき資質・能力や各教科・科目の目標と内容を周知するとともに、それを実現するための授業の在り方等についての研修を充実することが求められる。また、教員養成課程においても同様に、趣旨を十分踏まえたカリキュラムが図られることが求められる。
- 大学入学者選抜は、実態として高等学校教育等に大きな影響を与える存在となっている。高等学校教育において次期学習指導要領の趣旨が実現されるようにするためにも、大学入学希望者が培ってきた資質・能力を多面的・総合的に評価するものに転換することが望まれる。このため、高大接続システム改革会議での検討を踏まえ、その改革の着実な実施が求められる。
- 読書活動の充実に必要な学校図書館については、読書活動の拠点となる「読書センター」、授業に役立つ資料を備え学習支援を行う「学習センター」、情報活用能力を育む「情報センター」としての役割を踏まえ、学校における読書活動や言語活動、探究活動の場としての役割も期待されていることから、以下のとおり一層の条件整備が求められる。
 - ・多様な形態の図書館資料（視聴覚資料等を含む）の計画的・組織的な整備を推進すること。
 - ・学校図書館の運営を支える専門的人材である司書教諭や学校司書の資質・能力の向上や配置の拡充を図ること。

- ・校長をリーダーとする学校運営全体の中で学校図書館を適切に位置付けるとともに、その運営を地域の視点も入れたP D C Aサイクルの中で改善すること。
- ・図書館資料の提供や学級文庫の設置、読書推進活動の企画・実施などにより、図書館を活用した読書活動の活性化を図ること。その際、必要に応じて地域の公共図書館や他の学校図書館との連携を図ること。

など

【高等学校】

- ◎国語で理解し表現することを通じて、創造的・論理的思考の側面や感性・情緒の側面、他者や社会との関わりからの側面から言葉の働きを捉える言葉に対する見方・考え方を働かせ、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、自分の思いや考えを形成し深める資質・能力を育成する。
- ①生涯にわたる社会生活や専門的な学習に必要な国語の特質について理解し適切に使うことができるようにする。
- ②創造的・論理的思考や感性・情緒を働かせて思考力や想像力を伸ばし、他者や社会との関わりの中で、国語で的確に理解したり効果的に表現したりするとともに、実社会の視点から、新たな考えを創造する力を高めるようにする。
- ③言葉を通じて伝え合う意義を認識するとともに、言語文化の担い手としての自覚を持ち、生涯にわたり国語を尊重してその向上を図るようになる。



【中学校】

- ◎国語で理解し表現することを通じて、創造的・論理的思考の側面や感性・情緒の側面、社会生活における人との関わりからの側面から言葉の働きを捉える言葉に対する見方・考え方を働かせ、言語感覚を豊かにし、自分の思いや考えを形成し深める資質・能力を育成する。
- ①社会生活に必要な国語の特質について理解し適切に使うことができるようにする。
- ②創造的・論理的思考や感性・情緒を働かせて思考力や想像力を養い、社会生活における人との関わりの中で、国語で正確に理解したり適切に表現したりするとともに、新たな考えを創造する力を高めるようにする。
- ③言葉を通じて伝え合う価値を認識するとともに、言語文化に関わり、国語を尊重するようになる。



【小学校】

- ◎国語で理解し表現することを通じて、創造的・論理的思考の側面や感性・情緒の側面、日常生活における人との関わりからの側面から言葉の働きを捉える言葉に対する見方・考え方を働かせ、言語感覚を養い、自分の思いや考えを形成し深める資質・能力を育成する。
- ①日常生活に必要な国語の特質について理解し使うことができるようにする。
- ②創造的・論理的思考や感性・情緒を働かせて思考力や想像力を養い、日常生活における人との関わりの中で、国語で正確に理解したり適切に表現したりするとともに、新たな考えを創造する力を高めるようにする。
- ③言葉を通じて伝え合うよさを味わうとともに、言葉の大切さを自覚し、国語を尊重するようになる。



【幼児教育】

- （教育課程部会幼児教育部会において、本ワーキンググループでの議論を踏まえ、幼児期に育みたい資質・能力、幼児期の終わりに育ってほしい姿の明確化について審議）
- ・身近な事象に好奇心や探究心を持って思いを巡らしながら積極的に関わり、物の性質や仕組み等に興味したり、工夫したりなどとして多様な関わりを楽しむようになるとともに、友達と考えを思い合わせるなどして、新しい考えを生み出す喜びを感じながら、よりよいものにするようになる。
 - ・生活や遊びの中で、数量などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に興味したりし、必要感に応じてこれらを活用するようになる。
 - ・言葉を通して先生や友達と心を通わせ、絵本や物語などを親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付けるとともに、言葉による表現を楽しむようになる。

国語科で育成すべき資質・能力(案)

知識・技能

思考力・判断力・表現力等

学びに向かう力、人間性等

- 言葉の働きや役割に関する理解
- 言葉の特徴やまじりに関する理解と使い分け
 - ・言葉の位相、書き言葉(文字)、話し言葉、敬語、方言
 - ・語、語句、語彙
 - ・文の成分、文の構成
 - ・文章の構造(文と文の関係、段落、段落と文章の関係)など

- 国語で理解したり表現したりするための力
- 【創造的思考とそれを支える論理的思考の側面】
- 情報を多角的・多面的に精査し、構造化する力
 - ・推論及び既有知識・経験による内容の補足、精緻化
 - ・論理(情報と情報の関係性:共通-相違、原因-結果、具体-抽象等)の吟味・構築
 - ・妥当性、信頼性等の吟味
 - 構成・表現形式を評価する力
- 【感性・情緒の側面】
- 言葉によって感じたり想像したりする力、感情や想像を言葉にする力
 - 構成・表現形式を評価する力

- 言葉の使い方に関する理解と使い分け
 - ・話し方、書き方、表現の工夫
 - ・聞き方、読み方、音読・朗読の仕方
 - ・話し合いの仕方

- 【他者とのコミュニケーションの側面】
- 言葉を通じて伝え合う力
 - ・相手との関係や目的、場面、文脈、状況等の理解
 - ・自分の意思や主張の伝達
 - ・相手の心の想像、意図や感情の読み取り
 - 構成・表現形式を評価する力

- 書写に関する知識・技能
- 伝統的な言語文化に関する理解
- 文章の種類に関する理解
- 情報活用に関する知識・技能

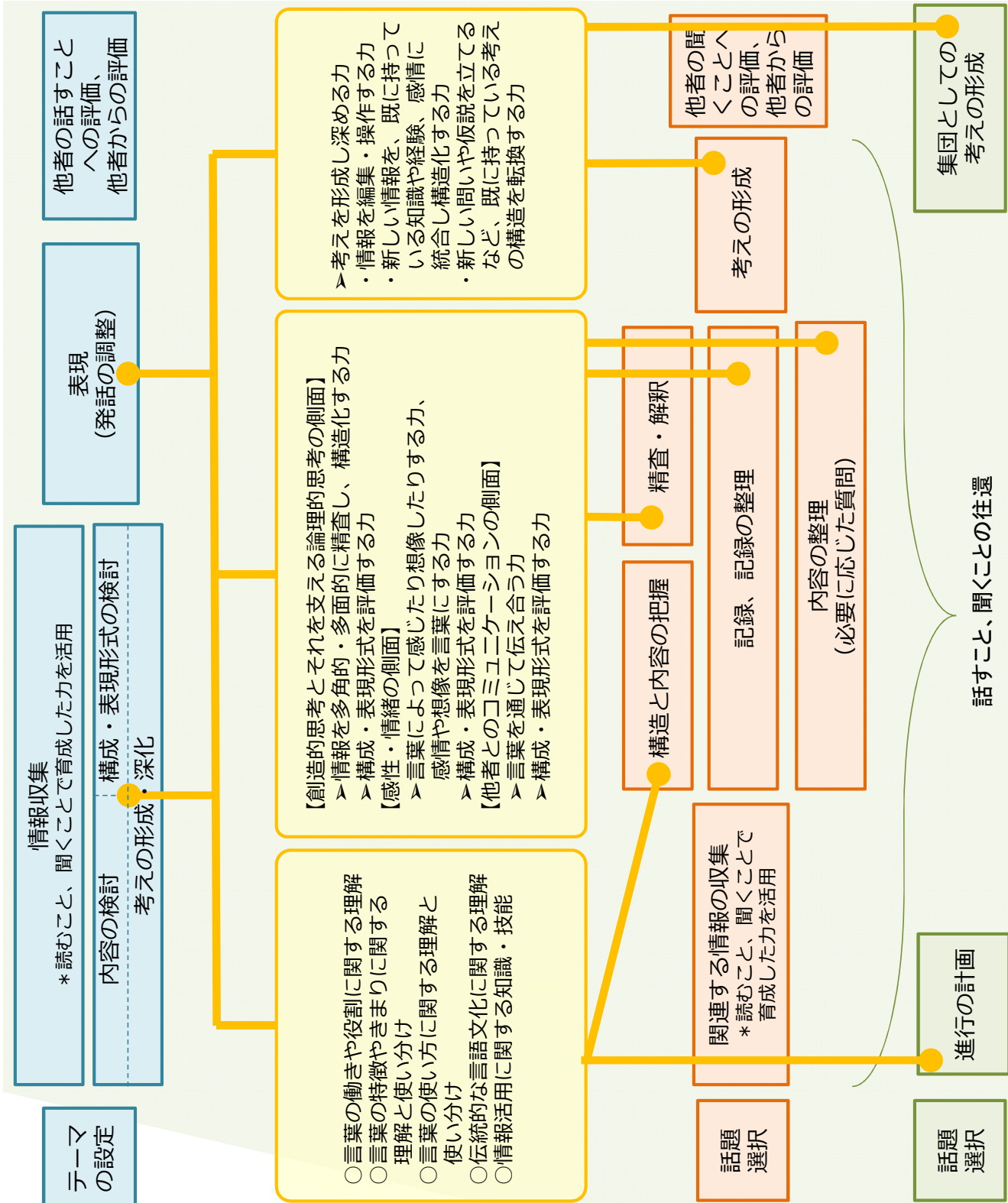
- 《考えの形成・深化》
- 考えを形成し深める力(個人または集団として)
 - ・情報を編集・操作する力
 - ・新しい情報を、既に持っている知識や経験、感情に統合し構造化する力
 - ・新しい問いや仮説を立てるなど、既に持っている考えの構造を転換する力

- ・言葉がもつ曖昧性や、表現による受け取り方の違いを認識した上で、言葉が持つ力を信頼し、言葉によって困難を克服し、言葉を通して社会や文化を創造しようとする態度
- ・言葉を通じて、自分のものの見方や考え方を深めようとするともに、考えを伝え合うことで、集団の考えを発展させようとする態度
- ・様々な事象に触れたり体験したりして感じたことを言葉にすることで自覚するとともに、それらの言葉を互いに交流させることを通して、心を豊かにしようとする態度
- ・言葉を通じて積極的に人や社会と関わり、自己を表現し、他者の心と共感するなど互いの存在についての理解を深め、尊重しようとする態度
- ・我が国の言語文化を享受し、生活や社会の中で活用し、継承・発展させようとする態度
- ・自ら進んで読書をし、本の世界を想像したり味わったりするとともに、読書を通して、知らないことを知ったり、経験のないことを体験したり、新しい考えに出会ったりするなどして人生を豊かにしようとする態度

国語科における学習活動(イメージ案)

次の学習活動(話すこと・聞くこと、書くこと、読むこと)への活用

自分の学習に対する考察(振り返り)



学習目的の理解(見通し)

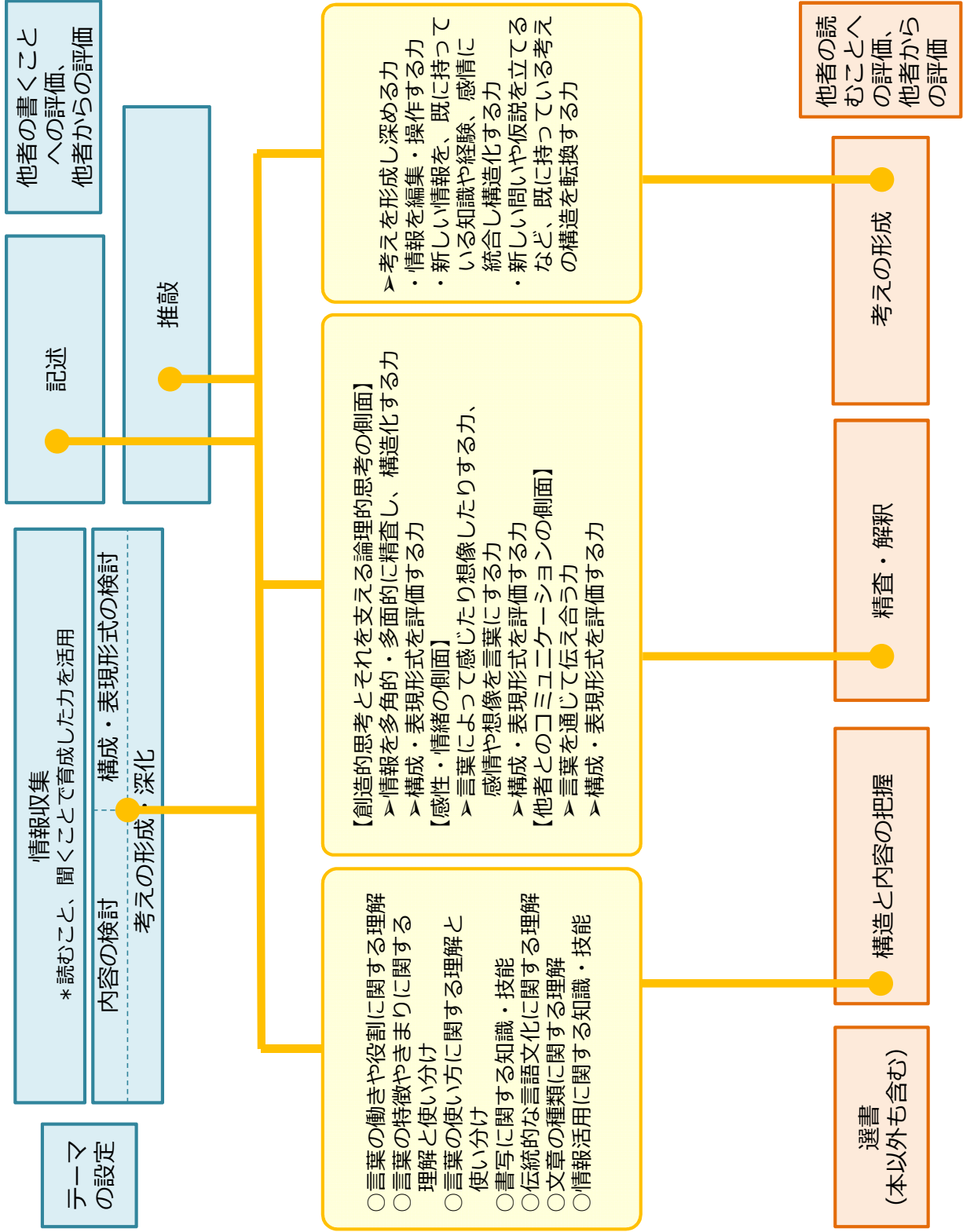
話すこと

聞くこと

話し合うこと

話すこと・聞くこと

※必ずしも一方行、順序性のある流れではない。



国語科における評価の観点のイメージ (例)

<p>観点 (例) <small>※実際に設定する各教科の 観点は、教科の特性に対応 して検討</small></p>	<p>知識・技能</p>	<p>思考・判断・表現</p>	<p>主体的に学習に取り組む態度</p>
<p>小学校</p>	<p>(例) 日常生活に必要な国語の特質につ いて理解し使っている。</p>	<p>(例) 創造的・論理的思考や感性・情緒を働 かせて思考力や想像力を養い、日常生 活における人との関わりの中で、国語 で正確に理解したり適切に表現したり するとともに、新たな考えを創造する 力を高めている。</p>	<p>(例) 言葉を通じて積極的に人と関わつ たり、思いや考えを形成したりし ようとするとともに、言葉のよさ に気付き、読書に親しんで言葉を より良く使おうとしている。</p>
<p>中学校</p>	<p>(例) 社会生活に必要な国語の特質につ いて理解し適切に使っている。</p>	<p>(例) 創造的・論理的思考や感性・情緒を働 かせて思考力や想像力を養い、社会生 活における人との関わりの中で、国語 で正確に理解したり適切に表現したり するとともに、新たな考えを創造する 力を高めている。</p>	<p>(例) 言葉を通じて積極的に人と関わつ たり、思いや考えを豊かにしたり しようとするともに、言葉の価 値に気付き、進んで読書に親しん で言葉を適切に使おうとしてい る。</p>
<p>高等学校</p>	<p>(例) 生涯にわたる社会生活や専門的な 学習に必要な国語の特質について 理解し適切に使っている。</p>	<p>(例) 創造的・論理的思考や感性・情緒を働 かせて思考力や想像力を伸ばし、他者 や社会との関わりの中で、国語での確 に理解したり効果的に表現したりする とともに、実社会の視点から、新たな 考えを創造する力を高めている。</p>	<p>(例) 言葉を通じて積極的に他者や社会 と関わったり、思いや考えを深め たりしようとするともに、言葉 の価値を認識し、自覚的に読書に 親しんで言葉を効果的に使おうと している。</p>

《現行科目》

国語総合

【共通必修科目】

国語表現

現代文A

現代文B

古典A

古典B



《改訂の方向性(案)》

【現代の国語(仮称)】

実社会・実生活に生きて働く国語の能力を育成する科目

- 実社会・実生活における言語による諸活動に必要な国語の能力の育成
- 例えば、
 - ・目的に応じて多様な資料を収集・解釈し、根拠に基づいて論述する活動
 - ・文学作品等を読んで、構成や展開、優れた表現などの効果について言葉の意味や働きに着目して批評する活動
 - ・根拠を持って議論し互いの立場や意見を認めながら集団としての結論をまとめる活動

【言語文化(仮称)】

上代(万葉集の歌が詠まれた時代)から近現代につながる我が国の言語文化への理解を深める科目

- 我が国の伝統や文化が育んできた言語文化を理解し、これを継承していく一員として、自身の言語による諸活動に生かす能力の育成
- 古典(古文・漢文)だけでなく、古典に関わる近現代の文章を通じて、言語文化を、言葉の働きや役割に着目しながら社会や自分との関わりの中で生かすことのできる能力の育成

【論理国語(仮称)】

多様な文章等を多角的・多面的な視点から理解し、創造的に思考して自分の考えを形成し、論理的に表現する能力を育成する科目

(主として、創造的思考とそれを支える論理的思考の側面から「思考力・判断力・表現力等」を育成)

【文学国語(仮称)】

小説、随筆、詩歌、脚本等に描かれた人物の心情や情景、表現の仕方等を読み味わい評価するとともに、それらの創作に関わる能力を育成する科目

(主として、感性・情緒の側面から「思考力・判断力・表現力等」を育成)

【国語表現(仮称)】

表現の特徴や効果を理解した上で、自分の思いや考えをまとめ、適切かつ効果的に表現して他者と伝え合う能力を育成する科目

(主として、他者とのコミュニケーションの側面から「思考力・判断力・表現力等」を育成)

【古典探究(仮称)】

古文・漢文を主体的に読み深めることを通して、自分と自分を取り巻く社会にとっての古典の意義や価値について探究する科目

(ジャンルとしての古典を学習対象として「思考力・判断力・表現力等」を総合的に育成)

外国語ワーキンググループにおける検討事項について

中教審・教育課程企画特別部会「論点整理」(平成 27 年8月 26 日)、「英語教育の在り方に関する有識者会議」(平成 26 年9月 26 日)等を踏まえて、主に次のような事項について検討いただく。

1. 小・中・高等学校を通じて育成すべき外国語教育における資質・能力について

①育成すべき資質・能力の可視化

- i)何を知っているか、何ができるか(個別の知識・技能)
- ii)知っていること・できることをどう使うか(思考力・判断力・表現力)
- iii)どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか(学びに向かう力、人間性等)

②小・中・高等学校を通じて①児童生徒の学びを円滑に接続させるため、小・中・高等学校を通した一貫した目標・内容、学習過程の在り方について、発達段階に応じてどのように充実を図るか

③外国語教育として、「アクティブ・ラーニング」の視点に立った学びを推進する視点も踏まえ、どのように充実を図るか

2. 外国語教育の改善について

言語や文化に対する理解を深め、他者を尊重し、聞き手・話し手・読み手・書き手に配慮しながら、外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図るとともに、身近な話題から幅広い話題についての理解や表現、情報・意見交換等ができるコミュニケーション能力を養うため、目標、指導内容、学習・指導方法、学習過程、学習評価等の在り方について、主に次のような事項について検討。

- 小学校・中学校・高等学校を通じて一貫した教育目標(指標形式の目標を含む)・指導内容、学習過程等の在り方
 - ・学校が設定する目標等との整理
 - ・指導する語彙数、文法事項
 - ・CEFRとの関係整理 等

- 言語能力を向上させるための国語教育と外国語教育との連携
 - ・目標・指導内容等全体に関して
 - ・言語の仕組み(音声、文字、語句、文構造、表記の仕方等)
 - ・言語活動等

* 言語能力の向上に関する特別チームにおける検討事項を参照

- 小学校の活動型、教科型
 - ・論点整理で示された指摘(目標・内容とともに、短時間学習の活用など)
- 小中連携
 - ・小学校高学年から中学校への学びの接続の考え方、学習・指導方法等
- 中学校、高等学校の改善の方向性
 - ・中学校:
 - ・互いの考えや気持ちを英語で伝え合う対話的な言語活動を重視した授業
 - ・授業は英語で行うことを基本とする
 - ・高等学校:科目の見直し(4技能総合型(必履修科目を含む)、発信能力育成型(「発表、討論・議論、交渉」などの統合型言語活動が中心)の科目の在り方)
- 中・高連携
 - ・中学校から高等学校への学びの接続の考え方、学習・指導方法等
- 高等学校の科目等の見直し
 - ・4技能総合型(必履修科目を含む)、発信能力育成型(「発表、討論・議論、交渉」などの統合型言語活動が中心)の科目の在り方(再掲)
 - ・専門教科「英語」の在り方
- 小・中・高等学校の学習評価の在り方
 - ・評価の三つの観点
 - ・各学校が設定する学習到達目標(CAN-DO形式)との関係
 - ・多様な評価方法
 - (パフォーマンス評価、ルーブリック評価、ポートフォリオ評価等) 等
 - ・小学校高学年の教科としての評価
- 英語以外の外国語の扱い

3. 学習指導要領の理念を実現するために必要な方策について

- ① 外国語教育を充実するための「カリキュラム・マネジメント」の確立
- ② 教員の英語力・指導力の向上や外国語指導助手等の外部人材の活用などの条件整備
 - ・中教審・教員養成部会等の議論
 - ・教員養成・研修
 - ・教科書・教材 等

外国語WGにおけるとりまとめ（案）たたき台

1. 現行学習指導要領の成果と課題

- グローバル化が急速に進展する中で、外国語によるコミュニケーション能力は、これまでのように一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定され、その能力の向上が課題となっている。
- 我が国では、外国語を日常的に使用する機会は限られているが、現在、学校で学ぶ児童生徒が卒業し活躍する社会や世界の舞台は、多文化・多言語の中で、国際的な協調と競争の環境の中にあることが予想され、そうした中で、国民一人一人が、様々な社会的・職業的な場面において、外国語を用いて「話すこと」「書くこと」ことを通じて互いの考えを伝え合い理解し合うことが一層重要になることが想定される。
- これまでの外国語活動及び外国語科においては、小・中・高等学校を通じて、発達段階に応じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度や、情報や考えなどを理解したり伝えたりする力の育成が目標として掲げられ、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の4技能（以下「4技能」という。）などを総合的に育成することをねらいとして、現行の学習指導要領に改訂され、様々な取組を通じて充実が図られてきた。
- 一方で、各学校段階での指導改善による成果が認められるものの、児童生徒の学習意欲に関する課題があるとともに、学校種間の接続が十分とは言えず、進学後に、それまでの学習内容を発展的に生かすことができていない状況が見られる。
- また、中・高等学校において、文法・語彙等の知識がどれだけ身に付いたかという点に重点が置かれた授業が行われ、コミュニケーション能力の育成を意識した取組、特に「話すこと」及び「書くこと」などの言語活動が十分に行われていないことや、習得した知識や経験を生かし、伝える相手、目的・場面・状況等に応じて適切に表現することなどに課題がある。
- 今回の学習指導要領の改訂においては、これまでの成果とともに、これらの課題の改善を図る必要がある。

2. 育成すべき資質・能力を踏まえた教科等目標と評価の在り方について

（1）教科等の特質に応じ育まれる見方・考え方

- 各教科等を学ぶ意義として、それぞれにおいて育成すべき資質・能力の三つの柱を整理し、その中核となる各教科等の本質に根差した「見方・考え方」を整理することとなっている。「見方・考え方」とは、様々な事象等を捉える各教科等ならではの視点や、

各教科等ならではの思考の枠組みであるとされており、こうした「見方・考え方」と育成すべき資質・能力の関係について、外国語教育において、以下のような整理を行う。

- 外国語教育においては、特に、他者とコミュニケーションを行う力を育成する観点から、社会や世界と関わりの中で、外国語を通じて様々な事象等を捉え、言語やその背景にある文化を理解し、情報や自分の考えなどを話したり書いたりして表現することが、「外国語教育における思考の枠組み」であると考えられる。
- このことを踏まえ、外国語教育において育まれる「見方・考え方」は、「外国語やその背景にある文化を尊重し、社会や他者との関わりの側面から言語を捉え、目的・場面・状況等に応じて、外国語で情報や考えなどを形成・整理・再構築し、それらを活用して、外国語を話したり書いたりして適切に表現し伝え合うために考えること」とする。
- 外国語教育では、このような「見方・考え方」を働かせながら、知識・技能を習得したり、知識・技能を活用して実際のコミュニケーションに関連付けて定着させたり、コミュニケーションの技能を習熟・熟達させたりすることが行われとが求められる。外国語教育では、このような一連の学習過程を経て思考を深め、自分の思いや考えを表現することなどを通じて、子供たちの発達段階に応じた「見方・考え方」が成長することが重要である。

(2) 小学校・中学校・高等学校を通じて育成すべき資質・能力の整理と、教科等目標の在り方

- 本ワーキンググループにおいては、外国語教育について小・中・高等学校を通じて育成すべき資質・能力を、「論点整理」に指摘された三つの側面とともに、言語能力向上の観点から改善・充実を図ることとする。言語能力向上の観点として、特に、他者とのコミュニケーション（対話や議論等）の基盤を形成する側面から、資質・能力全体を貫く軸として重視しつつ、他の側面（創造的思考、感性・情緒等）からも育成すべき資質・能力が明確となるよう整理することを通じて、更に外国語教育の改善・充実を図る。
- このため、外国語教育の目標においては、小・中・高等学校を通じて、外国語で他者とコミュニケーションを図る基盤を形成するため、4技能のバランスの取れた育成を踏まえつつ、言語や文化に対する理解を深め、他者を尊重し、聞き手・読み手・話し手・書き手に配慮しながら、外国語でコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。あわせて、身近な話題から幅広い話題まで取り上げ、理解したり、情報や考えなどを適切に伝え合ったりすることができるコミュニケーション能力を養うため、目標、指導内容、学習・指導方法、学習過程、学習評価等の在り方について一体的に検討する。

○ 学校段階ごとに育成すべき資質・能力は、次のように整理した(別添7参照)。

(小学校外国語活動)

◎ 言語や文化の多様性を知り、外国語の見方・考え方を働かせ、それらの大切さに気付くとともに、相手意識を持って聞いたり話したりするコミュニケーション能力の素地となる資質・能力を次のとおり育成する。

- ① 外国語を用いた体験的なコミュニケーション活動を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語との音声等の違い等に気付く。
- ② 外国語の音声等に慣れ親しませながら、コミュニケーションを行う力を養う。
- ③ 相手意識を持ってコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。

(小学校高学年)

◎ 言語や文化の多様性を知り、外国語の見方・考え方を働かせ、それらの大切さに気付いて、相手意識をもって聞いたり話したりすることに、読んだり書いたりすることへの慣れ親しみを加えたコミュニケーション能力の基礎となる資質・能力を次のとおり育成する。

- ① 外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、言語の仕組み(音、単語、語順など)や、その背景にある文化を尊重するようにする。
- ③ 身近で簡単なことについて外国語の基本的な表現に関わって聞くことや話すことなどのコミュニケーションを行う力を養う。
- ③ 相手意識を持ってコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。

(中学校)

◎ 外国語やその背景にある文化を尊重し、外国語の見方・考え方を働かせ、聞き手・読み手・話し手・書き手に配慮しながら、簡単な情報や意見などの交換などのコミュニケーションを行う資質・能力を次のとおり育成する。

- ① 外国語を通じて、言語の働きや役割などを理解し、外国語の音声、語彙・表現、文法を、4技能(聞くこと、読むこと、話すこと、書くこと)において実際のコミュニケーションの場面で運用できる技能を身に付ける。
- ② 具体的で身近な話題についての理解や表現、簡単な情報や意見などの交換などができるコミュニケーションを行う力を養う。
- ③ 他者を尊重し、聞き手・読み手・話し手・書き手に配慮しながら、主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。

(高等学校)

- ◎ 外国語やその背景にある文化を尊重し、外国語の見方・考え方を働かせ、聞き手・読み手・話し手・書き手に配慮しながら、情報や考えなどを外国語で的確に理解したり、表現し、伝え合ったりするコミュニケーションを行うことができる資質・能力を次のとおり育成する。
 - ① 外国語の学習を通じて、言語の働きや役割などを理解し、外国語の音声、語彙・表現、文法を、4技能（聞くこと、読むこと、話すこと、書くこと）において実際のコミュニケーションの場面で運用できる技能を身に付ける。
 - ① コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて、幅広い話題について、情報や考えなどの概要・詳細・意図を的確に理解したり適切に表現し伝え合ったりするコミュニケーションを行う力を養う。
 - ③ 外国語を通じて、聞き手・読み手・話し手・書き手に配慮しながら、自律的・主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。
- 併せて、前述1.のような課題を踏まえ、児童生徒の①各学校段階の学びを接続させること、②習得した知識・技能を活用し、思考・判断・表現する力を育成するため「外国語を使って何ができるようになるか」という観点からの教育目標になるよう改善・充実を図る。
- 次期学習指導要領の改訂においては、語彙や文法等の知識がどれだけ身に付いたかということだけでなく、習得した知識・技能が実際の言語活動において活用され、思考したり表現したりすることを通じて育成すべき力を明確にする。このため、それらの育成すべき力について、国際的な基準¹などを参考に、外国語学習の特性を踏まえて小・中・高等学校一貫して教科目標を実現するため、そこに至る段階を示すものとして段階的に実現する指標形式の目標(CAN-DO形式の目標)を設定する。
- 「主体的に学習に取り組む態度」は、生徒が言語活動に主体的に取り組むことがコミュニケーション能力を身に付ける上で不可欠であるため、極めて重要な観点である。習得した知識・技能を活用し、思考・判断・表現する力を身に付けコミュニケーションを行うことで生徒に自信が生まれ、「主体的に学習に取り組む態度」が一層向上していくため、両者は不可分に結び付いている。生徒が興味をもって取り組める言語活動を易しいものから段階的に取り入れたり、自己表現活動の工夫をしたりするなど、様々

¹ CEFR (Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment 外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ共通参照枠) は、語学シラバスやカリキュラムの手引きの作成、学習指導教材の編集、外国語運用能力の評価のために、透明性が高く、分かりやすい、包括的な基盤を提供するものとして、20年以上にわたる研究を経て、2001年に欧州評議会が発表した。国により、CEFRの「共通参照レベル」が、初等教育、中等教育を通じた目標として適用されたり、欧州域内の言語能力に関する調査を実施するに当たって用いられたりするなどしている。CEFRの精神としては、学習者、教授する者、評価者が共有することによって、外国語の熟達度を同一の基準で判断しながら「学び、教え、評価できるよう」開発されたもの。

な手立てを通じて生徒の「主体的に学習に取り組む態度」の高まりを目指した指導をすることが大切である。

- 各学校においては、指標形式の目標を踏まえた学習到達目標を設定し、それらに関する深い理解や資質・能力の育成が図られるよう、学習内容、単元の構成や学習の場面等の設定を組み立て、子供たちに関わっていくことが求められる。
- これらに基づき、外国語を「どのように使うか」、例えば、国際共通語としての英語を通して「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」という観点から、卒業後、どのような職業等に就くとしても生かすことができるような資質・能力を、児童生徒が将来の進路や職業などと結び付け「主体的に学習に取り組む態度」等を含めて育まれるようにする必要がある。併せて、学習・指導方法、評価方法の改善・充実を一体的に図っていく必要がある。
- 指標の形式の目標は、外国語教育の目標に沿って、高等学校卒業時において共通に求められる資質・能力を発達段階に応じた形で明確にした上で、小学校中学年段階から他者とのコミュニケーションを想定した「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと（やりとり、発表）」、「書くこと」の領域ごとに示すとともに、複数の技能を組み合わせて効果的に活用する「技能統合型」の言語活動をより重視した目標を段階的に設定する。これらを踏まえ、外国語教育において育成すべき資質・能力を育む学習過程の改善・充実を図ることとする²。
- その際、高等学校卒業時の生徒の英語力として、国の教育振興基本計画に掲げられている目標（中学校卒業段階で英検 3 級（CEFRA1 レベル程度）程度以上、高等学校卒業段階で英検準 2 級程度～ 2 級（CEFRA2～B1 レベル程度）程度以上を達成した中高生の割合を 50%）³の実現に向けた目標・内容等を想定した改善・充実を行う。

(3) 資質・能力を育む学習過程の在り方

- 外国語教育では、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の 4 技能をバランスよく指導することによって総合的なコミュニケーション能力を養うことが目標の中核を成している。併せて、言語は通常、人との関わりの中で用いられ

² 補足資料参照

³ 国の第 2 期教育振興基本計画（25 年度～29 年度）（閣議決定）においては、成果指標として、中学校卒業段階で英検、中学校卒業段階で英検 3 級程度以上、高等学校卒業段階で英検準 2 級程度～ 2 級程度以上を達成した中高生の割合を 50%とすることとされている。また、文科省「英語教育の在り方に関する有識者会議」報告（平成 26 年 9 月）においては、これまで設定されている英語力の目標から、高校生の特性・進路等に応じて、高等学校卒業段階で、例えば英検 2 級から準 1 級、TOEFL iBT60 点前後以上等（CEFR B1～B2 レベル程度）を設定し、生徒の多様な英語力の把握・分析・改善を行うことが必要であると指摘されている。さらに、27 年度の国の行政事業レビューでは、第 2 期期末時のレビューを経た上で、将来的な目標設定を行うことを提示している。

るため、他者を尊重し、聞き手・読み手・話し手・書き手に配慮しながらコミュニケーションを図ることが求められる。例えば、聞き手の理解の状況を確認しながら話しているか、相手の発話に反応し聞き続けようとする態度を示しているかということが考えられる。

- 外国語教育においては、このようなコミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて、外国語を話したり書いたりして情報や考えなどを適切に表現し伝え合う力を育成するため、三つの柱に沿った資質・能力を踏まえた一連の学習過程の改善・充実を図る必要がある。
- このような学習過程では、児童生徒が①設定されたコミュニケーションの目的・場面・状況等を理解し、②目的に応じて話したり書いたりすることで情報や意見を発信するまでの方向性の決定を決定し、コミュニケーションの見通しをたてる、③目的達成のための対話的な学びとなる、具体的なコミュニケーション（技能統合型）を行い、④言語面・内容面での自らの学習のまとめと振り返りを行うことで、学んだことの意味づけを行ったり、既得の知識や経験と、新たに得られた知識を言語活動へつなげ、思考力・判断力・表現力等を高めていくことが大切になる。これらのことを踏まえた上で、外国語教育におけるアクティブ・ラーニングの視点に立った学びを推進する学習過程へ改善する必要がある。
- これらを踏まえ、本ワーキンググループでは、一貫した目標(指標形式の目標を含む)の下で、発達段階に応じた学習過程とのイメージについて整理した(別添10参照)。
- このような発達段階に応じた学習過程を経ることによる思考力、判断力の高まり、外国語による表現力の向上、自律的・主体的に学習する態度の育成などを通じ、情報を的確に理解し適切に伝え合うコミュニケーション能力を育成することが重要である。
- 外国語教育において育成すべき資質・能力の向上を図るためには、こうした学習活動を繰り返し行うことが重要である。なお、これらの学習過程は、必ずしも一方向の流れではなく、指導のねらいに応じて、戻ったり繰り返したりする場合があること、単元全体を通して「身に付けさせたい力」を育成するのであって、一単位時間の中で育成すべき全ての学習内容を実施する必要はなく、その一部のみを取り扱う場合があること、単元によってそれぞれの学習活動に軽重を付けて扱うものであることなどに留意する必要がある。

(4)「目標に準拠した評価」に向けた評価の観点の在り方

- 現行の外国語教育においては、「関心・意欲・態度」、「知識・理解」、「技能」、「思考・判断・表現」を基に評価の観点を整理し、各教科等の特性に応じた観点を示し、評価規準の設定の方法や評価方法等の工夫改善例が示されている⁴。
- 「論点整理」において示された「目標に準拠した評価」に向けた評価の観点について、教科を超えた共通理解に基づく組織的な取組を促す観点から、外国語教育の観点別評価の観点については、資質・能力の3つの柱を踏まえ、外国語教育の目標と一体的に検討する必要がある。本ワーキンググループにおいては、これまでの取組も踏まえつつ、「論点整理」に沿って、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、「主体的に学習に取り組む態度」の三つの観点を整理した（別添15参照）。
- 「知識・技能」については、語彙や文法などの知識の習得にとどまらず、それらを活用して実際のコミュニケーションが図られるような概念的な知識として習得されるとともに、コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて、主体的に活用できる技能が習熟・熟達に向かうものとして評価することについて留意する。また、「学びに向かう力、人間性等」については、「主体的に学習に取り組む態度」として観点別評価を通じて見取ることと、観点別評価や評定になじまず、個人内評価があり、ここでは観点別評価について整理している。
- 現行の観点別学習状況の評価における「関心・意欲・態度」は、独立してあるものではなく、「他の観点に係る資質や能力の定着に密接に関係する重要な要素でもある」とされ、対象となる学習の単元における4つの観点は、単元における学習と一体的に評価が行われる必要があるものとされている。
- このことを踏まえ、「主体的に学習に取り組む態度」以外の2つの観点のうち、その単元の最も重視したい観点到示されている評価内容として、例えば、「外国語の思考力・判断力・表現力」として「○○できる」とする観点から評価を行う事項を、「主体的に学習に取り組む態度」の項目として「外国語を用いて○○をしようとしている」としても捉え、その単元、または複数の単元において「外国語の思考力・判断力・表現力」及び「主体的に学習に取り組む態度」の両面からの評価を行うこととする。このような評価を行うことによって、児童生徒がコミュニケーションへの関心を持ち、自ら課題に取り組んで表現しようとする意欲や態度を身に付けているかどうかを評価することが重要である。

⁴ 小学校の外国語活動の学習評価については、「①コミュニケーションへの関心・意欲・態度、②外国語への慣れ親しみ、③言語や文化に関する気付き」の3つの評価の観点例を示し、設置者がこれを参考に学習指導要領の目標に沿って評価の観点を設定することとし、文章の記述による評価を行う。中・高等学校の外国語科では、①コミュニケーションへの関心・意欲・態度、②外国語表現の能力、③外国語理解の能力、④言語や文化についての知識・理解の4観点から評価が行われる。そのうち、②③については技能のみではなく、思考力・判断力・表現力等が含まれる。国立教育政策研究所でまとめた「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」においては、学習指導要領の内容の言語活動における「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」及び「書くこと」をまとまりとして、それぞれの評価規準に盛り込むべき事項及び評価規準の設定例を挙げている。

- 各学校における具体的な評価方法としては、学習到達目標の設定により、「外国語を用いて何ができるか」という観点から、筆記テストのみならず、面接、エッセー、スピーチ等のパフォーマンス評価、活動の観察等の効果的な評価方法から、その場面における生徒の学習状況を的確に評価できる方法を選択することが重要である。

3. 資質・能力の育成に向けた教育内容の改善・充実

(1) 小学校の外国語教育における改善・充実

- 小学校段階においては、高学年の「外国語活動」の充実により、児童の高い学習意欲、中学生の変容などの成果が認められる一方で、①音声中心で学んだことが、中学校の段階で音声から文字への学習に円滑に接続されていない、②国語と英語の音声の違いや英語の発音と綴りの関係、文構造の学習において課題がある、③高学年は、児童の抽象的な思考力が高まる段階であり体系的な学習が求められることなどが課題⁵として指摘されている。
- これらの成果と課題を踏まえて、中学年から「聞く」「話す」を中心とした外国語活動を通じて外国語に慣れ親しみ外国語学習への動機付けを高めた上で、高学年から発達段階に応じて段階的に文字を「読むこと」及び「書くこと」を加えた、4技能を総合的・系統的に扱う教科学習を行うことが求められる。その際、これまでの課題に対応した教科化に向けて、新たに①アルファベットの文字や単語などの認識、②国語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴への気付き、③語順の違いなど文構造への気付きなど、言語能力向上の観点から「言葉の仕組みの理解」などを促す指導を行うために必要な時間を確保することが必要である⁶。
- 小学校高学年においては、
 - ・教科としての外国語教育のうち基礎的なものとして、中学年からの高学年及び中学校への学びの連続性を持たせながら、これまでの体験的な「聞くこと」「話すこと」に加え、「読むこと」「書くこと」の4技能を扱う言語活動を通じて、より系統性を持たせた指導(教科型)を行う。その際、外国語の基本的な表現に関わって聞くことや話

⁵ 補足資料参照

⁶ 英語教育の改善・充実については、文部科学省に設置された「英語教育の在り方に関する有識者会議」等において議論が重ねられ、報告等もまとめられているところ。諮問においても、同報告の提言を踏まえつつ検討を行うことが求められており、こうした状況を踏まえ、小学校外国語を中心とした課題、方向性について、別資料において補足する。

すことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う体系的な指導を行う教科として位置付ける。

- ・教科として位置付ける際、単に中学校で学ぶ内容を小学校高学年に前倒しするのではなく、身近なことに関する基本的な表現による4技能の豊かな言語活動を行うため、発達段階に応じた「読むこと」、「書くこと」に慣れ親しみ、積極的に英語を読もうとしたり書こうとしたりする態度の育成を含めた初歩的な運用能力を養うことが考えられる。

例) 馴染みのある定型表現を使って、自分の好きなものや家族、一日の生活などについて、友達に質問したり、質問に答えたりすることができる。

- あわせて、小学校で学んだ語彙、表現などは中学校において、小学校とは異なる場面で使ったり別の意味で活用したりするなど、言語活動において繰り返し活用し定着を図る。さらに、中学校で学習した語彙・表現・文法事項等は高等学校においても意味のある文脈の中でコミュニケーションを通して繰り返し触れることが重要である。その際、ICT等を活用した効果的な言語活動を行うよう工夫が求められるとともに、児童生徒が自らの学習活動を振り返って次につながる主体的な学びができるようにすることが必要である。
- このような方向性を目指し、小学校高学年において「聞くこと」「話すこと」の活動に加え、「読むこと」「書くこと」を含めた4技能を扱う言語活動を展開し定着を図り、教科として系統的な指導を行うためには、年間70単位時間程度の時数が必要である⁷。また、中学年における外国語活動については、従来の外国語活動と同様に年間35単位時間程度の時数が必要である。

(2) 短時間学習等の活用など、柔軟なカリキュラム設定に関する考え方

- これまでの成果・課題を踏まえつつ、教育課程全体の枠組みの状況⁸を考慮すると、小学校高学年において年間35単位時間増となる時数を確保するためには、ICT等も活用しながら10～15分程度の短い時間を単位として繰り返し教科指導を行う短時間学習

⁷ 中央教育審議会 教育課程企画特別部会「論点整理」(平成27年8月)においては、「さらに、仮に105時間(週3コマ程度)実施することについては、指導体制などの条件整備や小学生の生活への負担等を考えると、教育課程の特例としてではなく全国一律に実施することは極めて困難。また、現段階で教科ごとの指導の専門性が中学校以降ほど確立されていない小学校段階でこれを強いることは、英語嫌いを生み出すことにつながりかねない。今後、児童への指導に当たっては、教科化に対応できる指導力を備えるとともに、児童理解、学級経営を基盤とした授業の実施等に対応できる指導者が求められる。」との指摘がなされた。

⁸ 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)」(平成20年1月中央教育審議会)6(1)小・中学校の教育課程の枠組みにおいては、「学習指導要領上の標準授業時数を増加する場合、週28コマが限度と考えられる」と指摘された。

(帯学習、モジュール学習。以下「短時間学習」という。)⁹を含めた柔軟なカリキュラム設定の在り方と必要な「カリキュラム・マネジメント」を、教育課程全体を見通しながら実現していく必要がある。

- 弾力的な授業時間の設定に関する研究開発学校等の先行的な取組状況や「教育課程の編成・実施状況調査」の結果などを踏まえた、これまでの成果・課題等を踏まえ、短時間学習では、今後、外国語の特性を踏まえた指導内容のまとまりや教育効果を高める観点から、短時間学習を行う場合には、学習指導要領上の標準授業時数内で、その時間を年間授業時数に含め、その目標を明確にし、まとまりのある授業時間との関連性を確保した上で実施することが必要である。
- 前述の調査結果や小学校現場の取組の現状を踏まえると、短時間学習については、授業時数内外で様々な教科も含めた取組が行われており、全ての小学校において、外国語に特化した短時間学習を一律に行うこととするのは困難な状況にある。このため、年間70単位時間における一定の短時間学習の在り方を横並びで求めるのではなく、ある場合には45分授業を60分授業の扱いにして、その中の15分を短時間学習として位置付けることや、また別の場合には外国語の短時間学習を2週間に3回程度実施する、さらに別の場合には夏季、冬季の長期休業期間において言語活動を行うなど、地域や各校の実情に応じた幅のある柔軟なカリキュラムの設定が必要であると考えられる。
- 中学年においては、年間35単位時間、週あたり1コマ相当の外国語活動を、短時間学習で実施することは困難であり、小学校の教育課程全体を見通した「カリキュラム・マネジメント」が必要であると考えられる。
- 以上を踏まえた検討とともに、担当する教員が、その指導内容の決定や指導の成果の把握と活用等を責任を持って行う体制整備が必要であるといった観点から、教員養成、教員研修及び教材開発に関する条件整備が不可欠である。

(3) 高等学校における科目構成の見直し

- 高等学校の外国語教育においては、一部改善が見られるものの、依然として4技能すべてに課題がある。特に、「話すこと」及び「書くこと」における発信力について課題が大きい。併せて、中学校からの学びを高校に円滑につなげるとともに、高校生の多様化に対応した改善・充実の方向性に沿って見直しを行う必要がある。

⁹ 小学校学習指導要領においては、短時間学習を含む単位時間の設定の工夫について、総則の解説に記載されている。なお、中学校学習指導要領においては、総則本文に「10分間程度の短い時間を単位として特定の教科の指導を行う場合において、当該教科を担当する教師がその指導内容の決定や指導の成果の把握と活用等を責任をもって行う体制が整備されているときは、その時間を当該教科の年間授業時数に含めることができる」との規定がある。

- このため、本ワーキンググループにおいては、外国語教育における資質・能力の整理を踏まえ、次のような改善の方向性に沿って科目構成にすることとしている。

(高等学校における改善・充実の方向性)

- 高等学校卒業段階で求められるレベルは、必履修科目で「外国語を通じて、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりすることができる力」(CEFRのA2レベルから選択科目でB1レベル相当を想定)や、留学や進学などの目的に応じて高い英語力を目指す高校生もいるといった多様性を踏まえ、B2レベルを目指す生徒へも配慮し、専門科目の在り方(科目構成や内容等)、学校設定科目などで対応する。
- 中・高等学校について、指標形式の目標設定が教科書の改善につながるような整理が必要である。例えば、外国語科の授業において言語活動の比重が低い現状から、学習指導要領の内容の実現のために言語活動が改善・充実されるような視点が必要である。このため、4技能総合型(必履修科目を含む)の科目、発信能力育成型(「発表、討論・議論、交渉」などにおいて、聞いたり読んだりしたことを活用して話したり書いたりするといった、技能統合型の言語活動の一層重視した技能統合型の言語活動が中心)の科目の在り方を提示する。
- 中学校段階での学習が十分には定着していないといった課題のある生徒も含めた高校生の多様性や、英語で行うことを基本とする授業を行うことが可能な科目の見直しとする。このため、必履修科目(特に学習の初期段階において)共通で学びなおしの要素を入れることとする。

(高等学校「外国語」の科目等の見直し)

- 本ワーキンググループにおいては、外国語教育における資質・能力の整理を踏まえ、次のような科目構成にすることとした。
- 「コミュニケーション英語」Ⅰ～Ⅲ等の課題を踏まえた科目見直しの方向性として、
 - ① 中学校との接続が不十分であるため、中・高等学校の学びの接続を改善する観点から、現行の「コミュニケーション英語基礎」の要素を「英語コミュニケーションⅠ」(仮称：必履修)に組み込んで、中学校における学びの確実な定着を図るための内容を含めて見直しを検討する。
 - ② 現行の教科書において、言語活動の割合が低く、文法や語彙の習得にとどまっている等の課題を踏まえ、教科書に基づく学習を改善する観点から、例えば、目標と課題(タスク)の明確な提示するとともに、「聞くこと」や「読むこと」による英文からの情報や表現の取り込み、課題解決のための言語活動という流れで学習するものとする。
 - ③ 生徒が興味関心を持てるような、日常的な話題から時事問題・社会問題にいたるまで広い話題を提供するものとする。
- 「英語表現」Ⅰ～Ⅱの課題を踏まえた科目見直しの方向性として、現行の教科書の多くが文法シラバス中心で、科目の趣旨を生かし切れていないことを踏まえ、4技能を活用しつつ、「話すこと」及び「書くこと」の技能を中心として、幅広い話題について発表(スピーチやプレゼンテーション等)、討論・議論(ディベートやディス

カッション等)、交渉などの言語活動を行うことができる内容へ見直すこととする。

(4) 国語教育と外国語教育の効果的な連携の意義

- 言語能力の向上の観点からは、国語教育と外国語教育をそれぞれ改善・充実しつつ、相互の連携を図ることで、国語で学んだことが外国語の表現活動に生かされたり、国語と外国語の特徴や違いに気付き、国語を学ぶことに対する関心が高まったりするなど、子供の学習に相乗的な効果が見られるとの例¹⁰が報告されているところである。
- このような取組を踏まえ、言語能力の向上につながる効果的な連携につなげるためには、国語科と外国語科の指導内容について、そのつながりが可視化されることが必要であり、各学校において、言語能力の向上に向けた「カリキュラム・マネジメント」が実施されやすくなるよう、例えば、言葉の働きと仕組みの理解や言語活動を通じて育成される資質・能力といった観点から、指導の順序性や、言語活動で扱う内容や方法などの具体的な連携の在り方についてわかりやすく整理していくことが求められる。

(今後、特別チームの議論を踏まえ、記載予定)

(5) 資質・能力の整理と学習過程の在り方を踏まえた教育内容の構造化

- 外国語教育については、3つの柱に沿った資質・能力と学習過程の在り方を踏まえ、それらの趣旨を実現するため、次の観点から改めて教育内容の構造化を整理する必要がある。
- 外国語に対する見方・考え方を育成する観点から、3つの資質・能力の育成を踏まえた小・中・高等学校を通じた目標、内容等の体系的に整理するとともに、それらについて、前述のような一連の学習過程を経ることが効果的であることを明確にするなどの改善を図ることが重要である。

(5月30日に議論いただく予定)

¹⁰ 英語教育強化地域拠点事業の中では、①アルファベットの文字や単語などの認識、②国語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴への気付き、③語順の違いなど文構造への気付きなどの取組が行われているところである。また、教育課程特例校における実践についても報告されているところである。

(6) 現代的な諸課題を踏まえた教育内容の見直し

- グローバル化が進展する国際社会を主体的に生きるための資質・能力の観点から、外国語を通じて、世界の言語、生活・文化の多様性や、地球規模の諸課題、持続可能な社会の構築、情報化などにおける課題を把握し、その解決に向けて情報を選択、整理し、自分の考えを形成・表現する力を育成することが重要である。併せて、児童生徒が外国語を通じて社会や世界に関わろうとする態度を育成するためには、世界的なテーマを幅広く取り上げ、それらとの関わりへの生徒の関心を高めるよう教育内容を改善・充実する。

(5月30日に議論いただく予定)

4. 学習・指導の改善充実や教材の充実

(1) 特別支援教育の充実、個に応じた学習の充実

(特別支援教育の充実)

- 現行の学習指導要領においては、総則において、「個々の児童の障害の状態等に応じた指導内容や指導方法の工夫を計画的、組織的に行うこと。」(小学校学習指導要領の例。中学校、高等学校も同様)と記載されており、外国語教育における指導の場面における適切な配慮が一層充実されるよう工夫を講じる必要がある。
- 外国語教育において、児童生徒の資質・能力の育成を目指し、目標を達成するため、具体的な学習の場面で考えられる「困難さの状態」に対する「配慮の意図」と「手立て」を示していくことが適当である。

(小学校外国語活動の例)

- 音声を聴取することが難しい児童の場合、外国語の音声(音韻)やリズムと日本語との違いに気付くことができるよう、音声を文字で書いてみせる、リズムやイントネーションを記号や色線で示す、指導者が手拍子を打つ、音の高低を手を上下に動かして表すなどの配慮をする。また、活動の流れがわかるように、本時の活動の流れを黒板に記載しておく。

(小学校外国語科)

(中・高等学校における外国語科)

(個に応じた学習の充実)

(外国語において必要な個に応じた学習の充実について5月30日に議論いただく予定)

(2) 「深い学び」「対話的な学び」「主体的な学び」に向けた学習・指導の改善充実

- 外国語教育においては、質の高い学びに向けて、外国語によるコミュニケーションを通じて、対象に対する認識や、自分の思いや考えが深まったり更新されたりすることについて、子供自身が認識できるような学習活動を設けることなどが考えられる。その際、子供自身が、自分の思考の過程をたどり、それを話したり書いたりすることで表現して、自分の学びを自覚することが重要である。特に、自分の学びを説明したり評価したりするための語彙や、思考を深めたり活性化させたりしていくための表現などを豊かにすることが重要である。
- 「論点整理」において掲げられたアクティブ・ラーニングの方向性を踏まえ、質の高い学びを目指し、外国語教育においては、「深い学び」、「対話的な学び」、「主体的な学び」が実現できているか、前述2.(3)の資質・能力を育む学習過程の質的改善を不断に見直し続けることが重要であり、以下、それぞれの学びの過程について整理した。
 - i) 「深い学び」の過程については、言葉の働き、役割に関する理解、外国語の特徴やきまりとしての音声、語彙・表現、文法の知識や、外国語の音声、語彙・表現、文法の知識、及びそれらの知識を4技能において実際のコミュニケーションで運用する技能を習得し、実際に活用して、情報や自分の意見等を書いたり話したりする中で、資質・能力の三つの柱に示す力が総合的に活用・発揮されるようにする。このため、コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じた言語活動を効果的に設計し、授業づくりに生かすことが重要である。

各学校段階における活動を設定するに当たり、アクティブ・ラーニングの視点から、下記のような視点に立って学びを改善し、子供の学びへの積極的関与と深い理解を促すような指導や学習環境を設定する。

- ・ 小学校外国語活動では、その目標を達成するために、児童が外国語を用いてコミュニケーションを体験することが求められる。そのためには、児童が興味関心のある題材について自分の思いや考えを伝え合う活動の設定が重要である。
- ・ 中学校では、具体的で身近な話題についての理解や表現、簡単な情報交換ができる能力の育成が求められる。そのためには、互いの考えや気持ちなどを外国語で適切に伝え合う対話的な言語活動を重視し、単に自分の考えや気持ち、事実などを聞き手に正しく伝えたり、出来事や体験したことなどについて書いたりするだけでなく、聞いたり読んだりしたことをもとに、問答したり意見を述べ合ったりすることや、感想、賛否やその理由を書いたりすることなど、複数の技能を統合した言語活動を豊富に経験することが重要になる。
- ・ 高等学校では、日常的な話題や社会問題など幅広い話題について、情報や考えなどを外国語を通して的確に理解したり適切に伝え合ったりする能力の育成が重要になる。そのためには、聞いたり読んだりしたことを活用して話したり書いたりする複数の技能統合型のスピーチ、プレゼンテーション、ディベート、ディスカッションなどに主体的・協働的に取

り組むことが大切である。これらの活動では中学校と同様、例えば、当該の話題に関する資料を読み込み、それぞれの考えと理由を伝え合い、それを基にして情報や考えなどを整理して書くというように、複数の技能を統合させて行うことになる。

- ii) 「対話的な学び」の過程は、他者を尊重し、対話的な学びを通じて社会や世界との関わりを通じて情報や考えなどを伝え合う言語活動の改善・充実を図ることが重要である。このため、次期改訂においては、言語の果たす役割として他者とのコミュニケーション(対話や議論等)の基盤を形成する観点を資質・能力全体を貫く軸として重視しつつ、創造的思考とそれを支える論理的思考、感性・情緒を育成する観点からも求められる資質・能力が明確になるよう整理することを通じて、外国語教育の改善・充実を図る。

例えば、各学校段階で育成すべき「思考力・判断力・表現力」について、①小学校は、身近で簡単な話題について友人に質問したり質問に答えたりする力、②中学校では、互いの考えや気持ちなどを理解し、根拠を持って外国語で伝え合う力、③高等学校では、幅広い話題について、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝え合ったりする力であることをより明確にする。各学校段階においては、学びに向かう力として、

- ・ 小学校では、相手意識を持って外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度
- ・ 中・高等学校では、他者を尊重し、聞き手・読み手・話し手・書き手に配慮しながら、外国語でコミュニケーションを図ろうとする態度などを育成することについて明確にする。外国語教育においては、対話的な学びの実現に向けて、コミュニケーションを行う目的、場面、状況に応じて、他者を尊重し、対話が図られるような言語活動を行う学習場면을計画的に設けることなどが考えられる。

- iii) 「主体的な学び」の過程では、外国語を学ぶことに興味や関心を持ち、どのように社会・世界と関わり、生涯にわたり、学んだことを生かそうとするか、見通しを持って粘り強く取り組み、児童生徒が自らの学びを自覚して、書いたり話したりすることを通じて、自分の意見や考えを発信し、評価するための自らの学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」を実現することが重要である。このため、外国語教育においては、この学びの実現に向けて、生徒が目的等に応じてコミュニケーション活動に取り組めるよう、コミュニケーションを行う目的・場面・状況等の設定・明確化を図り、学習の見通しを立てたり、振り返ったりする場面を設けるとともに、発達段階に応じて、身の回りのことから社会や世界との関わりを重視した題材を設定することなどが考えられる。

- また、「深い学び」、「対話的な学び」、「主体的な学び」に向けた学習・指導の改善充実のために、デジタル教材、パソコンなどを身に付けるべき能力や児童生徒の現状(能力・適正や興味関心など)に応じて効果的に活用する。これらを通じて、児童生徒の興味・関心を高め、指導の効率化及び言語活動の充実を図る。

例えば、音声を中心にデジタル教材や電子黒板等を活用して、児童生徒にネイティブの発音に触れさせ、外国語と日本語の音声の違いに気付かせたり、インターネット等を用いてグループでの情報収集、調査、発表、討論等をしたり、テレビ会議システ

ムを活用し、外国の姉妹校と交流を通じて外国語で互いの情報を伝え合う活動などが考えられる。

(3) 教材の在り方

- 外国語教育については、資質・能力の育成に向けた教育内容の改善充実のためには、教材の在り方を見直すことが必要である。特に、音声や映像を活用した効果的な教材開発と、それらを活用して効果的に指導を行う指導力が必要である。
- 小学校においては、先進的な取組も含めたこれまでの外国語活動の成果・課題を踏まえ、教科書が、今回改訂の教科化や「カリキュラム・マネジメント」の考え方に対応したものとなることが重要である。そうした教科書の在り方につなぐためにも、28年度中に27・28年度に開発した小学校中学年・高学年向けの新たな補助教材の検証を行い、その検証結果を生かして、教科化に対応した教材を29年度にかけて開発し、平成30年度には先行実施を行う小学校で活用できるよう作成・配布する必要がある。あわせて、活用しやすいICT教材の開発が求められる。
- 中・高等学校においては、中・高等学校の教科書・教材の課題として、生徒が興味関心を持てる内容が不十分であることや、その構成上、結果的に文法事項の定着を図る様々な活動に分量の多くがとられており、題材や言語材料を活用しながら、説明・発表・討論することを通じて、思考力・判断力・表現力などを育成するような言語活動の展開が十分に意識されていないと思われるものも見られる。例えば、高等学校の「英語表現」では、文法事項や語彙、表現方法について学んだことを、生徒自らが、実際のコミュニケーションの場面を考えながら書いたり、発表したりするなどの授業展開ができるような構成となるよう改善が期待されるものも見られる。
- このため、生徒が発信したいと思える題材を扱うなどの工夫が必要であり、中・高等学校について、指標形式の目標設定が教科書の改善につながるような整理を行う。例えば、言語活動の比重が低い現状から、学習指導要領の内容の実現のために言語活動が改善・充実されるような視点が必要である。
- 高等学校については、科目の見直しに対応した言語活動を通じて資質・能力を育成する授業となるよう、教材の改善充実を図ることが求められる。
- あわせて、それらを効果的に活用するためには、教員の指導力の向上が必要である。ICTを用いた指導方法についての研修の充実を図るため、授業の展開を明確にイメージできるような映像等を用いた指導事例の作成や研修教材・研修マニュアルを作成し、普及を図る必要がある。
- 外国語学習においては、効果的な学習方法として、音声も含めた学習効果の高いコンテンツの導入、デジタル教材の活用による児童の興味・関心を高め、「深い学び」や、「対話的な学び」及び「主体的な学び」につながるような学習活動に応じた多様な教

材や、ICT活用を推進するためのハードウェアの充実を促進する。

5. 必要な条件整備等について

- 外国語教育に関する教員養成、教員研修及び教材開発に関する条件整備、小学校の中・高学年それぞれの課題に応じた指導体制の整備が不可欠である。
- 小学校においては、中学年の外国語活動導入、及び高学年の教科化に対応するとともに、「カリキュラム・マネジメント」の中で、外国語教育や特定の学年にとどまらず、全ての教科等と学年全体を見通し、弾力的な時間割の編成を行う視点が必要になる。これを支援するため、小学校においては、効果的な教材開発と、指導者の研修・養成が課題となる。

(地域・学校における指導体制)

- 各学校においては、校長の方針や各教員の取組によって意識や取組の差があることが指摘された。各学校においては、校長がリーダーシップを発揮し、学校全体の取組方針を明確にした上で、全教員の共通理解を図りながら、中核教員を中心とした校内の英語教育に係る指導体制の強化に取り組むことが重要である。また、指導体制の強化においては、①効果的な教材開発とともに、②生徒のコミュニケーション能力を総合的に育成することができる指導者の確保を含めた充実が必要である。
- 地方自治体においては、各学校における英語教育充実のため、学校や地域全体で取り組むことが必要である。例えば、市町村単位で、地域の指導的立場にある教員が複数の小・中学校を受け持ち、英語教育担当指導主事や外部専門家等とチームを組んで指導に当たるなど、地域の実情に応じた柔軟かつ効果的な指導を行う体制づくりが期待される。

また、優れた指導力を有する教員を、地域の研修講師や小・中学校の接続を前提とした専科指導等が可能となる「英語教育推進リーダー」として養成する。

- このような体制の中で、小・中・高等学校の一貫した英語教育や、小学校の英語教育の専門性の向上等を推進することが期待される。具体的には、地域において、英語教育のPDCAサイクル¹¹を通じて、「英語教育推進リーダー」と英語教育担当指導主事等が中心となって、小・中・高等学校の連携による研修や、教員委員会と大学・外部専門機関との連携による研修などを実施するとともに、各学校を訪問し、指導計画の作成やCAN-DO形式での学習到達目標を活用した授業改善などについて指導・助言を行うことなどが期待される。
- また、そのような体制を確保しながら、養成・研修・採用を通じた充実を図っていくことが重要である。小・中・高等学校におけるコア・カリキュラム開発を踏まえた教職課程の見直しが必要である。小学校については、現職教員が外国語の指導に関す

¹¹ 平成28年度より、都道府県ごとに「英語教育改善プラン」の策定・公表を行い、目標設定・管理の下、必要な研修等を実施。

る専門性を高めることができるよう、小学校の教科化に必要な内容を加えた認定講習の開設支援等を行う。あわせて、専科指導を行う教員の養成・確保や、外部人材の活用支援等により、専門性を一層重視した指導体制を構築する。

(外部専門人材の確保)

- 児童生徒が英語に触れる機会を充実するため、英語を母語とする外国人やこれに準ずる者を教員や外国語指導助手等として受け入れ、単独授業を含む教育活動全般に登用していくことも必要である。各都道府県教育委員会においては、文部科学省が示した指針¹²も参考とし適切に基準を定め、各学校が特別免許状制度を活用した効果的な英語教育を行えるよう、外国人も含め英語力・指導力の高い外部専門人を活用することが期待される。また、英語が堪能な地域人材や英語担当教員の退職者等を非常勤講師として活用するための方策も講じる。その際、自治体においては、必要な外部専門人材の確保が困難な学校もあることに配慮した適切な配置等を行うことが必要である。

¹² 平成 26 年6月 19 日「特別免許状の授与に係る教育職員検定等に関する指針」の策定について(文科省通知)

知識・技能

思考力・判断力・表現力等

学びに向かう力、人間性等

- 外国語の特徴やきまりに関する理解
 - ・音声、語彙・表現、文法の知識
- 言語の働き、役割に関する理解 (例)
 - ・コミュニケーションを円滑にする (繰り返す, 言い換える 等)
 - ・気持ちを伝える (感謝する, 謝る 等)
 - ・情報を伝える (説明する, 理由を述べる 等)
 - ・考えや意図を伝える (賛成・反対する, 主張する 等)
 - ・相手の行動を促す (依頼する, 許可する 等)

※各言語活動に応じた言語の働き

- 外国語の音声、語彙・表現、文法の知識を、4技能（「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」）を活用した実際のコミュニケーションにおいて運用する技能など

- ◆外国語で、情報や考えなどを表現し伝え合う力
 - コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて、幅広い話題について、外国語を聞いたり読んだりして情報や考えなどを的確に理解するコミュニケーション力
 - コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて、幅広い話題について、外国語を話したり書いたりして情報や考えなどを適切に表現するコミュニケーション力
 - 外国語で聞いたり読んだりしたりして活用して、外国語で話したり書いたりして情報や考えなどの概要・詳細・意図を伝え合うコミュニケーション力
- ◆考えの形成、整理
 - 目的等に応じて、外国語の情報を選択したり抽出したりする力
 - 知識や得た情報を活用して、自分の意見や考えを外国語で形成・整理・再構築する力
 - 形成・整理・再構築した自分の意見や考えを、実際に外国語で表現する力など

- 外国語を通じて、言語やその背景にある文化を尊重しようとする態度
- 自律的・主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度
- 他者を尊重し、聞き手・読み手・話し手・書き手に配慮しながら、外国語で聞いたり読んだりしたりして活用して、情報や考えなどを外国語で話したり書いたりして表現しようとする態度
- 外国語を通じて積極的に人や社会と関わり、自己を表現するとともに他者を理解するなど互いの存在について理解を深め、尊重しようとする態度など

	知識・技能 (何を知っているか、何ができるか)	思考力・判断力・表現力等 (知っていること、できることをどう使うか)	学びに向かう力、人間性等 (情意、態度等に関わるもの) (どのように社会・世界と関わりよりよい人生を送るか)
外国語活動 小学校	<ul style="list-style-type: none"> ○外国語への慣れ親しみ ○外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験すること ○外国語を聞いたこと、話したりすること 	<ul style="list-style-type: none"> ○簡単な語句や表現を使って、自分のことや身の回りのことについて、友達に質問したり質問に答えたりするコミュニケーション力 	<ul style="list-style-type: none"> ○外国語を用いた体験的なコミュニケーション活動を通じて言語の大切さや、文化の違いに気付く ○外国語を用いてコミュニケーションを図ることの楽しさや言語を用いてコミュニケーションを図る大切さを知り、相手意識を持って外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度
外国語 小学校	<ul style="list-style-type: none"> ○言葉の仕組みへの気付き (音、単語、語順など) ○聞くことに関する知識・技能 ○話すことに関する知識・技能 ○外国語を読んだり、書いたりすること 	<ul style="list-style-type: none"> ○馴染みのある定型表現を使って、自分の好きなものや、一日の生活などについて、友達に質問したり質問に答えたりするコミュニケーション力 	<ul style="list-style-type: none"> ○外国語の学習を通じて、言語やその背景にある文化を尊重しようとする態度 ○外国語を用いてコミュニケーションを図ることの楽しさや言語を用いてコミュニケーションを図る大切さを知り、相手意識を持って外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度
外国語 中学校	<ul style="list-style-type: none"> ○外国語の音声、語彙・表現、文法の知識 ○言語の働きや役割などの理解 ○外国語の音声、語彙・表現、文法の知識を、4技能（「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」）を活用して実際のコミュニケーションで運用する技能 	<ul style="list-style-type: none"> ○具体的に身近な話題について、学校、地域、他教科等での学習内容等と関連付けながら、互いの考えや気持ちなどを外国語で適切に伝え合う力 ○聞いたり読んだりしたこと、活用して話したり書いたりして発信するコミュニケーション力 	<ul style="list-style-type: none"> ○外国語を通じて、言語やその背景にある文化を尊重しようとする態度 ○他者を尊重し、聞き手・読み手・話し手・書き手に配慮しながら、外国語でコミュニケーションを図ろうとする態度

	<p>知識・技能 (何を知っているか、何ができるか)</p>	<p>思考力・判断力・表現力等 (知っていること・できることをどう使うか)</p>	<p>学びに向かう力、人間性等 情意、態度等に関わるもの (どのように社会・世界と関わりよりよい人生を送るか)</p>
<p>外国語 高等学校</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○外国語の音声、語彙・表現、文法の知識 ○言語の働きや役割などの理解 ○外国語の音声、語彙・表現、文法の知識を、4技能（「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」）を活用して実際のコミュニケーションで運用する技能など 	<ul style="list-style-type: none"> ○コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて、日常的な話題から時事問題や・社会問題まで幅広い話題について、外国語を聞いたり読んだりして情報や考えなどを的確に理するコミュニケーション力 ○コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に 応じて、日常的な話題から時事問題・社会問題まで幅広い話題について、外国語を話したり書いたりして情報や考えなどを適切に表現する コミュニケーション力 ○外国語で聞いたり読んだりしたことを活用して、 外国語で話したり書いたりして情報や考えなどの 概要・詳細・意図を伝え合うコミュニケーション力 	<ul style="list-style-type: none"> ○外国語を通じて、言語やその背景にある文化を尊重しようとする態度 ○自律的・主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度 ○他者を尊重し、聞き手・読み手・話し手・書き手に配慮しながら、外国語で聞いたり読んだりしたことを活用して、情報や考えなどを外国語で話したり書いたりして表現しようとする態度 など

言語力の育成方策について (報告書案) (平成19年8月16日言語力育成協力者会議配付資料)

(1) 言語の果たす役割

①知的活動(特に思考や論理)の基盤、②感性・情緒の基盤、③他者とのコミュニケーション(対話や議論)の基盤

(2) 指導の充実

◆言語力の育成については、国語科を中核としつつ、すべての教科等での言語の運用を通じて、論理的思考力をはじめとした種々の能力を育成するための道筋を明確にしていくことが必要。

① 知的活動に関すること

- ・事実を正確に理解し、他者に的確に分かりやすく伝える技能を伸ばすこと
- ・自らの考えを深めることで、解釈や説明、評価や論述をする力を伸ばすこと
- ・考えを伝え合うことで、自らの考えや集団の考えを発展させる力を伸ばすこと

② 感性・情緒等に関すること

- ・感性や情緒は、他者との人間関係の中で育まれていくものであり、美しい言葉や心のこもった言葉の交流は、人間関係を豊かなものに高めていくものであること

③ 他者とのコミュニケーションに関すること

- ・個々人が他者との対話を通して考えを明確にし、自己を表現し、他者を理解するなど、お互いの考えを深めていくことが人々の共同生活を豊かなものにする
- ◆発達の段階が上がるにつれて、具体と抽象、感覚と論理、事実と意見、基礎と応用、習得と活用と探究などについて認識や実践ができる水準が変化。それに応じて、指導内容や言語活動の特色付けをしていく必要がある。

次期学習指導要領において外国語教育を通じて求められる資質・能力の改善(イメージ)

学習指導要領において、③言語の果たす役割として他者とのコミュニケーション(対話や議論等)の基盤を形成する観点を資質・能力全体を貫く軸として重視しつつ、上記①、②の観点からも求められる資質・能力が明確となるよう整理することを通じて、外国語教育を改善・充実

- ・身近で簡単な話題について友人に質問したり質問に答えたりする能力(小学校)
- ・互いの考えや気持ちなどを理解し、根拠を持って英語で伝え合う能力(中学校)
- ・幅広い話題について、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝え合ったりする能力(高等学校)
- ・相手意識を持って外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度(小学校)
- ・他者を尊重し、聞き手・読み手・話し手・書き手に配慮しながら、外国語でコミュニケーションを図ろうとする態度(中学校・高等学校)等

思考力
判断力
表現力
等

学びに
向かう力、
人間性等

目的に応じた
コミュニケーションのプロ
セス

目的の設定・理解

目的に応じた
発信までの方向性の決定・言
語活動等の見直し

目的達成のための言語活動
(技能統合型)

言語・内容の両
面におけるま
めと振り返り

次のコミュニケーションにおける目的
的設定・活動へ

※必ずしも一方通行の流れではない

聞くこと

読むこと

話すこと

書くこと

語彙・表現・文法等

複数の技能を統合した活動

プロセスの中で働く思考・判断・表現等のうち、特に重視すべきものの例

思考
意見や考えの形成

判断

表現

目的の理解

目的に応じた情報の抽出

関連する知識や情報の検索

課題について得られた知識や情報を整理・統合

知識や情報を利用して自分の考えを形成・整理

意見や考えの吟味と再構築

多様な見方や考え方に基づいた次の思考プロセスへ

目的の明確化と必要な情報の把握

目的達成に必要な情報の選択

様々な見方や考え方の共通点・相違点等の評価・選択・決定

自分の考えや主張を適切に語彙・表現・文法を用いて効果的に伝えることの意味決定

情報間の関係性を構成

目的に関する論点・解決策の整理

流暢さと正確さのバランス

インタラクティブによる表現

目的に応じて伝え合うことを通じた表現の深化・多様化

「聞くこと」及び「読むこと」を活用した「話すこと」及び「書くこと」による言語活動（図表等による表現も含む）

技能統合型の活動を通じた英語による思考力・判断力・表現力を育成

※2技能以上を効果的に組み合わせる統合的に活用（例）（聞いたり読んだりして得た情報について、その概要や要点を的確に把握し、自分の意見や考えなどとの共通点や相違点などを示しながら論理的・批判的に話したり書いたりして表現する力、与えられた話題について、限られた時間の中で自分の意見を説得力を持って表現する力、相手からの問いかけに応じて自身の経験や考えを適切に述べる力） など

(案)「英語」において特に重視すべき思考力・判断力・表現力等の例

「聞く」「読む」「話す」「書く」の4技能をバランス良く総合的に育成するとともに、複数の領域を統合的に活用し、情報や考えなどを的確に理解したり、目的に応じたコミュニケーションのプロセスを通じて適切に伝えたりする思考力、判断力、表現力。

(例)

〈「聞くこと」の領域〉

- まとまりのある英文、比較的長い対話文、スピーチ、プレゼンテーション、講義などを聞き、複数の情報を整理するなど思考・判断して、必要な情報を得たり概要や要点を把握したりする力。

〈「読むこと」の領域〉

- まとまりのある英文、比較的長い対話文、英語で書かれた図表などを読み、複数の情報を整理・統合するなど思考・判断して、必要な情報を得たり概要や要点を把握したりする力。

〈「話すこと」の領域〉

- （発表）多様な考え方ができる話題や時事問題・社会問題などについて話して説明するとともに、自分の意見や考えなどをまとめ、適切な語彙・表現・文法を用いて論理的・批判的に話して伝える力。

- （やり取り）身近な話題や知識のある話題について、情報や意見について交換するとともに、

自分の意見や考えをまとめ、適切な語彙・表現・文法を用いて伝え合う力

〈「書くこと」の領域〉

- 多様な考え方ができる話題や時事問題・社会問題などについて、自分の意見や考えなどをまとめ、論点や根拠を明確にしながら、適切な語彙・表現・文法を用いて論理的・批判的に書いて伝える力。

〈技能統合の領域〉（4技能のうち2技能以上を統合的に活用）

- 聞いたり読んだりして得た情報（英文や図表など）について、その概要や要点を的確に把握するとともに、自分の意見や考えなどとの共通点や相違点などを示しながら、論理的・批判的に話したり書いたりして表現する力。

※「技能」と「領域」の考え方については引き続き検討

小・中・高等学校を通じて一貫した目標設定の在り方について

※CEFRとは、シラバヒやカリキュラムの手引きの作成、学習指導教材の編集のために、透明性が高く分かりやすく参照できるものとして、20年以上にわたる研究を経て、2001年に欧州評議会が発表。

英語教育の抜本的強化のイメージ

(秋以降、外国語WGにおいて専門的に検討予定)

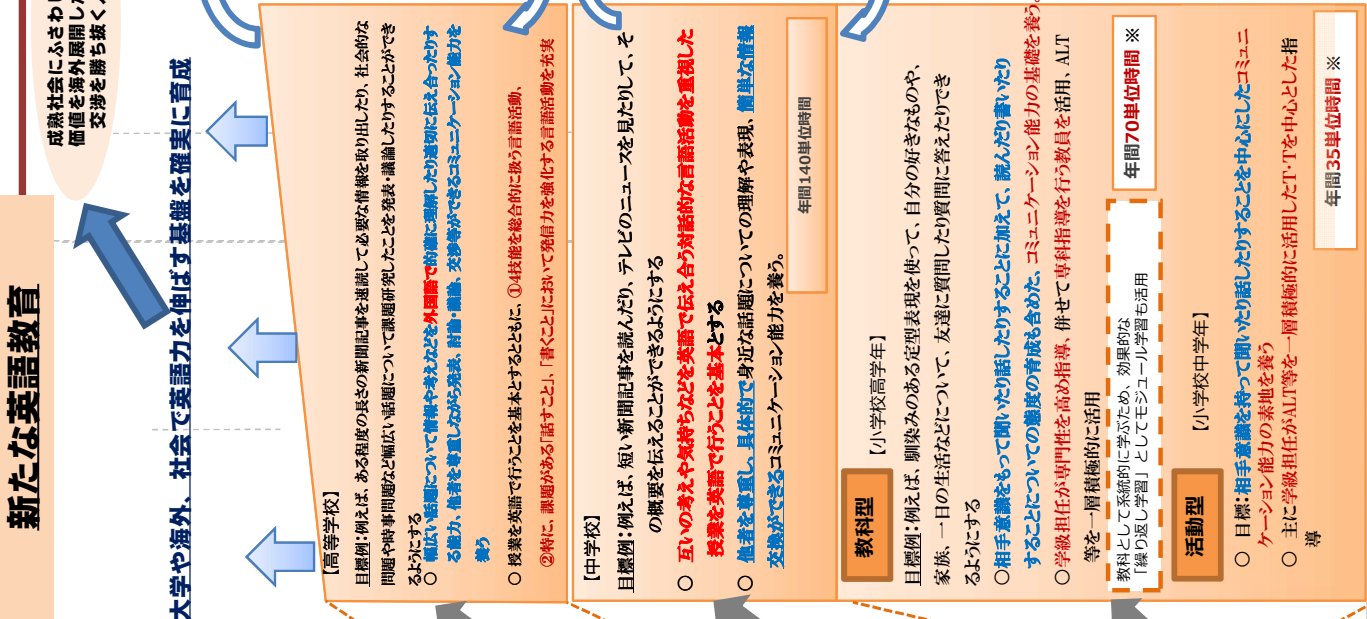
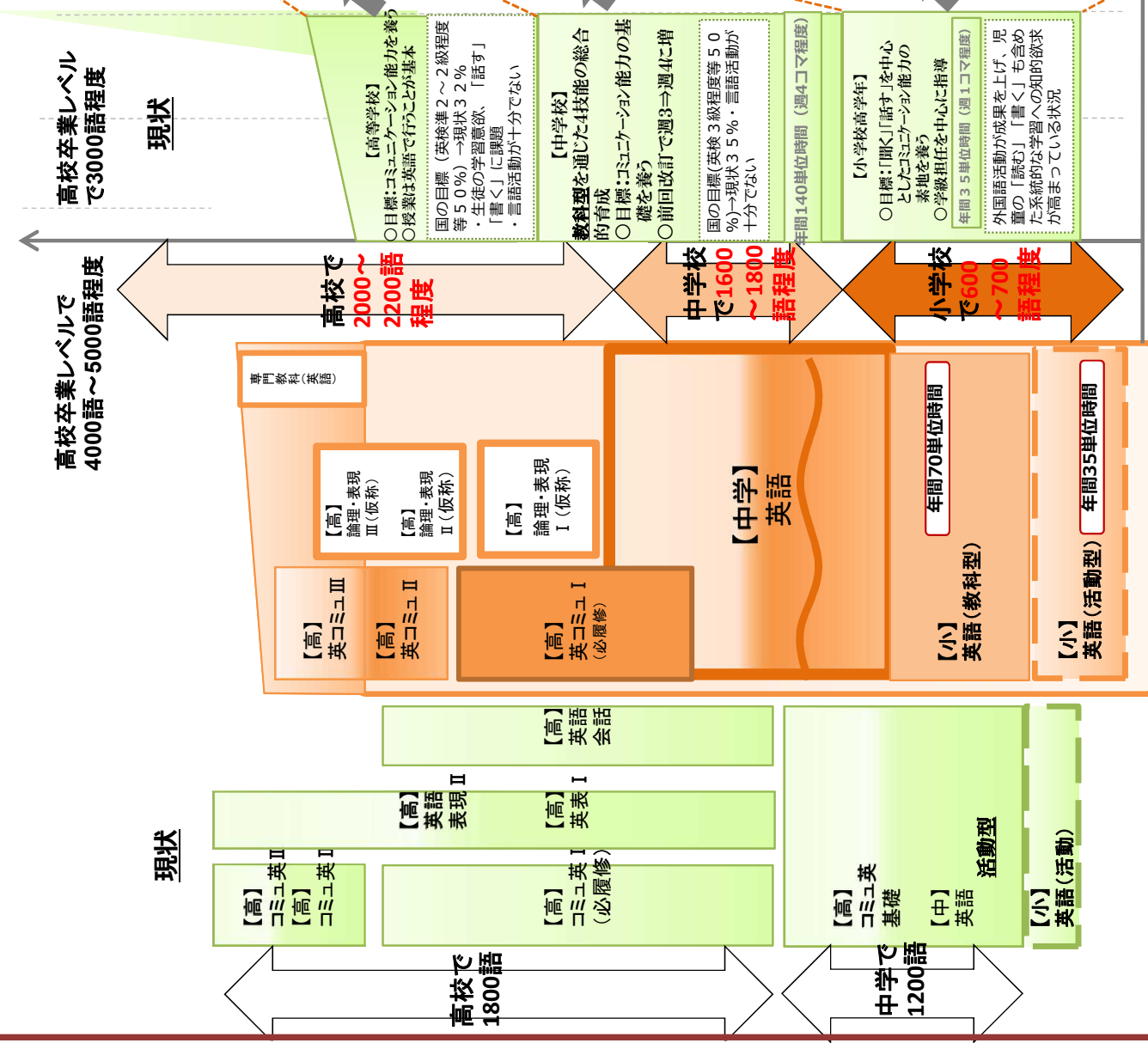
改訂版(案)

2016年1月12日現在 取扱注意

別添6

※具体的な小学校の授業時数については、年内~年明けを目的に教育課程全体の構成とともに検討を進め、一定の方向性を提示

新たな英語教育



CEFR

C1

B2

B1

A2

A1

【高等学校】

◎外国語やその背景にある文化を尊重し、外国語の見方・考え方を働かせ、聞き手・読み手・話し手・書き手に配慮しながら、情報や考えなどを外国語で的確に理解したり、表現し、伝え合ったりするコミュニケーションを行うことができる資質・能力を次のとおり育成する。

- ①外国語の学習を通じて、言語の働きや役割などを理解し、外国語の音声・語彙・表現、文法を、4技能（聞くこと、読むこと、話すこと、書くこと）において実際のコミュニケーションの場面で運用できる技能を身に付ける。
- ②外国語で目的・場面・状況等に応じて、幅広い話題について、情報や考えなどの概要・詳細・意図を的確に理解したり適切に表現し伝え合ったりするコミュニケーション力を養う。
- ③外国語の学習を通じて、聞き手・読み手・話し手・書き手に配慮しながら、自律的・主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。

➤ 目標を踏まえた具体的な指標形式の目標を提示

【中学校】

◎外国語やその背景にある文化を尊重し、外国語の見方・考え方を働かせ、聞き手・読み手・話し手・書き手に配慮しながら、簡単な情報や意見などの交換などのコミュニケーションを行うことができる資質・能力を次のとおり育成する。

- ①外国語を通じて、言語の働きや役割などを理解し、外国語の音声・語彙・表現、文法を、4技能（聞くこと、読むこと、話すこと、書くこと）において実際のコミュニケーションの場面で運用できる技能を身に付ける。
- ②外国語で具体的に身近な話題についての理解や表現、簡単な情報や意見などの交換などができるコミュニケーション力を養う。
- ③他者を尊重し、聞き手・読み手・話し手・書き手に配慮しながら、コミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。

➤ 目標を踏まえた具体的な指標形式の目標を提示

【小学校高学年】

◎言語や文化の多様性を知り、外国語の見方・考え方を働かせ、それらの大切さに気付いて、相手意識をもって聞いたり話したりすることに加えて、読んだり書いたりするコミュニケーション能力の基礎となる資質・能力を次のとおり育成する。

- ①外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、言語の仕組み（音、単語、語順など）や、その背景にある文化を尊重するようにする。
- ②身近で簡単なことについて外国語の基本的な表現に関わって聞くことや話すことなどのコミュニケーションを行う力を養う。
- ③相手意識を持ってコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。

➤ 目標を踏まえた具体的な指標形式の目標を提示

【小学校中学年】

◎言語や文化の多様性を知り、外国語の見方・考え方を働かせ、それらの大切さに気付くとともに、相手意識を持って聞いたり話したりするコミュニケーション能力の素地となる資質・能力を次のとおり育成する。

①外国語を用いた体験的なコミュニケーション活動を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語との音声の違い等に気付く。

②外国語の音声等に慣れ親しませながら、コミュニケーションを行う力を養う

③相手意識を持ってコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。

➤ 目標を踏まえた具体的な指標形式の目標を提示



高等学校基礎学力アップ
(仮称)



全国学力・学習状況調査

次期学習指導要領では、小・中・高等学校を通じて①学校段階間の学びを円滑に接続し、②「英語を使って何ができるようになるか」という観点から、一貫した教育目標(指標形式の目標)などを提示する方向で改善を図る。

外国語教育の目標と学習過程の全体像(案) イメージ

別添7にあわせて
後日修正

各学校では、学習指導要領に基づき、技能ごとの学習到達目標を設定し、目標に沿った指導及び評価を一体的に実施

教科等の目標の改善・イメージ

	小学校中学年(活動型)	小学校高学年(教科型)	中学校	高等学校
教科等の目標	外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、相手意識を持ってコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声等に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う	外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、相手意識を持ってコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声等に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の基礎を養う	外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、他者を尊重し、読み手・話し手・書き手に配慮しながら、コミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図るとともに、具体的な身近な話題についての理解や表現、簡単な情報交換ができるコミュニケーション能力を養う	外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、他者を尊重し、読み手・話し手・書き手に配慮しながら、コミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図るとともに、幅広い話題についての情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う
外国語活動・英語の目標	<p>○自分や身の回りのごく限られたことについて話し手の意向などを理解すること</p> <p>・自分の考えなどを話すこと</p> <p>○アルファベットの文字</p> <p>・アルファベットの文字を読むこと・書くこと</p>	<p>○身近で簡単な話題</p> <p>・話し手の意向などを理解すること</p> <p>・自分の考えなどを話すこと</p> <p>○アルファベットの文字</p> <p>・アルファベットの文字を読むこと・書くこと</p>	<p>○具体的に身近な話題</p> <p>・話し手の意向などを理解すること[~]でできるようにする</p> <p>・自分の考えなどを話すこと</p> <p>・書き手の意向などを理解すること</p> <p>・自分の考えなどを書くこと</p>	<p>(必修教科目)・身近な話題</p> <p>・4技能の基礎的な能力・日常的な話題、関心のある分野・情報や考えなどを的確に理解し、英語話者が理解できる程度の英語で適切に伝える(選択科目)</p> <p>・時事的な話題や社会問題を含む幅広い話題・情報や考えなどを的確に理解し、英語話者が理解できる程度の英語で伝える</p>
英語の学習過程	<p>○ 目的の設定・理解</p> <p>・簡単な語句や表現を使って、自分のことや身の回りについて話ししたり聞いたりして、外国語によるコミュニケーションを体験する。</p> <p>○ 目的達成のための活動</p> <p>・使用表現について理解したり練習したりする活動</p> <p>・互いの考えや気持ちを伝え合う活動</p> <p>※ペアワーク・グループワーク</p> <p>[言語の使用場面の例]</p> <p>・特有の表現がよく使われる場面 挨拶、自己紹介、買物、食事、道案内</p> <p>・児童の身近な暮らしにかかわる場面 家庭生活、学校での学習・活動、地域行事、子どもの遊び</p> <p>[コミュニケーションの動きの例]</p> <p>・相手との関係を円滑にする、気持ちを伝える、事実を伝える、考えや意図を伝える、相手の行動を促す</p> <p>○ まとめとふり振り返り</p>	<p>○ 目的の設定・理解</p> <p>・馴染みのある定型表現を使って、自分の好きなものや、一日の生活などについて、友達に質問したり質問に答えたりできる。</p> <p>○ 目的達成のための活動</p> <p>・言語材料について理解したり練習したりする活動</p> <p>・互いの考えや気持ちを伝え合う活動</p> <p>※ペアワーク・グループワーク</p> <p>[言語の使用場面の例]</p> <p>・特有の表現がよく使われる場面 挨拶、自己紹介、買物、食事、道案内</p> <p>・児童の身近な暮らしにかかわる場面 家庭生活、学校での学習・活動、地域行事、子どもの遊び</p> <p>[コミュニケーションの動きの例]</p> <p>・相手との関係を円滑にする、気持ちを伝える、事実を伝える、考えや意図を伝える、相手の行動を促す</p> <p>○ まとめとふり振り返り</p>	<p>(例)「話すこと」</p> <p>・日常生活や自分に関連した事柄に関する短い簡単なやりとりをする</p> <p>・身近な事柄や出来事について、簡単な語句や文を用いて即興で話すことができるようになる</p>	<p>(例)「話すこと」</p> <p>・身近な話題や知識のある話題について、簡単な英語を用いて情報や意見を交換することができるようにする</p> <p>・身近な話題や関心のある事柄について、即興で説明することができるようにする</p> <p>・時事問題や社会問題について、内容を具体的に説明するとともに自分の意見を加えて話すことができるようになる</p>

指標形式の目標

○ 目的の設定・理解

・簡単な語句や表現を使って、自分のことや身の回りについて話ししたり聞いたりして、外国語によるコミュニケーションを体験する。

○ 目的達成のための活動

・使用表現について理解したり練習したりする活動

・互いの考えや気持ちを伝え合う活動

※ペアワーク・グループワーク

[言語の使用場面の例]

・特有の表現がよく使われる場面
挨拶、自己紹介、買物、食事、道案内

・児童の身近な暮らしにかかわる場面
家庭生活、学校での学習・活動、地域行事、子どもの遊び

[コミュニケーションの動きの例]

・相手との関係を円滑にする、気持ちを伝える、事実を伝える、考えや意図を伝える、相手の行動を促す

○ まとめとふり振り返り

英語の学習過程

○ 目的の設定・理解

・学校や社会生活に関する幅広い話題の概要・要点を理解し、情報や考えなどを伝えることができる

○ 目的達成のための活動

・幅広い話題について情報や考えなどを的確に理解する活動

・幅広い話題について発表、討論、議論、交渉などを行う活動

[コミュニケーション能力の設定]

・4技能の基礎的な能力(必修教科目)

⇒ 的確に理解し、適切に伝える能力(必修教科目及び選択科目)

・英語話者が理解できる程度の英語(必修教科目)

⇒ 英語話者が理解できる程度の英語+ある程度の流暢さ(選択科目)

[話題の設定]

・身近な話題及び日常的な話題や関心のある分野(必修教科目)

⇒ 時事的な話題や社会問題など(選択科目)

⇒ 情報や考えなどのやりとりに関する言語活動の設定

・スピーチやプレゼンテーション等 ⇒ デイベートやディスカッション等

※小・中学校で扱った話題や表現を繰り返し学ぶ。その際、小・中学校とは異なる場面的な文脈で活用できるようにするなど、スライダに学習する

※具体的な表現を自ら考え、言語活動ができるようにする

※ペアワークやグループワークを学習形態の基本とする

○ まとめとふり振り返り

・言語面でのまとめと振り返り(流暢さを重視したスピーキングの後に行う正確さをより重視したライティング(質の高い高まり)など)

・内容面でのまとめと振り返り(得られた情報や考えの整理など)

聞くこと

	A1	A2	B1	B2
CEFR 自己評価表 (参考)	はつきりとゆっくりと話してもらえれば、自分、家族、すぐ周りの具体的なものに関する聞き慣れた語でごく基本的な表現を聞き取れる。	(ごく基本的な個人や家族の情報、買い物、近所、仕事などの) 直接自分に関連した領域で最も頻繁に使われる語彙や表現を理解することができる。短い、はつきりとした簡単なメッセージやアナウンスの要点を聞き取れる。	仕事、学校、娯楽で普段出会うような身近な話題について、明瞭で標準的な話し方の会話なら要点を理解することができる。 話し方が比較的ゆっくり、はつきりとしているなら、時事問題や、個人的もしくは仕事上の話題についても、ラジオやテレビ番組の要点を理解することができる。	長い会話や講義を理解することができる。また、もし話題がある程度身近な範囲であれば、議論の流れが複雑であっても理解できる。 たいいていのテレビのニュースや時事問題の番組も分かる。 標準語の映画なら、大多数は理解できる。
想定される 学校種・教科、科目等	小学校高学年・外国語 + 小学校・外国語	中学校・外国語 + 高等学校・外国語、必修教科目	高等学校・外国語、選択科目	(高等学校・外国語、選択科目 + 専門教科、英語等)
国の指標形式の 主な目標	<ul style="list-style-type: none"> □アルファベットの発音を聞いて、どの文字であるかわかるようにする。 □挨拶や短いごく簡単な指示を聞いて理解することができるようにする。 □ゆっくりはつきりと、繰り返して話されれば、自分に聞こえることや身近で具体的な事柄を表わすごく簡単な語句や文を聞き取ることができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> □短い簡単なメッセージやアナウンスを聞いて、必要な情報を聞き取ることができるようにする。 □身近な話題に関する短い会話を聞いて、概要や要点を理解することができるようにする。 □ゆっくりはつきりと話されれば、身近な事柄に関する短い説明の要点を理解することができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> □身近な話題や知識のある社会的な話題に関する短い会話を聞いて、概要や要点を理解することができるようにする。 □比較的ゆっくりはつきりと話されれば、時事問題や社会問題に関する短い平易な説明を聞いて、要点を理解することができるようにする。 □比較的ゆっくりはつきりと話されれば、馴染みのある話題を扱ったラジオ番組やテレビ番組を視聴して、要点を理解できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> □母語話者同士による多様な話題の長い会話を聞いて、概要や要点を理解できるようにする。 □身近な話題に関する複雑な流れの議論を聞いて、話の展開を理解できるようにする。 □自然な速さで話される時事問題や社会問題に関する長い説明を聞いて、概要や要点を理解できるようにする。 □ある程度知識のある社会問題や時事問題に関するラジオ番組やテレビ番組を視聴して、概要や要点を理解することができるようにする。
授業における主な 言語活動 (言語の使用場面の例)	<ul style="list-style-type: none"> ○アルファベットの発音の識別 ○挨拶や短いごく簡単な指示の理解と反応 ○自分に関することや身近で具体的な事柄を表わすごく簡単な語句や文の聞き取り など 	<ul style="list-style-type: none"> ○挨拶や簡単な指示の理解と反応 ○日常生活における基本的な情報の理解 ○身の回りの事柄に関する平易でごく短い会話や説明における必要な情報の聞き取り など 	<ul style="list-style-type: none"> ○身近な話題や知識のある社会的な話題に関する短い会話を聞いて、話題とそれに対する各話者の発話の要点を整理して比較する。 ○時事問題や社会問題に関する短い平易な説明からの情報取得 ○馴染みのある話題を扱ったラジオ番組やテレビ番組の要点理解 	<ul style="list-style-type: none"> ○多様な話題の長い会話の概要・要点理解 ○複雑な議論における話の展開や論点の理解 ○時事問題や社会問題に関する説明の概要・要点理解 ○ある程度知識のある話題のラジオ番組やテレビ番組の概要・要点理解 など
言語の働きの例	<ul style="list-style-type: none"> (コミュニケーションを円滑にする) ・相づちを打つ (気持ち伝える) ・褒める (情報を伝える) ・説明する (考えや意図を伝える) ・申し出る (相手の行動を促す) ・依頼する 	<ul style="list-style-type: none"> ・言い換える ・繰り返す ・聞き直す ・謝る ・感謝する ・報告する ・賛成する ・誘う 	<ul style="list-style-type: none"> ・友人からの招待など、個人的な事柄に関する短い簡単なメッセージを聞いて、適切に応答する。 ・店や公共交通機関などで用いられる簡単なアナウンスを聞いて、必要な情報を得る。 ・友人や家族、学校生活など、身の回りの事柄に関する平易で短い会話や説明を聞いて、概要や要点を理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・多様な話題の長い会話を聞いて、話題とそれに対する各話者の発話の要点を理解する。 ・身近な話題に関する複雑な流れの議論を聞いて、話の展開を理解するとともに、各話者の主要な論点を整理して比較する。 ・時事問題や社会問題に関する説明を聞いて、概要や要点を理解するとともに、得た情報を当該の話題に関するスピーチ、プレゼンテーション、ダイベート、ディスカッション、エッセーライティングなどにおいて活用する。 ・ある程度知識のある話題を扱ったラジオ番組やテレビ番組を視聴して、得た情報を書いてまとめるとともに、それを他者に口頭で伝える。
言語の働きの例	<ul style="list-style-type: none"> (コミュニケーションを円滑にする) ・相づちを打つ (気持ち伝える) ・褒める (情報を伝える) ・説明する (考えや意図を伝える) ・申し出る (相手の行動を促す) ・依頼する 	<ul style="list-style-type: none"> ・言い換える ・繰り返す ・聞き直す ・謝る ・感謝する ・報告する ・賛成する ・誘う 	<ul style="list-style-type: none"> ・友人からの招待など、個人的な事柄に関する短い簡単なメッセージを聞いて、適切に応答する。 ・店や公共交通機関などで用いられる簡単なアナウンスを聞いて、必要な情報を得る。 ・友人や家族、学校生活など、身の回りの事柄に関する平易で短い会話や説明を聞いて、概要や要点を理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・多様な話題の長い会話を聞いて、話題とそれに対する各話者の発話の要点を理解する。 ・身近な話題に関する複雑な流れの議論を聞いて、話の展開を理解するとともに、各話者の主要な論点を整理して比較する。 ・時事問題や社会問題に関する説明を聞いて、概要や要点を理解するとともに、得た情報を当該の話題に関するスピーチ、プレゼンテーション、ダイベート、ディスカッション、エッセーライティングなどにおいて活用する。 ・ある程度知識のある話題を扱ったラジオ番組やテレビ番組を視聴して、得た情報を書いてまとめるとともに、それを他者に口頭で伝える。
言語活動の例 (共通話題： フェアトレード)	国名と食品名を表す単語を聞いて、それらを表すイラストと結び付けるとともに、国名とその国で生産量が多いと思われる食品名とを結び付ける。	イラストや写真などを参考にしながら、お茶、コーヒー、綿などの農産品の主な生産国と生産者の収入に関する説明を聞いて、得た情報を表にまとめ	サッカーボールの生産事情(生産国や生産者など)に関する説明を聞いて、その歴史や問題点を整理するとともに、日常生活においてフェアトレードが必要か他の商品に関する説明を聞いた	日本におけるフェアトレード市場の歴史、現状、課題に関する説明を聞いて、必要な情報を得るとともに、それに基づいて、日本におけるフェアトレード市場拡大のためにどのような方策が有効であるかについて意見を出し合う。

書くこと					
	A1	A2	B1	B2	
(参考) CEFR 自己評価表	新年の挨拶など短い簡単な葉書を書くことができる。 例えばホテルの宿帳に名前、国籍や住所といった個人のデータを書き込むことができる。	直接必要のある領域での事柄なら簡単に短いメモやメッセージを書くことができる。 短い個人的な手紙など書くことができる：例えば礼状など。	身近に個人的に関心のある話題について、つながりのあるテキストを書くことができる。 私信で経験や印象を書くことができる。	興味関心のある分野内なら、幅広くいろいろな話題について、明瞭で詳細な説明文を書くことができる。 エッセイやレポートで情報を伝え、一定の視点に対する支持や反対の理由を書くことができる。 手紙の中で、事件や体験について自分にとつての意義を中心に書くことができる。	
想定される 学校種・教科、科目等	小学校高学年・外国語 + 小学校・外国語	中学校・外国語 + 高等学校・外国語、必修教科目	高等学校・外国語、選択科目	(高等学校・外国語、選択科目 + 専門教科、英語 等)	
国の指標形式の 主な目標	□目的を持ってアルファベットの大文字と小文字を活字で書くことができるようにする。 □例文を参考にしながら、音声などで十分慣れ親しんだ語句や文を書き写すことができるようにする。	□自分が必要とする事柄について、短い簡単なメモやメッセージなどを書くことができるようにする。 □身近な事柄について、簡単な語句や表現や用いて、短い説明文を書くことができるようにする。 □聞いたり読んだりした内容について、簡単な語句や表現を用いて、自分の意見や感想を書くことができるようにする。	□自分の経験や身近な事柄について、複数のパラグラフから成る説明文を書くことができるようにする。 □関心のある分野のテーマに関する記事や資料を読んで、その概要や要点を書いてまとめることができるようにする。 □関心のある分野のテーマについて、まとまりのある文章で具体的に説明するとともに、自分の意見やその理由を加えて書くことができるようにする。	□関心のある分野のテーマについて、事実や情報などを明確且つ詳細に伝える説明文を書くことができるようにする。 □時事問題や社会問題など幅広い話題に関する記事や資料を読んで、その概要や要点を書いてまとめることができるようにする。 □時事問題や社会問題など幅広い話題について、得た情報を活用しながら、自分の意見やその理由を論理的に書くことができるようにする。 □Eメール、エッセイ、レポートなどを、それぞれの用途に合った文体で書くことができるようにする。	
授業における主な 言語活動 (言語の使用場面の例)	○アルファベットの大文字・小文字 ○語間の区切りに留意した文(書き写し) など ・発音されたアルファベットの大文字・小文字を活字体で書く。 ・語と語の区切りに注意して、身近な事柄に関するごく簡単な文を書き写す。	○符号や語間の区切りに留意した簡単な挨拶 ○自分に関する基本的な情報 ○慣れ親しんだ語句を活用したごく身近な事柄や出来事の説明 など ・符号や語と語の区切りに注意しながら、定型表現を用いて、簡単な挨拶文などを書く。 ・名前、年齢、趣味、好き嫌いなど、自分に関する基本的な情報を文で書く。 ・慣れ親しんだ語句を活用して、ごく身近な事柄や出来事、自分の経験したことなどを説明する文を書くとともに、それを口頭で伝え合う。	○身近な事柄に関する説明 ○関心のあるテーマに関する記事や資料の要約 ○関心のあるテーマに関する説明と意見・理由 ○目的に応じたメモ、アウトライン、原稿 など ・身近な事柄に関する説明文を、文のつながりや文章全体の構成などに注意して書く。 ・関心のある時事問題や社会問題に関する記事や資料を読んで、内容の要点を示す語句や文、つながりを示す語句などに注意しながら要約文を書く。 ・関心のある時事問題や社会問題の内容を具体的に伝える説明文を書くとともに、賛否を明確にしながら、自分の意見やその理由を書く。 ・書いた文章を読み返し、表現や文法の適切さなどに留意して推敲する。	○関心のあるテーマについての詳細な説明 ○幅広い話題に関する記事や資料の要約 ○幅広い話題に関する説明と意見・理由 ○目的に応じたメモ、アウトライン、原稿 など ・関心のある分野のテーマについて、明確に事実を解説したり情報を伝えたりする詳細な説明文を書く。 ・時事問題や社会問題など幅広い話題に関する記事や資料を読んで、内容の要点を示す語句や文、つながりを示す語句などに注意しながら要約文を書く。 ・時事問題や社会問題など幅広い話題について、様々な考え方を整理しながら明確に書いて伝えるとともに、自分の意見や主張及びその理由を論理的に組み立てた論説を書く。 ・書いた文章を読み返し、論点や根拠の明確さ、表現や文法の適切さなどに留意して推敲する。 ・目的に応じたメモ、アウトライン、原稿を書き、それらを活用してスピーチ、プレゼンテーション、ダイベート、ディスカッションなどを行う。	
言語の働きの例	(コミュニケーションを円滑にする) ・相づちを打つ ・褒める ・説明する (考えや意図を伝える) ・申し出る ・依頼する 日常生活における人の行動を表すイラストや写真と英語表現とを結び付け、学習した単語や文を書き写す。	・言い換える ・話題を發展させる ・心配する など ・要約する など ・推論する ・注意を引く など ・命合する	各言語活動に応じた言語の働きを適宜選択		
言語活動の例 (共通話題：日常生活・時間の有効活用)	自分が平日及び週末にふだん何をしているかについて説明する文を書き、グループで伝え合う。	時間があればみたいと思うことや挑戦してみたいことを、その理由とともに説明する複数の文を書き、発表する。	サマータイムを導入している国々におけるその効果や課題に関する複数の資料を読んで、得た情報を書いて要約するとともに、それを口頭で相手に伝える。	日本でサマータイムを導入した場合に予想されるメリット・デメリットについて、資料を活用しながら自分の意見を書き、日本にサマータイムを導入すべきかどうかについて、グループでディスカッションを行う。	

読むこと					
	A1	A2	B1	B2	
（参考） CEFR 自己評価表	例えば、掲示やポスター、カタログの中がよく知っている名前、単語、単純な文を理解できる。	ごく短い簡単なテキストなら理解できる。広告や内容紹介のパンフレット、メニュー、予定表のよなものの中から日常の単純な具体的に予測がつく情報を取り出せる。	非常によく使われる日常言語や、自分の仕事関連の言葉で書かれたテキストなら理解できる。起こったこと、感情、希望が表現されている私信を理解できる。	筆者の姿勢や視点が出ている現代の問題についての記事や報告が読める。現代文学の散文は読める。	
想定される 学校種・教科、科目等	小学校中学年・外国語活動 ＋ 小学校高学年・外国語	中学校・外国語 ＋ 高等学校・外国語、必修教科目	高等学校・外国語、選択科目	(高等学校・外国語、選択科目 ＋ 専門教科、英語等)	
国の指標形式の 主な目標	<ul style="list-style-type: none"> □ ごく身近にあるアルファベットの文字を識別し、発音することができるようにする。 □ 音声で十分に慣れ親しんだ、ごく身近で具体的な事物を表わす単語を見て、その意味を理解できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> □ 日常生活において身の回りにある短い平易なテキストから、必要な情報を読み取ることができるようになる。 □ 平易な英語で書かれた短い物語を読んで、あらすじを理解できるようにする。 □ 身近な話題に関して平易な英語で書かれた短い説明や手紙を読んで、概要や要点を理解できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> □ 身近な話題に関する比較的短い記事やレポート、資料から、必要な情報を読み取ることができるようになる。 □ 短い物語を読んで、あらすじを理解することができるようにする。 □ 社会的な話題に関する短い会話や説明を読んで、概要や要点を理解できるようにする。 □ 英語学習を目的として書かれた記事やレポートを読んで、概要や要点を理解できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> □ 関心のある分野の記事や資料から、必要な情報を読み取ることができるようになる。 □ 興味のある現代小説や随筆を読んで、概要を理解することができるようにする。 □ 時事問題や社会問題に関する記事やレポート、資料を読んで、概要や要点、筆者の姿勢や視点を理解できるようにする。 	
授業における主な 言語活動 （言語の使用場面の例）	<ul style="list-style-type: none"> ○ アルファベットの文字の識別（大文字・小文字を含む）と発音 ○ ごく身近で具体的な事物を表す単語の意味の理解 など ・ アルファベットの文字を見て、それが何かを識別する（大文字・小文字の識別を含む）。 ・ アルファベットの文字を見て、適切に発音する。 ・ 音声で十分に慣れ親しんだ、ごく身近で具体的な事物を表す単語を見て、その意味を推測する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 平易で短いテキストのスキミング ○ 平易で短い物語のあらすじ理解 ○ 平易で短い説明のスキミング など ・ 平易な表現が用いられている広告、パンフレット、予定表などから、自分が必要とする情報を得る。 ・ 平易な英語で書かれた短い物語を読んで、おおよそのあらすじを理解する。 ・ 友人、家族、学校生活などの身の回りの事柄に関して平易な英語で書かれた短い説明を読んで、概要を理解する。 ・ 読んで得た情報やそれに関する意見を伝え合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 短い説明のスキミング ○ 短い物語のあらすじ理解 ○ 時事問題や社会問題に関する平易な説明などのスキミングやスキミング など ・ 比較的短い記事、レポート、資料などから、自分が必要とする情報を得る。 ・ 短い物語を読んで、あらすじを理解して、それを口頭で他者に伝える。 ・ 時事問題や社会問題について情報を得るために効果的な資料を自分で探し、それを理果的に資料を自分で探し、それを読んで概要を理解する。 ・ 資料などを読んで得た情報や英語表現を、当該の話題に関するスピーチ、プレゼンテーション、イベント、ディスカッション、エッセーライティングなどにおいて活用する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 幅広い話題を扱った英文のスキミングやスキミング ○ 現代小説や随筆の概要理解 ○ 時事問題や社会問題に関する説明などのスキミングやスキミング、詳細理解 など ・ 幅広い話題を扱った記事、レポート、資料などから、自分が必要とする情報を得る。 ・ 比較的簡単な現代小説や随筆を読んで、概要を理解するとともに、あらすじや感想を簡単に書いてまとめる。 ・ 時事問題や社会問題について幅広く情報を得るために効果的な資料を自分で探し、必要となる情報の取得、概要理解、詳細理解など、目的に応じた読み方を考える。 ・ 資料などを読んで得た情報や英語表現を、当該の話題に関するスピーチ、プレゼンテーション、レポート、ディスカッション、エッセーライティングなどにおいて活用する。 	
言語活動の例 （共通話題： ユニバーサルデザイン）	<ul style="list-style-type: none"> （コミュニケーションを円滑にする） ・ 相づちを打つ （気持ち伝える） ・ 褒める （情報を伝える） ・ 説明する （考えや意図を伝える） ・ 申し出る （相手の行動を促す） ・ 依頼する 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 話題を発展させる ・ 話題を変える など ・ 訂正する など ・ 仮定する など ・ 注意を引く など 	各言語活動に応じた言語の働きを適宜選択		
言語活動の例 （共通話題： ユニバーサルデザイン）	<ul style="list-style-type: none"> （コミュニケーションを円滑にする） ・ 相づちを打つ （気持ち伝える） ・ 褒める （情報を伝える） ・ 説明する （考えや意図を伝える） ・ 申し出る （相手の行動を促す） ・ 依頼する 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 海外のユニバーサルデザインの具体例を複数紹介した説明をグループで分担して読んで、自分が読んだ内容を他者に伝えるとともに、日本に取り入れた方がよいと思われるものについて、その理由などを含めて簡単な意見交換をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 国内のユニバーサルデザインが生かされた多様な事例について各自で資料を探して読んで、そこから得た情報や英語表現を活用して、今後どのようなユニバーサルデザインが必要となるかについて意見を話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 国内のユニバーサルデザインが生かされた多様な事例について各自で資料を探して読んで、そこから得た情報や英語表現を活用して、今後どのようなユニバーサルデザインが必要となるかについて意見を話し合う。 	
言語活動における 他教科との連携（例）	<ul style="list-style-type: none"> 【題材】 小学校「社会」「生活」 中学校「社会」 	<ul style="list-style-type: none"> 【題材】 中学校「社会」 高等学校「公民」 	<ul style="list-style-type: none"> 【題材】 高等学校「公民」 【情報収集】 高等学校「情報」 【活動（意見交換）】 高等学校「国語」 	<ul style="list-style-type: none"> 【題材】 高等学校「公民」 【情報収集】 高等学校「情報」 【活動（プレゼンテーション）】 高等学校「国語」 	

話すこと（やりとり）					
	A1	A2	B1	B2	
<p>(参考) CEFR 自己評価表</p>	<p>相手がゆっくり話し、繰り返したり、言い換えた りしてくれて、また自分が言いたいことを表現す るのに助け船を出してくれるなら、簡単なやり取 りをすることができ る。 直接必要なことやごく身近な話題についての簡 単な質問なら、聞いたり答えたりできる。</p>	<p>単純な日常の仕事の中で、情報の直接のやり取り が必要ならば、身近な話題や活動について話し合 いができる。 通常は会話を続けていくだけの理解力はないの だが、短い社交的なやり取りをすることはでき る。</p>	<p>当該言語圏の旅行中に最も起こりやすいいた いの状況に対処することができる。 例えば、家族や趣味、仕事、旅行、最近の出来事 など、日常生活に直接関係のあることや個人的な 関心事について、準備なしで会話に入ることがで きる。</p>	<p>流暢に自然に会話をすることができ、母語話者と 普通にやり取りができる。 身近なコンテキストの議論に積極的に参加し、自 分の意見を説明し、弁明できる。</p>	
<p>想定される 学校種・教科（科目）等</p>	<p>小学校高学年・外国語 + 中学校・外国語</p>	<p>中学校・外国語 + 高等学校・外国語（必修教科目）</p>	<p>高等学校・外国語（選択科目）</p>	<p>高等学校・外国語（選択科目） + 専門教科英語 等</p>	
<p>国の指標形式の 主な目標</p>	<p>□挨拶やごく短い簡単な指示に応答することが できるようにする。 □相手のサポート（ゆっくり話す、繰り返す、言 い換える、自分が言いたいことを表現するの に助け船をだしてくれる など）があれば、自分 に関することについてごく簡単な質問に答え ることができるようにする。</p>	<p>□日常生活や自分に関連した事柄に関する短い 簡単なやりとりをすることができるようになる。 □身近な話題や興味関心のある事柄について、あ る程度準備をすれば、会話に参加することがで きるようになる。 □身近な話題について、簡単な英語を用いて簡単 な意見交換をすることができるようになる。</p>	<p>□公共の場所（店、駅など）において、自分の問 題を説明し、解決することができるようになる。 □身近な話題や興味関心のある事柄について、準 備をしないで会話に参加することができるよう になる。 □身近な話題や知識のある話題について、簡単な 英語を用いて情報や意見を交換することがで きるようになる。</p>	<p>□幅広い話題に関する会話に参加し、情報や自分 の意見などを適切かつ流暢に表現することが できるようになる。 □知識のある時事問題や社会問題について、幅広 い表現を用いて議論することができるよう になる。</p>	
<p>授業における主な 言語活動 (言語の使用場面の例)</p>	<p>○挨拶 ○ごく簡単な質疑応答 など ・初対面の人や知り合いと簡単な挨拶を交わす。 ・ごく短い簡単な指示に応じる。 ・自分に関するごく簡単な質問に答えたり、相手 についてごく簡単な質問をしたりする。</p>	<p>○簡単な表現を用いた短い会話 ○簡単な意見交換 など ・身近な話題について、ある程度準備をした上で、 短い会話を する。 ・身近な話題について、聞いたり読んだりしたこ とに基づき、ある程度準備をした上で、得た情 報や自分の考えや気持ちなどを伝え合う。</p>	<p>○簡単な英語を用いたダイベート ○簡単な英語を用いたディスカッション など ・身近な話題の会話において、準備をしないで自 分の考えや気持ちなどを表現する。 ・身近な暮らしにかかわる多様な考え方ができる 話題について、立場を決めて意見をまとめ、相 手を説得するために意見を述べ合う。 ・身近な話題や知識のある時事問題や社会問題に ついて、聞いたり読んだりしたことに基づき、情 報や自分の意見などを述べ合うとともに、相 手の発言について質問したり意見を述べたり する。</p>	<p>○幅広い表現を用いたダイベート ○幅広い表現を用いたディスカッション など ・幅広い話題の会話や議論において、適切に発言 の機会を獲得して情報や自分の意見などを表 現する。 ・幅広い話題の会話や議論において、人の発言を 誘ったり、相手や自分の理解を確認したり、話 を展開・発展させたりする。 ・時事問題や社会問題など幅広い話題の議論にお いて、聞いたり読んだりしたことに基づき、情 報や自分の意見などを適切かつ流暢に表現す るとともに、互いの発言を検討し、課題の解決 に向けて考えを分かち合う。</p>	
<p>言語の働き の例</p>	<p>(コミュニケーションを円滑にする) (気持ち伝える) (情報を伝える) (考えや意図を伝える) (相手の行動を促す)</p> <p>・相づちを打つ ・褒める ・説明する ・申し出る ・依頼する</p>	<p>・言い換える ・繰り返す ・聞き直す ・謝る ・報告する ・賛成する ・誘う</p> <p>・話題を変える など ・心配する など ・要約する ・推論する ・注意を引く など</p>	<p>各言語活動に応じた言語の働きを適宜選択</p>		
<p>言語活動の例 (共通話題：食)</p>	<p>食べ物好き嫌いについて、尋ねたり答えたりす る。</p>	<p>食べ物好き嫌いについて、理由なども含めて互 いに質疑応答する。また、相手から得た情報を他 者に伝える。</p>	<p>遺伝子組換え食品に関する議論を賛成・反対の立 場に分けて整理し、得た情報を交換するととも に、遺伝子組換え食品の是非についてダイベート を行う。</p>	<p>遺伝子組換え食品に関する幅広い議論をリサー チ・整理し、それに基づいて、今後の市場におけ る遺伝子組換え食品の在り方についてディスカ ッションを行う。</p>	

話すこと（発表）

	A1	A2	B1	B2
<p>(参考) CEFR 自己評価表</p>	どこに住んでいるか、また、知っている人たちについて、簡単な語句や文を使って表現できる。	家族、周囲の人々、居住条件、学歴、職歴を簡単な言葉で一連の語句や文を使って説明できる。	簡単な方法で語句をつなぐ、自分の経験や出来事、夢や希望、野心を語るができる。 意見や計画に対する理由や説明を簡潔に示すことができる。 物語を語ったり、本や映画のあらすじを話し、またそれに対する感想・考えを表現できる。	自分の興味関心のある分野に関連する限り、幅広い話題について、明瞭で詳細な説明をすることができる。 時事問題について、いろいろな可能性の長所、短所を示して自己の見方を説明できる。
<p>想定される 学校種・教科（科目）等</p>	小学校 + 小学校高学年・外国語	中学校 + 高等学校・外国語（必修教科科目）	高等学校・外国語（選択科目）	高等学校・外国語（選択科目） + 専門教科英語 等
<p>国の指標形式の 主な目標</p>	<p>□定型表現を用いて、簡単な挨拶をすることができるようにする。</p> <p>□自分や身の回りの物事に関するごく限られたことについて、簡単な語句や文を用いて話すことができるようにする。</p>	<p>□身近な事柄や出来事について、簡単な語句や文を用いて即興で話すことができるようにする。</p> <p>□身近な話題や関心のある事柄について、簡単な説明をすることができるようにする。</p> <p>□身近な話題について、自分の意見やその理由を簡単に話すことができるようにする。</p>	<p>□身近な話題や関心のある事柄について、即興で説明することができるようにする。</p> <p>□身近な話題や関心のある事柄について、ほとんどの内容に関する事柄について、自分の意見やその理由を具体的に説明するとともに、自分の意見を加えて話すことができるようにする。</p>	<p>□幅広い話題について、即興で、説明したり自分の考えや気持ちなどを話したりすることができるようにする。</p> <p>□幅広い分野のテーマについて、明瞭かつ詳細な説明をすることができる。</p> <p>□多様な考え方ができる時事問題や社会問題について、様々な見方の長所・短所を示すとともに、自分の意見を幅広い表現を用いて論理的に説明することができるようにする。</p> <p>□聴衆の反応に応じて、発表の内容や方法を調整することができるようにする。</p>
<p>授業における主な 言語活動 (言語の使用場面の例)</p>	<p>○簡単な挨拶</p> <p>○簡単な語句や文を用いた自己紹介</p> <p>○日常生活における基本的な情報</p> <p>○身近な事柄についての短い、簡単なスピーチ など</p> <p>・初対面の人や知り合いに簡単な挨拶をする。</p> <p>・自分の名前、年齢、好き・嫌い、興味のあることなどを、簡単な語句や文を用いて話す。</p>	<p>○身近な事柄についての説明（即興、準備あり）</p> <p>○身近な話題に関する短いスピーチ など</p> <p>・自分に関することや身の回りのことについて、簡単な語句や文を用いて即興で説明する。</p> <p>・自分や友人、学校生活などの身近な事柄や出来事に関する情報を伝える。</p> <p>・身近な話題について、聞いた読みだりしたことに基づき、自分の意見・主張やその理由を含めて短いスピーチをする。</p>	<p>○身近な事柄についての説明やスピーチ（即興、準備あり）</p> <p>○記事、資料などの概要・要点説明</p> <p>○時事問題や社会問題に関するプレゼンテーション など</p> <p>・自分、友人、学校生活、地域社会などの身近な話題や関心のある事柄について、即興で説明する。</p> <p>・身近な話題や関心のある事柄について、関連情報や具体例などを加えながら、明瞭かつ詳細なスピーチをする。</p> <p>・関心のある分野のテーマに関する記事やレポート、資料などを読んで、伝えるべき事項を整理した上で、概要や要点を発表する。</p> <p>・時事問題や社会問題について、聞いた読みだりしたことに基づき、自分の意見・主張やその理由を論理的に伝えるプレゼンテーションをする。</p>	<p>○幅広い話題についての説明やスピーチ（即興、準備あり）</p> <p>○時事問題や社会問題に関するプレゼンテーション</p> <p>○話す速度や使用する表現の調整 など</p> <p>・幅広い話題について、即興で、概要を説明したり自分の考えや気持ちなどを話したりする。</p> <p>・幅広い分野のテーマについて、関連情報や具体例などを加えながら、明瞭かつ詳細なスピーチをする。</p> <p>・多様な考え方ができる時事問題や社会問題について、聞いた読みだりしたことに基づいて情報を整理し、様々な見方の長所・短所を示しながら自分の意見・主張やその理由を論理的に伝えるプレゼンテーションをする。</p> <p>・聴衆の反応や理解度を確認しながら話し、必要に応じて、話す速度や使用する表現などを変えらる。</p>
<p>言語の動きの例</p>	<p>(コミュニケーションを円滑にする)</p> <p>・相づちを打つ</p> <p>・褒める</p> <p>・謝る</p> <p>・報告する</p> <p>・賛成する</p> <p>・申し出る</p> <p>・依頼する</p>	<p>・話題を進展させる</p> <p>・心配する など</p> <p>・要約する</p> <p>・推論する</p> <p>・注意を引く など</p>	<p>各言語活動に応じた言語の動きを適宜選択</p>	
<p>言語活動の例 (共通話題： 職業、職業選択)</p>	<p>興味のある職業や将来就きたいと思っている職業を伝える。</p>	<p>日本では認知度が低い職業、その分野で活躍している国内外の人物などについて読んで読んで情報をもとめ、アウトラインを作成した上で発表する。また、発表内容に関する質問に答える。</p>	<p>将来の職業選択において重要視したい条件とその理由を具体的に説明するとともに、ワークライフバランスなどの視点も含め、どのような社会人生活を理想と考えるかについてプレゼンテーションを行う。また、プレゼンテーションの内容について質疑応答を行う。</p>	<p>職場で起こり得る勤務上の問題（勤務体系、業務量、業務分担など）について、グループごとに与えられた立場（社員、上司など）から解決策を出し合い、互いが合意できる結論をまとめて発表する。また、各グループからの発表を踏まえ、課題解決型のロール・プレイを行う。</p>

小・中・高等学校で一貫した目標(指標形式の目標を含む)の下で、発達段階に応じた「学習プロセス」を経ることで、思考力や判断力の深まり、外国語による表現力の向上、主体的・自律的に学習する態度の育成などを通じ、的確に理解し適切に伝え合うコミュニケーション能力を育成

資質・能力の例

小学校(中学年)

簡単な語句や表現を使って、自分のことや身の回りのことについて、友達に質問したり質問に答えたりするコミュニケーション能力

小学校(高学年)

馴染みのある表現を使って、自分の好きなものや一日の生活などにについて、友達に質問したり質問に答えたりするコミュニケーション能力

中学校

○具体的で身近な話題について、学校、地域、他教科等での学習内容等と関連付けながら、互いの考えや気持ちなどを外国語で適切に伝え合う力
○聞いたり読んだりしたことを活用して話したり書いたりして発信するコミュニケーション能力

高等学校

○日常的な話題から時事問題や社会問題まで幅広い話題について、情報や考えなどを外国語で的確に理解したり適切に伝え合ったりするコミュニケーション能力
○聞いたり読んだりしたことを活用して話したり書いたりして発信するコミュニケーション能力

指標形式の目標(「話すこと」の例)

小学校(中学年)

(例)
・自分や身の回りのごく限られたことについて、自分の気持ちなどを伝えようとするようになる。

小学校(高学年)

(例)
・身近で簡単なテーマについて、初歩的な英語で簡単なスピーチをすることができるようにする。

中学校

(例)
・身近な事柄や出来事について、簡単な語句や文を用いて即興で話すことができるようになる。

高等学校

(例)
・身近な話題や知識のある話題について、簡単な外国語を用いて情報や意見を交換し合うことができるようになる。

思考力・判断力・表現力、主体的・自律的な態度に基づく、的確に理解し適切に伝え合うコミュニケーション能力の育成

【見方や考え方の方の例】

外国語やその背景にある文化を尊重し、他者との関わりの側面から言語を捉え、目的・場面・状況等に応じて、外国語で情報や考えなどを形成・整理・再構築し、そらを活用して、外国語を話したり書いたりして適切に表現し伝え合うために考えること

・対話的な学び
・深い学び
・主体的な学びへ

概念的な知識の獲得

思考力・判断力
・表現力の育成

情意・態度の育成

「見方や考え方」の成長・発展

目的に応じたコミュニケーションのプロセス

【学習プロセス】

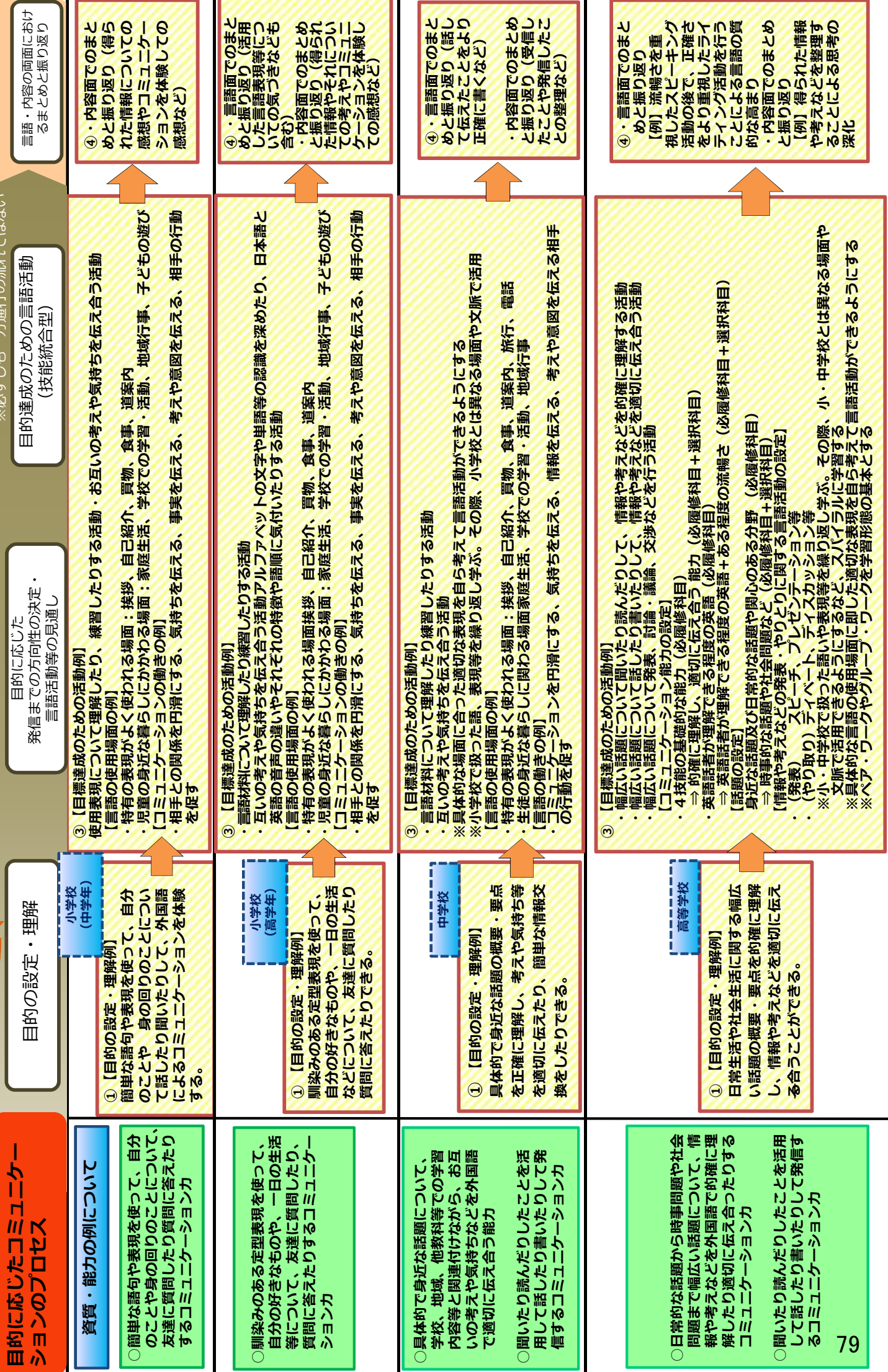
- ① 目的の設定・理解
 - ② 目的に応じた発信までの方向性の決定・言語活動等の見直し
 - ③ 目的達成のための言語活動(技能統合型)
 - ④ まとめと振り返り
- 次の活動へ

※詳細は次ページ参照

資質・能力を育成する学びのプロセス

他者への働きかけ、他者との協働 外部との相互作用

次のコミュニケーションにおける目的の設定・活動



目的に応じた発信までの方向性の決定・言語活動等の見直し

目的達成のための言語活動 (技能統合型)

言語・内容の画面におけるまとめと振り返り

資質・能力の例について

- 簡単な語句や表現を使って、自分のことや身の回りのことについて、友達に質問したり質問に答えたりするコミュニケーション力

- 馴染みのある定型表現を使って、自分の好きなものや、一日の生活等について、友達に質問したり、質問に答えたりするコミュニケーション力

- 具体的に身近な話題について、学校、地域、他教科等での学習内容等と関連付けながら、お互いの考えや気持ちなどを外国語で適切に伝え合う能力

- 日常的な話題から時事問題や社会問題まで幅広い話題について、情報や考えなどを外国語で的確に理解したり適切に伝え合ったりするコミュニケーション力
- 聞いたり読んだりしたことを活用して話したり書いたりして発信するコミュニケーション力

小学校 (中学年)

① 【目的の設定・理解例】
簡単な語句や表現を使って、自分のことや身の回りのことについて話したり聞いたりして、外国語によるコミュニケーションを体験する。

小学校 (高学年)

① 【目的の設定・理解例】
馴染みのある定型表現を使って、自分の好きなものや、一日の生活などについて、友達に質問したり質問に答えたりできる。

中学校

① 【目的の設定・理解例】
具体的に身近な話題の概要・要点を正確に理解し、考えや気持ち等を適切に伝えたり、簡単な情報交換をしたりできる。

高等学校

① 【目的の設定・理解例】
日常生活や社会生活に関する幅広い話題の概要・要点を的確に理解し、情報や考えなどを適切に伝えることができる。

③ 【目標達成のための活動例】
使用表現について理解したり、練習したりする活動・お互いの考えや気持ちを伝え合う活動
【言語の使用場面の例】
・ 特有の表現がよく使われる場面：挨拶、自己紹介、買物、食事、道案内
・ 児童の身近な暮らしにかかわる場面：家庭生活、学校での学習・活動、地域行事、子どもの遊び
【コミュニケーションの動きの例】
・ 相手との関係を円滑にする、気持ちを伝える、事実を伝える、相手の行動を促す

③ 【目標達成のための活動例】
言語材料について理解したり練習したりする活動
・ 互いの考えや気持ちを伝え合う活動アルファベットの文字や単語等の認識を深めたり、日本語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴や語順に気付いたりする活動
【言語の使用場面の例】
・ 特有の表現がよく使われる場面挨拶、自己紹介、買物、食事、道案内
・ 児童の身近な暮らしにかかわる場面：家庭生活、学校での学習・活動、地域行事、子どもの遊び
【コミュニケーションの動きの例】
・ 相手との関係を円滑にする、気持ちを伝える、事実を伝える、相手の行動を促す

③ 【目標達成のための活動例】
言語材料について理解したり練習したりする活動
・ 互いの考えや気持ちを伝え合う活動
※ 具体的な場面に合った適切な表現を自ら考えて言語活動ができるようになる
【言語の使用場面の例】
・ 特有の表現がよく使われる場面：挨拶、自己紹介、買物、食事、道案内、旅行、電話
・ 生徒の身近な暮らしに関わる場面家庭生活、学校での学習・活動、地域行事
【コミュニケーションの動きの例】
・ コミュニケーションを円滑にする、気持ちを伝える、情報を伝える、考えや意図を伝える相手の行動を促す

③ 【目標達成のための活動例】
幅広い話題について聞いたり読んだりして、情報や考えなどを的確に理解する活動
・ 幅広い話題について話したり書いたりして、情報や考えなどを適切に伝え合う活動
【コミュニケーション能力の設定】
・ 4技能の基礎的な能力 (必履修科目)
⇒ 的確に理解し、適切に伝え合う能力 (必履修科目 + 選択科目)
・ 英語話者が理解できる程度の英語 (必履修科目)
⇒ 英語話者が理解できる程度の英語 + ある程度の流暢さ (必履修科目 + 選択科目)
【話題の設定】
身近な話題及び日常的な話題や関心のある分野 (必履修科目)
⇒ 時事的な話題や社会問題など (必履修科目 + 選択科目)
【情報や考えなどの発表・やりとりに関する言語活動の設定】
・ (発表) スピーチ、プレゼンテーション等
・ (やり取り) ディベート、ディスカッション等
※ 小・中学校で扱った語いや表現等を繰り返し学ぶ。その際、小・中学校とは異なる場面や文脈で活用できるようにするなど、スライラルに学習する
※ 具体的な言語の使用場面に即した適切な表現を自ら考えて言語活動ができるようにする

④ ・ 内容面でのまとめと振り返り (得られた情報についての感想やコミュニケーションを体験しての感想など)

④ ・ 言語面でのまとめと振り返り (活用した言語表現等について含む)
・ 内容面でのまとめと振り返り (得られた情報やそれについて考えたことやコミュニケーションを体験しての感想など)

④ ・ 言語面でのまとめと振り返り (話して伝えたことをより正確に書くなど)
・ 内容面でのまとめと振り返り (受信したことや発信したことの整理など)

④ ・ 言語面でのまとめと振り返り
【例】 流暢さを重視したスピーキング活動をより重視したライティング活動を行うことによる言語の質的な高まり
・ 内容面でのまとめと振り返り
【例】 得られた情報や考えなどを整理することによる思考の深化

次期学習指導要領の3・4年生の年間指導計画 イメージ(案) たたき台

別添11

短時間学習は…各単元の内、系統性を確保するため、まとまりのある学習と、「繰り返しの学習」や「深まりのあるコミュニケーション活動」等とを関連付けながら、アルファベットの文字、語彙や表現の定着を図る。

平成27年12月21日

小学校3年生外国語活動週1コマ (Hi, friends! 1をベースにしたイメージ)				
単元名	時間	題材	単元目標例	HFとの関連
Lesson 1 Hello!	3	世界の言語 挨拶	・世界には様々な言語があることに気付く。英語でのあいさつの表現に慣れ親しみ、積極的に自分の名前を言って挨拶しようとする。	1-L1
Lesson 2 I'm happy.	2	外国のジェスチャー ジェスチャー 感情・様子	・表情やジェスチャーをつけて相手に感情や様子を積極的に伝えようとする。	1-L2
Lesson 3 How many apples?	4	教え方 数	・数の言い方に慣れ親しみ、身の回りのものを積極的に数えようとする。	1-L3
Lesson 4 My rainbow	5	世界の虹の色 色 I like ~. Do you like ~?	・英語と日本語の音の違いや、色について様々な見方があることに気付く。好きなものを表わしたり尋ねたりする表現に慣れ親しむ。積極的に好きなものを尋ねたり答えたりしようとする。	1-L4 1-L5
Lesson 5 絵本教材 活用単元	5	動物の鳴き声の聞こえ方 動物・体の部位 位置	・言語によって動物の鳴き声の表し方が違うことに気付くとともに、動物、体の部位、位置の言い方に慣れ親しみ、まとまりのある話を聞いてその概要を理解しようとする。	2-L7
Lesson 6 This is my favorite.	4	食べ物・野菜 What do you like?	・食べ物や色などの言い方や、何が好きかを尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しみ、積極的に何が好きなかを尋ねたり答えたりしようとする。	1-L6
Lesson 7 My name	4	アルファベット大文字 What do you want?	・アルファベットの読み方や、何が欲しいかを尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しみ、積極的に欲しいものを尋ねたり答えたりしようとする。	1-L6
Lesson 8 Welcome to our museum	4	形・色 形状を表す語 What do you want?	・欲しいものを尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しみ、積極的に欲しいものを尋ねたり答えたりしようとする。	1-L6
Lesson 9 Who am I?	4	動物 形状・様子を表す語	・動物や形状・様子を表す語に慣れ親しみ、あるものを説明したり、あるものについて尋ねたりしようとする。	1-L7

小学校4年生外国語活動週1コマ (Hi, friends! 1をベースにしたイメージ)				
単元名	時間	題材	単元目標例	HFとの関連
Lesson 1 Nice to meet you.	4(4)	世界の言語・挨拶 アルファベット小文字 What do you want?	・様々な挨拶の仕方があることに気付くとともに、初めてであった人との挨拶の仕方に慣れ親しむ。	1-L1
Lesson 2 Turn right.	4(8)	外国の学校 教室 学校	・学校の中のものや教室名の言い方に慣れ親しみ、積極的に友達を案内しようとする。	2-L5
Lesson 3 How many?	4(12)	昆虫・動物 身の回りの物 How many?	・身の回りのものや数の言い方に慣れ親しみ、身の回りの物の数を積極的に尋ねたり答えたりしようとする。	1-L3
Lesson 4 What's this?	5(17)	アルファベット大小文字 What's this?	・世界には様々な文字があることや、身の回りにはアルファベットの文字で表されているものが多いことに気付く。身の回りのものや、あるものが何かを尋ねる表現に慣れ親しみ、積極的にあるものが何かを尋ねたり答えたりしようとする。	1-L5
Lesson 5 Good morning!	5(22)	動作 気持ちを表す語	・動作や気持ちを表す言い方に慣れ親しみ、まとまりのある話を聞いてその概要を理解したり、積極的に場面にあったセリフを言ったりしようとする。	2-L7
Lesson 6 This is for you.	4(26)	アルファベット大小文字 身の回りの物 What ~ do you like?	・アルファベットの文字の読み方や身の回りのものの言い方、何が好きかを尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しみ、積極的に何が好きかを尋ねたり答えたりしようとする。	1-L6
Lesson 7 Ten years!	4(30)	気持ちを表す語 身の回りの物 職業 It's ~.	・気持ちを表す語や身の回りの物の言い方に慣れ親しみ、積極的に大事にしているものについて紹介したり、聞いたりしようとする。	1-L2
Lesson 8 What's this? Quiz Show	5(35)	動物 形状を表す語 色・形状 What's this?	・形、色、形状等の語いやそれらに関する表現に慣れ親しみ、あるものについて積極的に説明しようとする。	1-L7

次期学習指導要領の5・6年生の年間指導計画 イメージ(案) たたき台

別添12

短時間学習は…各単元の内、系統性を確保するため、まとまりのある学習と、「繰り返しの学習」や「深まりのあるコミュニケーション活動」等と関連付けながら、アルファベットの文字、語彙や表現の定着を図る。

平成28年1月12日

小学校5年生外国語年間70コマ

単元名	時間	題材等	目標例(二重下線部は、HFに設定されていない部分)	HFとの関連・フラッシュカード
Lesson 1 Hello, everyone.	5(5)	挨拶・自己紹介 I like/ don't like ~. 反応	・自分のことについて <u>簡単に紹介できるようにする</u> とともに、自分のことについて相手意識をもって伝え合おうとする。	1-L1 ③
Lesson 2 Do you have "a"?	8(13)	身の回りの英語表記 アルファベット大小文字 Do you have ~?	・身の回りにはアルファベットの文字で表されているものが多いことや、 <u>アルファベットには読み方と音があることに気付き、アルファベットの文字を読んだり、あるものを持っているかどうかを尋ねたり答えたりすることができるようにする</u> とともに、積極的にアルファベット表記に関するクイズについてアルファベットの文字を読んだり書き写したり、あるものを持っているか尋ねたり答えたりしようとする。(別資料:青字部分のねらい達成補完のための短時間学習を含む本単元計)	2-L1 ④
Lesson 3 When is your memorial day?	8(21)	月日・季節 When is ~? Why?	・世界には様々な行事があることに気付き、 <u>日程を尋ねたり答えたりすることができるようにする</u> とともに、 <u>自分の大切な日についてを理由を含めて積極的に伝え合ったり、丁寧にアルファベットの文字を書き写したりしようとする。</u>	2-L2 ④
Lesson 4 This is ME!	8(29)	スポーツ・楽器 身の回りのもの・動作 I can ~. Can you ~?	・人それぞれであることに気付き、 <u>物語のあらすじを聞き取ったり、できることを尋ねたり答えたりすることができるようにする</u> とともに、自分のできることやできないことを積極的に伝え合い、 <u>丁寧にアルファベットの文字を書き写そうとする。</u>	2-L3 ④
Lesson 5 Turn right.	7(36)	建物 道案内 Where is ~?	・世界の町の様子から日本との相違点に気付き、 <u>道を探ねたり、道案内したりできるようにする</u> とともに、相手意識をもって道案内したり、 <u>正確にアルファベットの文字を書き写したりしようとする。</u>	2-L4 ④
Lesson 6 This is our town!	8(44)	自然 食べ物 特産物等 This is ~.	・自分たちの町の様子から、世界との共通点に気付き、 <u>自分たちの住む町について伝え合うことができるようにする</u> とともに、自分たちの住む町のお薦めを相手意識をもって紹介しようとし、 <u>正確にアルファベットの文字を書き写したりしようとする。</u>	新規 ⑧
Lesson 7 My school schedule	8(52)	教科名 曜日 身の回りのもの I study ~ on Monday.	・世界の同年代の子供の学校生活から自分たちとの相違点や共通点、 <u>単語はアルファベットの文字がまとまってできていることに気付き、学校生活について説明しあったり、正確にアルファベットの文字を書いたりできるようにする</u> とともに、お気に入りの時間を入れた時間割を積極的に伝え合ったりしようとする。	1-L8 ③
Lesson 8 Healthy menu	8(60)	食べ物 食習慣 What would you like?	・世界には様々な食生活があることに気付き、 <u>丁寧に欲しい物を尋ね、答えたり、正確にアルファベットの文字を書き写すことができるようにする</u> とともに、健康に良い食事について、積極的に伝えようとする。	1-L9 ④
Lesson 9 We are good friends.	10(70)	世界の童話 日本の童話 Let's ~.	・世界には子供たちに様々な願いを込めて書かれた童話等があることや、 <u>アルファベットの文字がまとまって単語になることに気付き、まとまった英語の物語を聞いて、内容がわかり、場面に合ったセリフを言ったり、正確にアルファベットの文字を書き写すことができるようにする</u> とともに、積極的に英語で物語の内容を伝えようとする。	2-L7 ④

【短時間学習の例・イメージ】
例えば、Lesson 3
自分の大切な日に
ついて

○季節・月日などの語彙や日程を尋ねたり答えたりする表現を

主な目標と活動

- ・「チャンツ」を通して、季節・月日などの単語に慣れる。
- ・「ステレオゲーム」を通して、月日などの単語や日程の尋ね方を使えるようにする。
- ・補助教材ワークシートなどを活用してアルファベットの文字を丁寧に書き写すようにする。

この短時間学習を
45分+15分で
60分として、

小学校6年生外国語年間70コマ

単元名	時間	題材	目標例	HFとの関連・フラッシュカード
Lesson 1 Hello, nice to meet you.	5(5)	挨拶 自己紹介 I'm ~.	・世界には様々なあいさつの仕方があることに気付くとともに、 <u>簡単なやりとりをして自分について伝え合ったり、自分の名前を正確に書いたりすることができるようにする</u> とともに、自分について相手意識をもって伝えあったりしようとする。	1-L1 ③
Lesson 2 This is our school.	8(13)	教室名 身の回りの物 形状・気持ちを表す語 I like ~.	・世界の子供たちの生活から自分たちとの共通点や相違点に気付くとともに、 <u>自分の学校について簡単に説明したり、学校名を正確に書いたりすることができるようにする</u> とともに、 <u>自分たちの学校について自分の考えを積極的に伝えあったりしようとする。</u>	2-L4 ④
Lesson 3 Let's go to Italy.	8(21)	世界の国々 生活 I want to go to ~.	・世界の国々の様子から日本との共通点や相違点に気付き、 <u>行ってみたい国についてその理由とともに簡単に説明したり、国名を正確に書き写したりできるようにする</u> とともに、お薦めの国について相手意識をもって伝えあったり、 <u>単語を推測して読んだりしようとする。</u>	2-L5 ④
Lesson 4 Welcome to our country.	8(29)	日本の特徴 ~ is ~.	・日本の様子から世界の国々との共通点や相違点に気付き、 <u>日本について伝えることができるようにする</u> とともに、 <u>日本の良さについて自分の考えを相手意識をもって簡単に紹介し合い、単語を正確に書き写したり、推測して読んだりしようとする。</u>	新規 ⑧
Lesson 5 What time do you get up?	8(37)	一日の生活 時刻 I get up at 7:00.	・世界の人々は様々な生活の中で精一杯生活を営んでいることや、時差があること、 <u>英語と日本との表記の仕方の違いに気付き、自分の一日の生活について伝え合うことができるようにする</u> とともに、自分の大切な日についての時間について積極的に伝え合い、 <u>単語を正確に書き写したり、推測して読んだりしようとする。</u>	2-L6 ③
Lesson 6 A letter to	8(45)	動物 ~ is chasing ~.	・世界の様々な課題や、 <u>英語の語順に気付き、まとまった内容の話を聞いて理解し、自分のできることを伝え合い、単語を正確に書き写したりできるようにする</u> とともに、世界の様々な課題に対して自分ができていることを積極的に伝え合ったり、 <u>単語を推測して読んだりしようとする。</u>	2-L3-L7 ⑧
Lesson 7 My memorial event	8(53)	学校生活 My memorial event is ~.	・世界の学校生活の様子から日本との相違点や共通点に気付き、 <u>6年間の小学校生活について自分の考えを伝え合ったり、単語を正確に書き写したりすることができるようにする</u> とともに、 <u>思い出に残る行事についてその理由を含めて積極的に伝え合ったり、単語を推測して読んだりしようとする。</u> (下線部のねらい達成補完のための短時間学習を含む本単元計画)	新規 ⑧
Lesson 8 What do you want to be?	8(61)	職業 気持ちを表す語 I want to be a teacher.	・世界には様々な夢をもつ同年代の子供たちがいることに気付き、 <u>つきたい職業について伝え合ったり、単語を正確に書き写したりすることができるようにする</u> とともに、自分の将来について積極的に伝え合ったり、 <u>単語を推測して読んだりしようとする。</u>	2-L7 ④
Lesson 9 Junior High School Life	9(70)	中学校生活 I want to enjoy ~.	・中学校生活についてのまとまった話を理解し、 <u>自分の考えを表現したり、単語を正確に書き写したりできるようにする</u> とともに、中学校生活の期待について相手意識をもって簡単なスピーチをしたり、 <u>単語を推測して読んだりしようとする。</u>	新規 ⑧

【短時間学習の例・イメージ】
例えば、Lesson 6
学校行事について
主な目標と活動

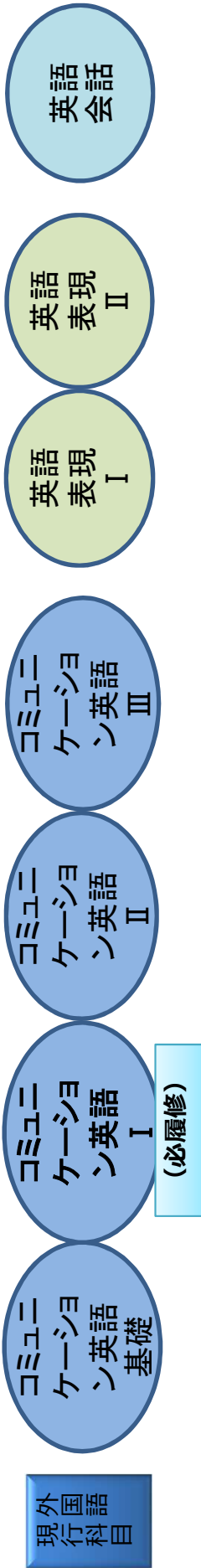
○思い出の学校行事について自分の考えを表現するとともに、思い出の学校行事名を正確に書き写すことができる。

- ・「学校行事かるた取りゲーム」を通して、学校行事を表す単語に慣れる。
- ・「チャンツ」を通して、行事の言い方を

るようにする。
「学校行事名の文字をなぞる」活動を

高等学校における英語科目の改訂の方向性として考えられる構成（たたき台）

別添13



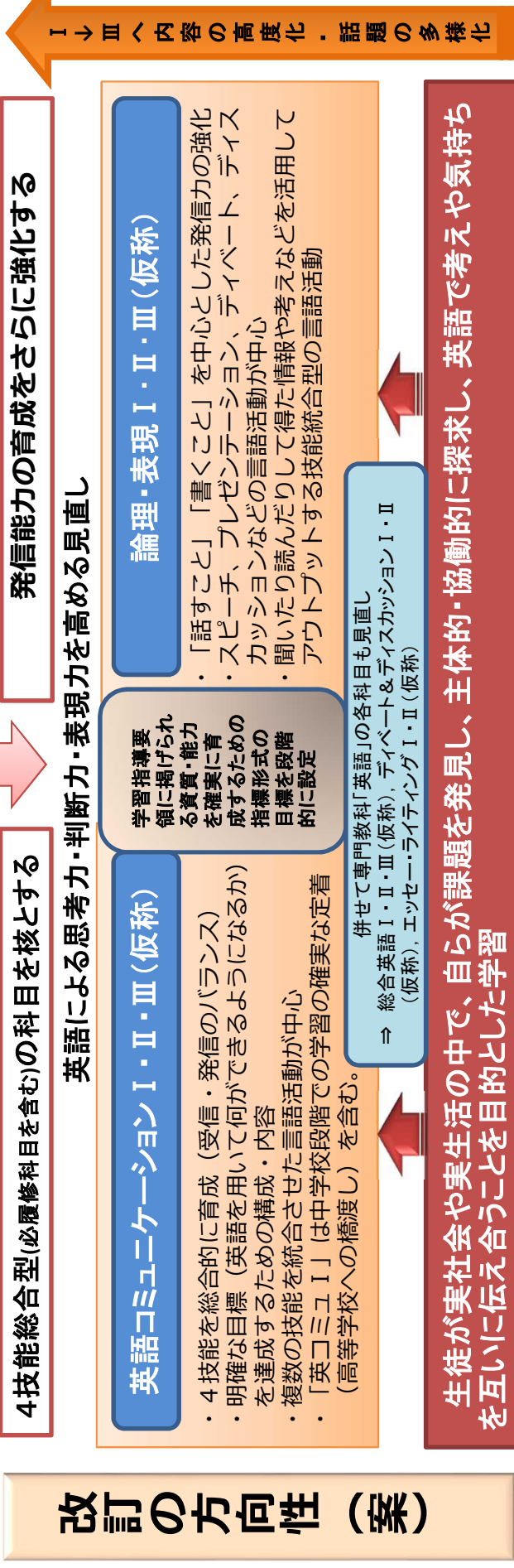
課題

- ・生徒の英語力について、4技能全般、特に「話すこと」と「書くこと」の能力が課題
- ・英語の学習意欲に課題
- ・言語活動、特に、統合型の言語活動（例：聞いたり読んだりしたことに基づいて話したり書いたりする活動）が十分ではない
- ・グローバル時代において、英語学習に関する生徒の多様化への対応が必要

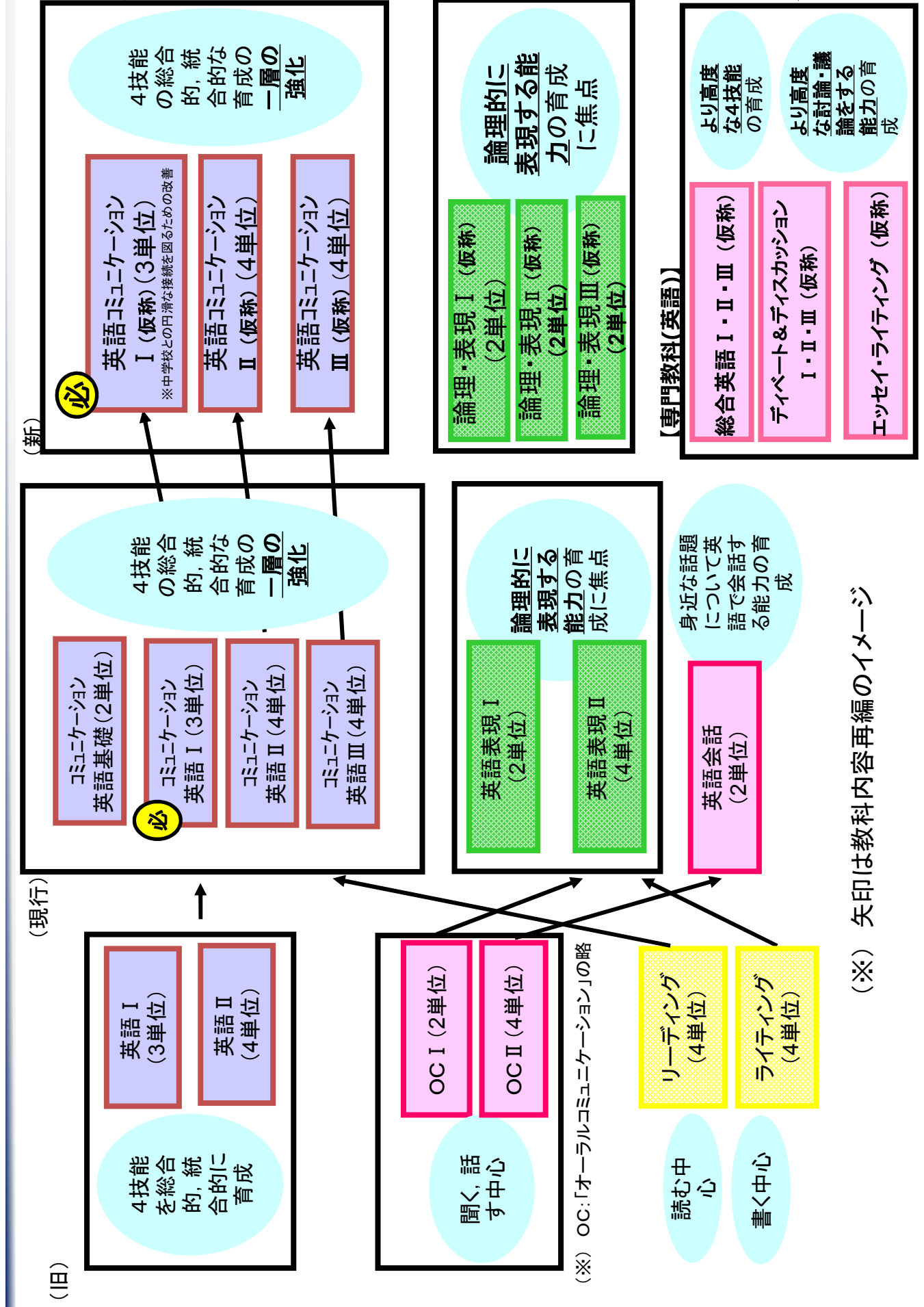
発信力が弱い

資質・能力等 育成すべき

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、他者を尊重し、聞き手・話し手・読み手・書き手に配慮しながら、コミュニケーションを図ろうとする態度の育成とともに、日常的な話題から時事問題や社会問題まで幅広い話題について、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝え合ったりする能力を養う



(参考) 現行学習指導要領の高等学校における英語科目の見直し等(たたき台) 平成28年1月12日現在



(※) 矢印は教科内容再編のイメージ